



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナウトピア : 直接行動によるサンフランシスコの 対抗文化的社会運動
Author(s)	堀田, 真紀子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 17, 27-106
Issue Date	2013-10-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53601
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCT_1703_horita.pdf



ナウトピア

—直接行動によるサンフランシスコの 対抗文化的社会運動—

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
堀田真紀子

abstract

Nowtopia: Counter Cultural Movement in San Francisco, Based on Direct Action

HORITA Makiko

Nowtopians are inventors and improvisational spirits who bring an artistic approach to important tasks that are ignored or undervalued by market society. Their exploration of work locates an important thread of self-emancipatory class politics beyond the traditional arena of wage-labor in capitalism.

1 問題意識の発端

今日の日本社会を覆う閉塞感には堪え難いものがある。個人の意識の変化の速度に、社会制度の変化が全然ついていっていない。そのために、意識をいち早く新たにさせた人たちほど、膠着状態の重荷や矛盾を一新に背負うことになる。

古い制度の蛹の殻を打ち破るアクターとして期待されるのは、まずは社会運動だろう。3.11以降の脱原発運動の高まりは、もちろん希望をもたせてくれるものだ。とはいえ、そこでも—とくに地方都市では—たとえば署名をあつめて政治家に送る、あるいは議会に自分たちの代表を送るなど必要な変化を、代表民主制のシステムを使って、中央からトップダウンに起こそうといった発想がまだまだ支配的であるように思う。殻をやぶるはずの運動が、殻に依存ししがみついているという本末転倒な状態がそこにあるように思うのである。

もちろん「新しい社会運動」と呼ばれる自己実現的、祝祭的な運動も少しずつではあるが、浸透しつつある。これは、社会運動そのものを、新しい社会の実例提示へとつなげていく可能性を秘めたものだ。また、私の友人の福島からの北海道への移住者、飛澤紀子さんのように、「福島からの子供たちの集団疎開の嘆願の運動に加わって、霞ヶ関に行って、文科省の官僚の人たちにも会いに行ったけど、組織の論理を抜け出て、人として人の生死にかかわることを、真剣に、親身になって考え、考え、応答してくれる人はほとんどいなかった。それに対して『俺たちの子供は文科省に殺されるようなものだ』と怒っていたひとたちもいるけれど、子供の命を文科省に預ける方が変。怒るのもエネルギーが無駄だと思う。自分たちの身は自分たちで守るしかない」。ときっぱりと言ってのける人もいる。彼女が霞ヶ関の人たちに対して怒っても仕方がないと思うのは、彼らもある意味、病んだ社会の犠牲者だから。組織の論理の中でしか動けない根本的な意味で無責任な人たちに大切な命を預けるほど危険なことではない。つまり自分の身は自分で守るしかない。と同様、そんな人たちがこれ以上出てこない社会、組織の論理を離れて、個人として全責任を負い、本音を語り実行できる、自立した人たちからなる社会を、私たちは自分の手でつくっていくしかない。¹北海道の長沼町に移住してからの彼女は、地元の人たちともどんどん手を結び、有機農業のコミュニティガーデン、地元の農家やものづくりをささえるショップを兼ねたコミュニティカフェの運営をはじめた。夢はまだまだ大きく、参加者それぞれの特技才能を持ち寄る自己実現型、自給自足コミュニティをつくることだ。

しかしこのようなケースはまだまだとても主流とはいえない。しかしこんな風に、嘆願するにせよ、怒りをぶちまけるにせよ、時代遅れの硬直した制度に対する対抗的なアクションにかかずらうのはやめて、日常的、草の根的な実践のレベルから、新しい世界をコツコツつくっていくことこそ、閉塞状況を打開するのに必要なことではないだろうか？ 人任せにしたり、責任転

▶1 2012年、7月6日、「のんちゃんカフェ」（北海道夕張郡長沼町）での聞き取り。

嫁しないで、まずは自分でできるところから、自分の見たい世界をつくっていくDIY精神が、何にもまして重要になってくる。

そもそも代表民主制の政治を介して社会が変わると樂觀することが致命的なのは、大企業が経済経由で政治にかかる圧力をはじめとした資本主義の現実を甘く見すぎていることにある。実際、一国の経済的な命運を左右するほどの規模の大資本が国境を越えて動く中、政治家ができることは限られている。誰が選ばれても同じとまでは言わないが、資本の撤退をまねき、国に失業者をあふれさせたくなければ、関税を撤廃させ、各種規制を緩和するとうように、資本の側の言い分をきくことを余儀なくさせられるシナリオを、大筋としてたどるのは避けられない。

政治家より実質的にはずっと社会を規定する力をもつこうした巨大資本の流れはしかし、無敵に見えるのはその外見だけで、実は弱点がある。私たち一人一人が、生活や労働、消費によってこれを不断に支えているからこそ、そのように存在しているということ。無数の人たちがいつせいに生き方を変えると、そちらの方も変化を余儀なくされる。つまり私たちの日々の生き方の変化こそが問われているのである。

つまり、代表民主主義の手続きを介した政治は、資本の権力を反映させているにすぎない今、民主主義を機能しえるものにするには、無数の人たちが「自分が見たい世界を実現するには、自分がやるしかない!」と組織的に生き方を変えて、直接行動で示すことだと思うのである。

このように考えていくと、現行の代表民主主義が、政治的に働くどころか、今、草の根から社会を変えるほとんど唯一の道である、新しい世界をつくるDIY的な実践に不可欠な、私たち一人一人の主体性やリーダーシップを萎えさせるおそれがあることが見えてくる。さすがに政治家を指導者としてあおぐ人は少なくなったが、それでも私たちは、自分たちの意思を直接実現しようとするよりも、まずはこれを政治家に託そうとする。いわゆる政治好きといえ、ふつう、自分がひいきにしている政治家を応援し、そこにいたるまでのかけひき、闘争のあらゆる細部に詳しい人、あるいは首尾よく当選して議会へ送り出した政治家がちっとも自分たちの思う通りに動いてくれない不平不満を、政治議論と称してまくしたてる人を指す。しかしそうしたいいわゆる「政治」に新しい世界をつくる力は、ほとんどない。

ようするにこのシステムにどっぷり浸っていると、人任せの癖がついてしまい、自分自身が勇気ある行動の担い手になることなど、思いつきもしなくなってしまう危険がある。政治の名の下にそうした不毛なことに人がうつつを抜かしている限り、社会を本当に変えるに必要な、無数の主体的な人々の勇気ある行動の怒濤のような波をつくることはいつまでたってもできない。

何より、自分の見たい世界をつくれるのは、自分しかいない、というあたりまえの事実が、そこでは見過ごされてしまう。中国系アメリカ人のアクティビスト、グレース・リー・ボッグは、オバマが最初に当選したときの人々の熱狂のさなか、「あなたが探しているリーダーはあなた自身なのよ」と言ったものだった。このとき熱狂していたオバマの支持者の多くは、その後実際、この言葉が真実であることを思い知らされることになる。

あらゆる人がリーダーになること、それは、「自分がやるしかない」といったイニシアティブを皆が握るというだけにとどまらない。リーダーの影に隠れて責任逃れをすとか、あなたまかせの依存心と手をきること。同じことをガンジーは、「あなたが見たい変化にあなた自身がなりなさい」と述べたが、そこには、世界があるべき状態にないのは、まずはあなたがそうでないからだという含意もある。あらゆるひとがリーダーになるとは、まずは自分が変化を起こす主体、変化そのものになることで、起る変化に対して、それぞれ自分が責任を引き受ける、責任の平等主義でもある。お金も権力も、才能もない自分には、社会を変える力もないといった無力感も、言い逃れにならない。というのも、それらは、トップダウン的に、外から社会を強制的に変えるときに必要な、社会変革の道具にすぎないからである。内側からなされる社会変革は、私たちが所有する力や富、あるいはそこから帰結する他者に対する支配力、強制力の有無とは、何の関係もない。変化はむしろ、何も持たない、捨て身状態の私たちの存在、生き様そのものから発する自発性、勇気、クリエイティビティからしか生まれないからである。それならば、既得利益者もそうでない人も、決意次第でいつでも行使できる。ヨーゼフ・ボイスの言葉をかりれば、私たちが革命を起こすというより「私たちが革命なのだ」。

2 実践的な文化の創造が鍵

しかしどうすれば、そのように多くのひとたちがいつせいに生き方を変えるなんてことが可能になるだろう？

サンフランシスコで60年代に活躍したゲリラ・シアター、ディガーズのオリジナルメンバーの一人、ペーター・コヨーテは、インタビューで、「カウンターカルチャーは社会を変えたか？」とたずねられたとき、直接政治を変えられなかったせいで、カウンターカルチャーは社会的に無力だったように見えるけれど、それは単なる表面上の話。特定のリーダーがいない代わり、無数の人たちのアイデアやイメージのクリエイティブな創造とその勇気ある実践が積み重ねられたのだ。それが人々のイメージやインスピレーションの共有のプールとなって人々の生活に浸透し、価値観やライフスタイルの選択肢や基準、常識を変化させという道を経由しながら、長期的に見ると、ドラマチックに社会を変えてきたのだと述べている。²例として彼があげるのは、女性やマイノリティの地位の変化や、アメリカ、とくに西海岸での、ヨガや禅、代替医療といった東洋からのスピリチュアリティの浸透と定着など。いずれも50年代には予想もつかなかった世界が現にそこにある。

日本では、スピリチュアリティの浸透ぶりはいまいち、マイノリティの地位はまだまだだが、女性の社会進出の可能性は、ここ50〜60年で飛躍的にふくらんだといえるだろう。ペーター・コヨーテも言うように、それはここでも、直接政治を経て実現されたのでもなければ、あるいは一人の突出した指導者

▶2 サンフランシスコのカウンターカルチャーにおいて、パークレーのニュー・レフトと、ヘイト・アシュベリーのヒッピーの間をつなぐ役割を果たした「ディガーズ」というパントマイム劇団のメンバー、ペーター・コヨーテへの2009年、サンフランシスコ、Booksmithでの、ForaTVによるインタビューを参照。Agents of Change: Coyote says Counterculture prevailed. http://www.dailymotion.com/video/xgkqyn_agents-of-change-coyote-says-counterculture-prevalenced_news

の下に実現されたのでもない。むしろ、自己実現への希求にかられた一人一人の勇気ある、ときには思い切った名もない無数の人々の行動の積み重ねによるものだった。それらの行動が、直接見聞きされたり、メディアを経て共有されるうちに、議論をまきおこし、人の心を打ち勇気づけ、連鎖反応を起こす。そうこうするうちに、何が可能か、何が許され、許されないか、何が素敵か…といった社会的合意の線がすこしずつずらされていったのである。

このように、近年、社会をこれまで実際に変えた力は、同じ理念を共有するものの、あくまで主体的に担われた多様な行動の蓄積で、草の根から、道なきところを皆で踏みかため、道をつくっていくことによるものだった。

実際、このような実践と文化の混合体による徐々になされる変化の過程こそ、資本がすべてを統べる社会においてさえ、実績をあげてきたほとんど唯一の社会変革のかたちなのだが、それはこれまでずっと見逃されてきた。このような過小評価の背景には、政治経由でトップダウンの道を通ってはいったものではない上、そこに華々しい立役者、指導者、ヒーローがいたわけでもないこと、また一瞬で全てが変わると言ったドラマチックな展開もなく、目立たないところで徐々にじわじわ進むものだったことがあげられる。つまりマスコミが好むスペクタクルのあらゆる特徴に欠けていたのだ。

しかし内側からなされる本物の社会変革とは、そもそもそうしたものではないだろうか？ リーダーのような中心がないだけでなく、その実践は、私たちの日常生活そのものと不可分に溶けあっているもので、目立たない。しかもそこでは、あらゆるものが影響し合い、からみあっているもので、一部を切り離すなんて不可能で、どの地点から誰の力で成し遂げられたなどとはとてもいえない。

人の意識を変え、行動も変えるようなクリエイティブで、勇気ある、新機軸をうちだす表現や実践がまずあって、それらが互いに参照されるなかで、同種の表現や実践の連鎖反応を呼び起こしていく。それが広まるにつれて、イメージやアイデアのプール、人を鼓舞してやまないインスピレーションと情熱の源、クリエイティブな実践を次々と生み出す豊穡なカオスのようなものが共有されて、一つの鉱床から生まれたびっしりとした水晶のように、新しい世界を、内側から生み出していく。

新しい世界をそこから生み出す共有されたこのカオス、鉱床を何と呼ぶべきだろうか。そこを参照しながら新たな創造がなされ、なされた創造が再びそこへ流れこみ蓄積されて次の創造のころみの参照点となる。そうしたアイデアやインスピレーションの共有のプールをさす言葉といえば、ひとまず、「文化」という言葉を使うのが適切だろう。しかし文化といっても、博物館や美術館の殿堂入りをした権威としての文化でもなければ、専門家にしかわからない高度に分化した文化でもない。私たちの日常にあまねく浸透し、生活の仕方を方向づけていく実践力を持つ文化。私たちをインスパイアし、それまでずっと眠っていた夢を呼び覚まし、秘められた欲望をかきたて、自分自身、そんな風に生きてみたいと思わせる。というより、そう思ったときには、すでにもうその実践に向かっている。その様子がまた、発達したメディア、情報網で即座に共有され、共有の文化蓄積になる。それほど実践と一体化した

文化である。

新しい世界をつくる実践的な創造力を充填したこの文化は、人の欲望をかき立て、それを実現するために、生活全体を情熱的に、ときにはマニアックに再編成する力を持つ。そうした点は、サブカルチャーに近いといえる。しかし一般的なサブカルチャーと違って、個人的な圏域で自閉する趣味や消費に終わらずに、古い社会の慣習や規範の壁を破るのもいとわない。たとえば冷やかしのハラスメントに耐え、家の恥と家族に非難されながらも、職業女性の道を歩んだ祖母の世代の女性は、社会進出の草分け的な役割を果たし、既成事実をつくってしまうというかたちで、自分の情熱を期せずして社会変革のために注ぎこむことになった。そんな風に自己実現であると同時に、社会形成的でもあるのが、新しい世界をつくるこの実践的文化の特徴だ。

一般的なサブカルチャーと袂を分かつこの文化のもう一つの特徴は、強靱な個性、主体性を持った担い手をその前提とするところだろう。メディアがその浸透に大きな役割を担っているところはサブカルチャーと変わらないが、単純に模倣したり、ただ消費することでその担い手には決してなれない。たとえば一族初めの職業婦人になる決意をした大正期の女性のように、前例がまわりにほとんど見当たらないことを、自分で全責任を引き受ける主体性と、クリエイティビティで敢行し、必要とあれば旧い世界と切り結ぶ実践は、そこにかなり意地っ張りの、自らによって立つ個人の存在を前提とする。

とはいえこの強烈な個人主義は、協働への道をふさぐものではない。実際のところはその逆で、一つ一つの実践が、〈個〉のきわみから生まれた独創的で思い切った、勇気ある表現になればなるほど、それは新しい世界を作る最先鋭の前線に杭を打ちこむ英雄的な貢献になる。あるいは多くの人を感動させるものになり、深く力強い交感、感化をさざ波をたてて広げていき、鼓舞された人たちが、同種の実践にどんどん加わるというように、集合的な〈協働〉作業を活性化させていく。この〈個〉と〈協働〉のきわみの同時併存のパラドックスは味わい深いもので、新しい世界をつくるこのプロセスを魅了してやまないものにしている。

このような実践的文化と媒体にした社会変革とはいったいどのようなものなのか？ どうして他でもなくこの時代、とくに有効なのか？ また、どんな条件下で1番効力を発するのか？ こうした問いをめぐる、私たちはしばらく旅をつづけることになるだろう。

3 | サンフランシスコ

しかし、論より証拠。現在進行中のかたちで、実践力を帯びた文化がどんどん社会を変えていく様子をしかと見とどけ、参加してみたいという気持ちで、湧いてきた。もちろん私が本拠地にいる日本の地方都市札幌でも、長い目で見てみれば、進行中だが、問題点として、別の場所で起った変化が

波及してきたものがほとんどで、ここ発の動きにとぼしいこと、くっきりとした輪郭、速いテンポでダイナミックに進行する動きにとぼしいことがあげられる。調査対象にするには、今ひとつ不向きなのである。

そこで私が向かったのは、サンフランシスコだ。サンフランシスコは19世紀のゴールドラッシュの時代から、一攫千金を目指すギャンブラー、山師、流れ者、アウトサイダーが行き着くところ。第二次世界大戦後は、太平洋戦争から引き上げる兵士たちが家に帰る際の門戸となったが、PTSDに悩まされて家に戻れなくなった者たちの多くがそのまゝいついてしまったという。ビートの詩人の挑発的なポエトリー・リーディングがさかんに行われ、オルタナティブなモラルの実験場として、別の人生を模索する家出少年少女たちを引きつけたこともある。そこからヒッピーが生まれ、サマー・オブ・ラブの舞台となり、東洋へのスピリチュアルな巡礼に出かける出発地、東と西の人々と文化の交差点にもなった。その何でもありの寛容さに、同性愛者、性的マイノリティの人たちが迫害と差別を逃れて移り住み、自分たちの居場所を、祝祭的、演劇的に作り上げていったところでもある。近所のパークレーの新左翼やオークランドのブラック・パンサー黒人解放戦線などからのラディカルな政治意識の流入もこと欠かず、これらがビートやヒッピーたちが切りひらいたアーティスティックなイメージ、スピリチュアルな実践と結びつくにつれて、政治と文化の化学反応が起こり、ゲリラシアターの劇団、ディガーズによる贈与経済の実験や、「田舎へ戻れ」Back to the Land運動、各種コミュニン、生態地域主義など、日常生活を舞台に先鋭的な政治を実践する運動を次々と生み出していった。こうして、人口は札幌の半分にも満たず、周囲を海に囲まれたちっぽけな半島に位置するこの街は、豊穡なカオスを内部に満々とたたえながら、新しい意識、身体性、価値、モラル、共生、ライフスタイルのヴィジョンと実践のうねりを大きく波立たせ、その波紋を全世界に投じてきた。

サンフランシスコが面白かったのは、60年代～70年代のこと。今やアメリカでも最もお金がかかる都市として、もはやオルタナティブなことをやってくれるような人が住めるような場所ではなく、カウンターカルチャーは今や博物館とツーリズムのなかにしか存在しないと片づけられるきらいもある。しかしそれは表向きの話にすぎない。1992年には、大量のサイクリストが道路をのつとる自転車乗りの祭典、クリティカル・マス³がここではじまり、2005年には、日を決めて皆でいっせいに、パーキングスペースを借りて車を止める代わりにそこにパーク、庭をつくるパーキング・ディ⁴が始まった。いずれもその後全世界に大きく広がりながら今日に続くムーブメントだ。ポスト・ヒッピーの祭典、バーニングマン⁵が1986年に始まったのも、サンフランシスコのベイカー・ビーチである。とはいえ、これは規模が大きくなるにつれ、アリゾナの砂漠へ移動する。

「世界はここから変わる！」というのは、サンフランシスコ市立大学の最近の広告文句だが、人口百万人に満たぬ規模の都市でありながら、ここまで、国際的な社会的、文化的運動の震源地でありつづけるのはめずらしい。しかもそれらの多くが、既存社会の過ちに抗議するより、ではどうすればいいか、対案を提示することに重心をおく。また対立の図式を、ユーモアや祝祭の力

▶3 <http://www.sfcriticalmass.org/>

▶4 <http://parkingday.org/>

▶5 <http://www.burningman.com/>

をかりて敵をも包みこむ包摂的な状況へと変容させることをめざすフラワーチルドレンの伝統も健在だ。革命や政権交代によるトップダウンの権力掌握を待たずして、旧い世界が隆盛をふるうただなかで、今、ここ、自分の足下で、自分できることから、日々、新しい世界をつくっていく。いわゆる「直接行動」とよびならされているものだが、そのようにして積み重ねられ、実物呈示されていく新しい世界自身が放つ説得力、よろこび、美しさこそ、革命のための武器庫である。そこでできた新しい世界の方が、より魅力を放てば、人々はおのずとそちらに移り住もうとするだろうし、その結果、色あせて見える旧い世界は支持者を失いおのずと瓦解していくだろう。サンフランシスコは、こうした完全に非暴力的な予示的政治のプロセスが、まったく自然な状態で、たえず進行しているところでもある。

しかしなぜここで、それが可能になったのか。世界へ広がる繁茂力を持つ草の根運動がここから次々と生え出ていくこの肥沃な文化土壌は、いったいどのようにして生まれたのか。それをつぶさに観察するにつれ、単に政治的な理想を実現するという面からのみ見るのは片手落ちだということも見えてきた。姿をあらわしつつある新しい世界にインスパイアされた人々が、相互的な連鎖反応の輪を広げることでおのずと社会変革にまでつながるような生命力のある運動は、どんなにお題目が立派でも、正論や大義名分だけでは、決してつぐれない。やはり生命あるものをつくろうとするアートと同じように、作り手の存在に根ざし、変容させるプロセスと一つになる必要がある。予示的政治のエッセンスを濃縮した、ガンジーの「世界の変化を見なければ、まずはあなたがその変化になりなさい」という言葉は、今もって真実である。

そのように考えたとき、サンフランシスコが、一ブロックごとにヨガや禅の道場が立ち並び、自己探求や自己実現、スピリチュアリティの拡大への衝動にとりつかれた人々が集まるメッカでもあることとの関連性が見えてくる。変容した自己は、新しい世界をおのずと自分のまわりにつくらざるをえないからだ。といっても硬直した世界のなかにあって、そのような人は、さまざまな抵抗にあう。そしてそれを避けるために、変容を内面に封じ込め、自己矛盾をかかえながら引きこもりがちだ。しかしサンフランシスコには、素直にそれを外界に溢れ出させる条件がそろっているように見える。

気候によるところも大きいように思う。西半分は、霧に覆われることが多いけれど、ダウンタウンの方は、春から夏、秋にかけて、雲一つなくからっと晴れた空がうんざりするほど毎日続く。始終、陽が照ってるだけでなく、空気が乾燥しているために、その光の強度もたいへんなものだ。細部までくつきりと照らすこの街のまばゆい光は、私たちの心の奥の隠れた深く広がる闇まで照らし出す。そしてこの闇の奥で膨らむカオティックな新しい世界の胚珠を、単にその人の外見や個人的な行動として色鮮やかに花咲かせるだけでなく、ストリートのようなパブリックスペースでの社会形成的なアクションにまで引き出し、結実させる強度をもっているのである。

最も個人的なことをもつとも政治的なこととして、クロセットに籠らずパブリックスペースへとあふれ出させるこの空気はしかしもちろん、単に自然のなせるわざではない。ここにいると何をやっても受け止めてもらえる。安

▶6 しかしながら、つい今年に入ってから、パブリックスペースで裸になってはいけないという条例がサンフランシスコ市議会を通ったばかり。違反者として初めて逮捕された者には100ドルの罰金、2回目は200ドル、3回目は500ドル罰金から懲役1年までの刑が課されるという。9.11以降とみに高まり、愛国法の執行とともに加速がついた表現の自由を削減する一連の法案は、サンフランシスコもその影響下に置こうとしている。

心して自分の本来の姿をさらせる、そんな雰囲気は街全体にただよっているのだ。背景には、寛容で、例外的なものを面白がる、好奇心旺盛で、ユーモラスな住民気質がある。それは地中海性の穏やかな気候とまばゆい光の中ではぐくまれたものであると同時に、歴史のなかで闘いとられてきたものでもある。ヒッピーを生み出し、かくまったことで、その名を世界に馳せたこの街は、自己変容がもたらすどんな帰結も、それが唐突でアブノーマルであればあるほど、熱烈に歓迎することが、どんな文化的豊穡をもたらすか、経験から知っているのである。

いまだに、公衆の面前で裸になり、文字通りありのままをさらす人たちの伝統も健在で、暖かい日であれば、クリティカル・マスにはヌードのサイクリストが数人入り交じっているし、カストロの市街電車の駅をおりたばかりの一番人通りの多い交差点で、裸でのんびり日光浴する人は絶えない。⁶もちろん、その手の文字通りのヌーディストはサマー・オブ・ラブの時代と違って、今は決して多数派とはいえないが、虚栄心や競争心をあおるエゴの拘束衣を身につけない、という意味でのヌーディストの数は、それよりもずっと多いだろう。実際、サンフランシスコの寛容で緩い雰囲気は、この拘束衣をとった昔に脱ぎ捨てた人たちがまだまだ多くいることにもよる。その点、さすがドロップアウトのメッカといえる。

一見、無敵で自信ありげ、その実、内心は、他人の目にどう映るか、どうジャッジされるかとびくびくして、身体を鎧兜でがんじがらめにして虚勢をはりあい、肩肘はってしのぎをけずる…世界に凡百ある、エゴによって統べられたそんな大都市からここ来ると、まさにここは「馬鹿の町」。この人たち、大丈夫だろうか？ 頭がおかしいんじゃないの？と思わせるほど、力を抜いて、わけもなくニコニコと微笑んで、奇抜な服装や、ヘタクソなアート作品を互いに大げさなぐらい褒め合っている。

しかしこの怖いもの知らずの自己肯定と、それを支える、批判力欠落した能天気な寛容さこそ、この街のおそろべき底力なのだ。というのも、誰でも何でも歓待し、受け止めるこの度量の深さ、博愛気質こそ、破天荒で大胆な生の実験の自由が入る余地をととのえてくれるし、また、もっとも秘められた欲望、存在の暗闇をも直視する勇気を与えてくれるからである。迫害され、抑圧されてきたマイノリティも、公的領域で思いきって己の存在を主張できる勇気がわいてくる。典型的な例としてゲイ・ムーブメントがあげられるだろう。全米各地、とくに南部や中西部の保守的な社会の中で抑圧されたり迫害されてきた同性愛者がここに次々と移り住み、内に秘めてきたゲイの欲望と身体性を白昼のストリートで堂々と全身でデモンストレーション。その祝祭的なエネルギーは、ここサンフランシスコでも根深くのこの偏見、差別を跳ね返し、彼らの居場所、勢力範囲を物理的にも社会的経済的にも広げていき、カーニバレスクな演劇性とホモ・エロティックなユーモアにあふれたカストロ街をつくりあげていった。つまり、自由の極を広げる文化的実験や、弱者が自力でエンパワーされ、自己主張することで促される平等の政治的な実験がなされる基盤を提供しているのである。

この街の一見緩りとした雰囲気は、このようにして、自由、平等、博愛が

手を携えてすすむ革命を、日常生活のただ中で自然に、人知れず進める力をひめている。とくに60年代以降、世界中に影響を与える対抗文化の発信地でありつづけた秘訣は、このあたりにあるのではないだろうか？

日本のしかも地方都市に住んでいると、サブカルチャーはよそでできた流行を真似する一辺倒で、これらの多くを自分で新しく生み出す創造力を持った地域は、さぞエネルギーだろうと想像したものだった。しかし実際に来てみると、逆にとことん力が抜けていて、ありのままの自分を祝福し、また互いに祝福しあう街なのであった。しかしそれこそ、自分の感性や思考以外に参照基軸をおかず、独自の世界を生み出すためには欠かせないものなのである。

今の日本の政治の閉塞状況は、政治家など権力者に責任転嫁しないで各人が自分のみたい世界を黙々と自分でつくっていく直接行動のDIY精神しかないとかねがね思っていた私が、ティーンエイジャーのときに初めて訪れて、生涯尾を引く強烈な印象を受けたこの街をふたたび訪れようと思いついたのは、自然ななりゆきだった。私は、そんなサンフランシスコの街になるだけ長く滞在しながら、新しい社会をつくるための条件を明らかにすべく、そこで進行中のさまざまな社会運動を参与観察してきた。

その間、3〜4ヶ月おきに定期的にこの街を訪れ驚かされたのは、新しい世界をつくるこれらの運動が、着々と街の姿を常に変え続けていること。自転車優先道路の数や、サイクリストの数は増える一方だし、恒常的なパーキング・ディといいうべきパーキングスペースに設置された仮設的な公園、パークレットも、私がフィールドワークをはじめた当初はヴァレンシア・ストリートにいくつかあったただだが、いまやかなり数も増え、ハイト・ストリートにも広がり始めている。実効性があるのだ。

といってもいい話ばかりではなく、これらの運動の進展をはばむ、ジェントリフィケーションやこれと連動したパブリックスペースでの表現の自由を削減する取り締まりの強化などのもつすさまじい破壊力とともに体験してきたし、それに対する彼らの戦いも見とけてきた。

こうした経験から、なぜ、旧い世界のただ中で新しい世界をつくるこの種のこころみが、ここからなら、これほど効力を持ち、大きく成長して世界に広がるのか、外から推測したり、理屈で考えるだけではわからない、複雑な事情、バランスも見えてきた。それを理論にまとめて、まったく正反対の文化土壌でも応用できるようにしたり、サンフランシスコの当事者の人々にも自覚されていない自分たちの活動の意義、その帰結について思うところをまとめたのが、このノートである。⁷

▶7 この研究には、日本学術振興会の科研費を使用した。(挑戦的萌芽研究、1910〜1912年、『芸術の社会機能』研究課題番号：22652013)。

4 論のターゲットの設定「ナウトピア」

しかしサンフランシスコの対抗文化といえ、それこそ巨大な研究対象。

▶8 Chris Carlsson: "Nowtopia--- How Pirate Programmers, Outlaw Bicyclists, and Vacant-Lot Gardeners Are Inventing the Future Today!" AK Press, 2008.

▶9 Chris Carlsson: "Nowtopia--- How Pirate Programmers, Outlaw Bicyclists, and Vacant-Lot Gardeners Are Inventing the Future Today!" AK Press, 2008.、バーニングマンなどの事例を、マルキストとしてのカールソンの階級闘争的な問題意識のもとに論じたものの。

油断をすると茫漠とした海の中に溺れてしまいかねない。そこでこれから少しずつ、似て非なるものとの比較などを行いながら、私がターゲットにするものをもう少しピンポイントで明確化して行きたいと思う。

まず、出発点にしたいのは、「ナウトピア」の概念である。これは、クリス・カールソンによる同名の著作⁸によって提唱されたもので、日常生活のありふれた要素をそのままパーツとして使いながら、それらを旧い世界とは別の形、とくに脱資本主義的なかたちで集め、組み合わせ、組み立てることで、旧い世界の上に、新しい世界のパターンを生き生きと描いていく運動である。⁹その例として彼があげているのは、クリティカル・マスに代表される自転車アクティビズム、空き地をどんどん緑化するゲリラガーデナー、バイオディーゼルの普及をはかる人たち、インターネット内のオープンソース、コモンズを広げようとしているネット・アクティビストなどさまざまだが、待ったなしに、この場で、今、ここにあるものとして実現しようとしているところが共通している。それに様々なかたちで関わる人々、すなわちナウトピアンたちには、従来の社会運動でよくあるように、権力者へのプロテスト、非難、嘆願によって社会を変えようという発想はほとんどない。彼らに関心があるのは、「～反対!」よりも、「では、どうすればいいか」を示すことである。しかもそれを言葉で説得するより、直接行動で示したり、実例を呈示することを好む。たとえば、地球温暖化防止のために緑を増やすべきだ…などという暇があったら、一本でも多く木を植える。あるいは、車社会がコミュニティの場所としてのストリートを奪ったと糾弾するよりも、実際にそこを占拠して、ストリートパーティをはじめるといった具合。そんな風にして、自分たちが提唱するこの「別の世界」が具体的にどんなものか、実際に機能するかどうかを、まずは体験してもらう。そして、今の世界とこの世界と、どちらが説得力があつて、魅力的か、自分だったらどちらに住みたいかと、一人一人に問いかけるのだ。ぴんと来た人は、再度これに参加するだろう。あるいは、そこで得られたものの見方の変化を、自分の職業や専門、関心領域で生かしながら、独自の活動をはじめられるかもしれない。運動がそのまま運動の目的実現のプロセスであり、その実例提示であり、有効性の検証であり、その実績の蓄積でもある。そのようにして、徐々に構成員を増やし、着々とその勢力圏を拡大しつつあるのが、ナウトピアである。

先述したような、社会に必要な変化を、代表民主制のシステムを経由して起こそうといった間接的で、他力本願的な発想も、そこでは当然、克服されることになる。それはだいいち、自分の見たい世界は結局自分しか作れない、という自明の理に反しているし、人に期待を託しては裏切られることの繰り返しは精神衛生上よくない、というのが、カールソンの口癖だ。

この研究ノートで私が扱いたい対象も、カールソンの「ナウトピア」の延長上にあり、彼の著作、三度にわたるインタビュー中に語っていただいた事柄に、研究の本当に多くを負っている。ただ、私の視点が異なるのは、新しい世界を作るこれらの運動をめぐる階級闘争についての考え方である。これについては、後に詳述することになるが、マルキズムの流れをくむクリスは、結局のところ、ナウトピアの建設を脱資本主義のための闘争過程としてみる。

この過程を促進するために、彼はナウトピアンたちに、資本主義の大量消費社会の見かけ上の総中流化のなかで、今はすっかり失われてしまった階級意識の目覚めの兆しを期待し、懸命に読み取ろうとしている。これに対して、私自身はクリスと違い、新しい世界をつくるナウトピアンたちの日々のクリエイティブな生活実践そのものが、彼らの権力、資源、現行の行き過ぎた資本の支配から独立した生活圏域を築いていく力があると思っているので、それより他にプラスαの闘争がいるとは思っていないし、その闘争を革命へと高めるために、彼らに、階級意識を目覚めさせる必要があるとも思っていない。強いて言えば、彼らが世界を作るクリエイティビティを、自己決定的、自己組織的な、自身の中にのみよって立つ純度の高いものに保ちながらどんどんエンパワーすることが必要だと思っているくらいである。

そのような理由から、この研究ノートでは、従来の権力概念と、世界をつくることそのもののうちに権力を見る考え方との対比や、アートの社会変革力についての理論的考察を加えることになった。また、事例にも、彼の本には出て来ないモナ・カロンの壁画、アーティスト・コレクティブのRebarが始めた「パーキング・ディ」や、アーティストのトラヴィス・メニノルフが始めた「アクション・ウィーバー」としての活動も含めることになったのも、こうした力点の移動に相応するものである。

5 いま、ここが変革の舞台

そもそも新しい世界を作るといって、新天地にすみついてゼロから自分たちの理想郷をつくる60～70年代のコミュニズムを連想させる。しかし本研究のターゲットとするリアルタイムの運動がそれと違うところは、新しい世界をつくるのに、場所の移動を伴わないことだ。たとえば、神秘的な東洋など特権的な場所に行けば、望む生活が待っているといったロマン派的な志向は持たない。また、そこで使う道具立ても、いま、ここで日々進行中の日常生活のなかからあるものをリサイクルする。たとえばパーキング・ディのアクティビストたちは、どこかに新しいパークをゼロからつくる代わりに、街中既にどこにでもふんだんにあるパーキングスペースを、メーターにコインを入れて借りた上、車をそこに置く代わり、アスファルトの上に芝生やカーペットを敷き、鉢植えの木やベンチを置いて、一日パークに作りかえるという方法をとる。もちろん、そこにあるのは、アスファルトに固められた一見疲弊し灰色に見える旧い世界だが、しかしあえてそこをベースにするのをやめないことで、日常生活それ自体を変容させるという錬金術が可能になる。

こんな貧乏臭いことをする背景にはもちろん、スプロールしようのない半島に位置するために、ゼロから新しい場所を作ろうにも、実際問題として土地が見つからないというサンフランシスコ特有の事情も働いていることは確かである。しかしこの状況が幸いして、同じ場所にコントラストにあふれる

多層的な世界がオーバーラップする魅力が醸し出されるようになった。何より、どこかに特権的な聖域をつくるのではなく、ありきたりにみえ、疲弊してみえる私たちの日常生活そのものを変化させることこそ運動の主眼なのだという点を明らかにしてくれる。

ご近所の空き地に野菜を植えて、キッチンガーデンを共有するコミュニティ・ガーデンもさかんだが、ここにも同様の構造がみられる。彼らは、「食べる」という、私たちが生きる限り続けなければならない日常的なとなみの方法を変えたにすぎない。たとえば、スーパーに出かける代わりに、近所のコミュニティ・ガーデンへ野菜を摘みにいく。いつでも食べれる状態でパッケージ化されている商品としての食物の代わりに、汗水たらし、待ち続け、やっと食べれる状態になった食物を食べる。だいたい環境意識の高い人たちが音頭とりになっているために、有機野菜や自然栽培だったり、周囲の生態系と調和する自生するものや、原種に近い野菜ばかりで、これを機にはじめてそうした野菜の味を知る人もたくさんいる。

もちろんコミュニティ・ガーデンで完全に自給自足することは難しく、この変化は食生活の全体を覆うことはできない。しかしほんの少しこれに関わって、食生産のプロセスの片鱗でも体験するというこの敷居をくぐるや、食に対する意識や態度ががらりと変わってしまう可能性が高い。たとえば、それまでどのスーパーに行こうと無頓着だった人たちも、オーガニックマーケットや農家の直販所に通うようになるかもしれない、という風に。

また、ガーデンを共有する近所の人たちとの協働を通して、近所付き合いも自然に活性化することが見込まれる。

日常的に続けられる農作業体験そのものが、そうしたコンスタントでポジティブな、肉体、五感全体を動員する労働をしたことのない人たちに新たな視点をもたらすこともある。貧困、ドラッグ中毒下におかれた人たちの更正につながるのももちろんだろう。また、すでに食の意識は高くても、「消費者の選択」というかたちでしかこれまで食の問題にコミットしたことがないミドルクラスの人たちにも、マーケットに並ぶ前の舞台裏での野菜たちの様子を観察したり、世話する体験は、さまざまな意味で開眼的にはたらく。

全世界に広まったクリティカル・マスの発祥地であるサンフランシスコは自転車アクティビズムも盛んだが、その基本も、クリティカル・マスの創始エピソードにあらわれているように、通勤交通手段を車から自転車に乗り換えるにすぎない。¹⁰しかしそれを基軸に、時間感覚や街を体験する目線が変わり、人づきあいの仕方が変わる。たとえば、自転車に乗っていれば、通りの向かい側でちょっと目にした知り合いに会釈するだけでなく、自転車をとめていつでも立ち話を始めることができる。そんな風に表立って見える変化はささやかでも、参加者の意識を大きく変化させるのが、これらの運動の特徴だ。

同じくサンフランシスコで私が会ったトラヴィス・メニノルフというアーティストは、スエットショップ、児童労働などがつきものの衣類の生産、流通の過程に透明性を持ちこみたいと思っている。そこで多くの人たちの問題意識を高めるために、あえて広場などのパブリックスペースに機織り機を持

▶10 クリティカル・マスは、車社会の中で目の目をみず、いつも危険と不便に悩まされている自転車通勤者たちが、一緒に職場から家に帰ることで、少しでも安全で快適に自転車通勤できるようにしようとしたのがはじまりだという。

ち出し、自ら生産するパフォーマンスをする。そこで、通りがかりの人に、服がどのようにできていくかを示してみせたり、衣服生産をとりまく状況について話をする。彼はまた贈与経済を導入することで、現行の衣類をめぐる人々や自然に対する搾取、暴力をとりのぞくことができると考え、生産に必要な材料を寄付のかたちでつものたり、そうしたできた毛布が必要な人たちにタダでプレゼントするアクションを行う。

このように、ナウトピアの運動は、社会運動といっても、デモを組織したりするなど、日常生活に何かつけたすことはない。衣食住や移動手段、パブリックスペースの使用法といった生活の必須要素—私たちが生き続ける限り、どのみち関わらざるを得ないもの—を、別のやり方で行うだけなのだ。しかしまさにそれゆえに、私たちの日常そのものを変容させ、生き方全体をくみかえてしまう性質をもっている。

持続可能性の上でも、期待できる。というのも、そのようにやり方を組みかえられたかたちで日常生活を続けることそのものが、新しい世界をつくる運動となるからである。衣食や交通手段こうした変化がその人のライフスタイルにすっかり浸透して不可逆的になるところまでいくならば、その人が生き続ける限り運動が続き、成果も蓄積されることになる。打ち上げ花火のように一時的にもりあがって、終わり…という風にはならない利点がある。

6 | 待ったなし

日常生活を構成要素とする運動は、いつでも、どこでもはじめられる。そこから、「ユートピアを実現する革命など、大それたことは、自分にはまだできない」とか、「まだまだ時期尚早。条件がそろうまで、とりあえず今は、準備に身を捧げよう…」といったあらゆる遅延、先送りの口実がなりたたない利点もある。どんなに不完全な状態でも、できることからはじめればいいからだ。たとえば、みんなに言いたいことはあるけれど、自分の書いたものを取り上げてくれる出版社がないのなら、どこにでもあるゼロックスマシンとホチキスを使って、手作り雑誌、Zineを発行すればいい、といった具合。

つまり、新しい世界をつくる作業を〈人まかせ〉にしないだけでなく、「いつか」「準備が整ったとき」の〈未来の自分まかせ〉にもしないのである。こうしたDIY志向は、いったん新天地での生活がはじまると、頼れるのは自分たちのみ、ぐずぐずしていると、生き残れない祖先の開拓者精神のなごりといえるかもしれない。

完璧主義で、準備に始終するだけで終わりがちな日本人の目でみると「こんなレベルで表に出して、恥ずかしくないの？」とあきれさせられることもしばしばある。しかし今、火急の課題はできばえはどうであれ、少しでも多くの人たちが立ち上がって、新しい世界をつくる作業にとりかかることである。そのためには、完璧主義や自己批判、傍目を気にする姿勢は邪魔なだけだ。

必要なのはむしろ、怖いもの知らずの不屈の自己肯定であり、自分が正しいと信じることに對するファナティックなコミットメントである。その基盤の上でこそ、新しい世界をつくるために必要な勇気や実践力、創造力が発揮されることになる。先ほどの「サンフランシスコ」の章で述べたような、当地の人々の寛容さも、もちろんそのための格好の土壌を提供するだろう。

しかし何より、待ったなしのDIYの実践そのものが、手作り作業特有の触覚性や直接性に由来する一種の安心感をもたらしてくれる。そして新しい世界をつくる際にどうしてもともなう、未知の世界を前にした不安、他者のジャッジメントに対するおそれや自己批判からくる懐疑心をやわらげてくれるのだ。しかしこの手応えを維持するためには、実践し続けなければならない。日常生活のただ中、いま、ここで、不完全でもいいから、できることから行動し、新しい世界をコツコツつくり続ける。この作業を少しでも途絶えさせると、また懐疑心が目覚めてくる。

日常生活と不可分に溶け合った、この継続性の観点は、ナウトピアの建設という一見ナイーブなことを真面目に行い続けるために、欠かせないものだ。というのも、良心的、かつ公平に現実を観察すれば、今の時代、問題が山積する様子、すべてが狂ってる様子にただただ圧倒されるばかりで、「何をやっても無駄」といった無力感やシニシズムにうちひしがれるほど容易いことはない。また、失敗を恐れ、傷つくことを回避するために自己防衛的なアパシー状態に陥る口実にも、こと欠かない。しかし、そうして、批判と愚痴にばかりエネルギーを費やしても何もはじまらないのは確かだ。どんなに堅実で、もったもにきこえても、結局のところ未知の世界へとびこむことに対する怖れに発するにすぎない。これらのネガティブな感情の波に吞まれずにすむための防壁を築くように、ナウトピアンたちは、とにかく手を動かし、身体を動かし続ける。そして毎日ほんの一ミリずつでもいいから現実に違いをもたらすポジティブな創造のよろこびで、日常生活を途切れることなく覆いつくす。それによって、これらの感情を閉め出すシールドを自分の周りにはりめぐらせるのだ。衣食住といった日常生活の必須要素そのものが運動をなしているので、全生活をこれで覆うことは難しいことではない。「世界最後の日に、私はリンゴの木を植える」と言ったマルティン・ルターのように。どんな時であれ、「リンゴの木を植え続ける」かぎり、私たちは希望を持ち続け、先へ進み続けることができる。

7 コーオペレーションをはねかえす

これまで述べてきたナウトピアの特徴をまとめてみよう。遠くへ出て行かず、地元にとどまったまま、また日常生活の必須要素を素材に、その使用法を変える。あるものを生かしながら、その機能を一変させながら、旧い世界をそのまま新しく再編成していくその様子は、森のどこにでも転がっている

木切れや小石を使って、びっくりするほど見事な巣の殿堂をつくる動物たちの仕業のように、生命力にあふれている。それは新しい世界が特権化され、時空を固定されるような何か特別の〈物〉ではないこと、材料そのものはどんなものでもいいから、それをパターン化する〈かたち〉、つまり形態形成の力によってできあがる〈機能〉にほかならないことをはっきりと示してくれる。これは、一見無味乾燥な都市のさまざまな要素を、子供のように新鮮なまなざしでとらえ直し、自分たちの遊び場に見立てていったフランスの状況主義者たちのいわゆる「転用」の実験と通じ合うもので、生き生きとした想像力による物質に対する精神の勝利を高らかに歌い上げるものだ。

ナウトピアンがこのDIYのやり方の背後に読みとれるのは、私たちの社会の趨勢を占める、以下のような価値観、生き方のアンチテーゼである。すなわち、「特別のもの」「特権化されたもの」「人がつくったもの」「完成されたもの」「パッケージ化されたもの」「便利なもの」「何もしなくてもお金さえ払えば所有できるもの」をもつばら欲し、消費すること。あるいは資本主義のスペクタクルやフェティシズムのロジックでできた世界に加担せず、そこから可能な限り独立するためにも、材料の方は、とにかく、ありきたりの、その辺にころがってる日常生活のパーツを使う。それらは往々にして、魅力的なものには見えないし、自分たちが批判したい敵方のもの、たとえば資本主義消費社会や産業社会の産物であることもしばしばだ。しかし、それを組み立て、新しく再編成したり、それらを組み合わせるロジック、さらにその背後にある態度やスタイルは断固としてそこから独立した、自分たちのもの。鳥の巣が、小枝でできていても、すでにそれは樹ではないように、ナウトピアンがつくるものも、それがいくら旧い世界の断片の組み合わせからなっている、そこに現れるパターンはれっきとした新しい世界なのである。そのことをはっきりとさせるためにも、下手でも失敗してもいいから、人任せにせず自分の手でつくる自力主義を貫くし、またその際に使うエネルギーも、できるだけ自分でまかなおうとする。彼らの十八番の交通手段である自転車が、車のように遠くから取って来たエネルギーからではなく、ペダルを踏み、自分の身体で生み出したものであるのは象徴的だ。コミュニティガーデニングや占拠運動のように、ナウトピアの運動の場所が、ひとところに定着してくると、そこにはたいていソーラーパネルが現れる。まずは自分の身体を使い、それがかなわなければ再生可能なエネルギーをつかう、というのが彼らの原則のようである。

あるものを生かしながら、その意味や機能や知覚を変化させるこの態度は、60年代の対抗文化が味わった横領、すなわちコーオペレーションco-optationの苦い経験が残した教訓によるようにも見える。というのもこの態度をとることで、コーオペレーションを、すくなくともその理想状態においては、私たちは回避できる可能性をもつからである。

なぜか。コーオペレーションは、あらゆる権威、とくに資本主義そのものに対する批判の身振りほど、売れるもの、つまり資本主義にとって魅力的なコンテンツはないことに、人々が気がついたことから始まった。というのもそれらはドゥボールのいう「イメージに凝結した資本」としての「スペク

タクル」の格好の材料になるからである。このようにして、神秘的な東洋への団体ツアーをはじめ、ジーンズからゲバラのTシャツまで、反抗の身振りが、自分たちが反抗する敵であったはずの、メインストリームの世界をますます強化するのに使われるジレンマが、対抗文化にはいつでもどこでもつきまといてきた。その内容はどんなに過激な反抗の身振りからなっている、それを繰り返され再生産されるような特権的な特別の場所や物やスタイルに凝結、固定させてしまうと、次の瞬間には商品化され、金儲けの対象、大量生産の対象となり得ることからくる。その瞬間、自分自身が全く新しい世界、あるいはその作り手に〈なる〉はずであった、〈存在の変容〉の問題は、あぐらをかいていてもお金を出せば手に入る〈所有〉の問題にすり替えられてしまう。そして、とどのつまり、消費、娯楽、気晴らしの選択肢の一つをなすにすぎないものとして平板化させられてしまうのだ。かくして、何でも手に入るけれど、奇跡などどこにもあり得ないように見える絶望的かつ閉塞的な世界が広がっていく。

無敵に見えるコーオペレーションにはしかし、弱点がある。それをとりまくコンテキスト、状況がどんなに変わろうと、物の意味が不変であるという同一性の前提に依拠することである。たとえば、ゲバラのTシャツは、多くの人がそれを着はじめるやもはやラディカルさの象徴というよりユニフォームであること。これを見抜ければ、ラディカルでありたい人にとってその所有は意味を持たなくなるし、少なくとも消費者の立場から、これに翻弄されることもなくなる。

ナウトピアンにみられるような、ものの見方をかえたり、そこから別の機能を引き出すクリエイティブな実践は、ものを同一性の桎梏の下におくあらゆる実体主義的な観点やそこから帰結される所有の構えを超越するものだ。実際、彼らがあくまで「今、ここ」の日常生活から離れず、一見ありきたりの旧い世界の断片を転用することをベースに活動を繰り広げる様子を見るにつけ、60～70年代の対抗文化が大衆化するにつれ、どんどんコーオペレーションの支配下に入り、形骸化していった教訓をふまえ、同じ失敗をくりかえさぬようにとの警戒しているようすが伝わってくる。

少なくとも、『ナウトピア』の著者で、元祖ナウトピアンの一、クリス・カールソンはこのことに自覚的だ。彼によると、クリティカル・マスも、クールな最新の自転車乗りスーツのスタイルを披露する見本市のようになりかけたこともある。そのときには「クリティカル・マスには自転車以外、何もいない！」というゼロクラシー¹¹のピラが一時飛び交うことになった。しかし、根本的には心配は無用。クリティカル・マスに実際参加したときに得られる知覚の変化、街をみる視点の変化、都市の中の自転車の占拠領域を危険を冒し闘いながらひろげていく充実感、それを仲間と共有するよろこびは、商品化不可能なものだ。クールなサイクリングキットをそろえることで、一時的な高揚感を得られても、それは私たちの存在を変容させる、これらのよろこびの足下におよぶものではない。だから、いったんこちらのよろこびに目覚めるやいなや、商品の所有やその誇示がもたらす高揚感の色あせ、恥づかしいものに見えてくる。そのことに気づき、目覚めた人たちは、おのずとまたT

▶11 「事例 その2 クリティカルマス」の箇所を参考のこと。

シャツとジーンズ姿に戻っていくというのが、創始以来これに20年間関わってきたクリスの持論だ。¹²

8 | 所有の構えから抜け出せない限り、新しい世界はつくれないこと

しかしコーオプテーションに対する究極の免疫は、まずはナウトピアン自身が自覚をとぎすまずことにある。とくに、以下のことに気をとめる必要がある。どんなにその内容が斬新であろうと、単に消費者として、できあいのものを購入したり、サービスを受動的に受けるにすぎないことを、新しい世界をつくっていることと取り違えないこと。また、ものを所有しているにすぎないことによる特質の獲得を、自分の存在を変化させることによる特質の獲得と混同しないこと。

いずれも消費主義にどっぷりつかった私たちが陥りそうな罠だが、ナウトピアンの中でも、バイク・アクティビズムに関わる人たちはとくに、これを自覚的に避けるべく、DIYの精神を貫いている。たとえばバイク・キッチンというオルタナティブな自転車乗りのNPOでは、壊れた自転車を持っていつでも修理してくれない。ただ、修理の仕方を教えるだけである。自転車乗りなら自分でやれ!というわけだ。また、自転車を売るよりも、リサイクル素材を組み合わせ、自転車を自分で組み立てる方法を教える。クリティカル・マスの合い言葉の一つに「石油でなく脂肪を燃やせ!」というものがあるが、そもそも、ペダルを漕いで、自分の身体でつくったエネルギーで移動する自転車はDIYのシンボルだ。60年代の対抗文化の時代には、映画『イージーライダー』に集約的に見られるように、オートバイが象徴的な乗り物だったが、その相当物として、今は、自転車が時代精神をあらわす乗り物になっている。その哲学的な含意はまだすべて明らかになったとは言えないが、一つ確かなのは、DIYの精神がそこに含まれていることである。

単にお金を払ってサービスを受けたり、ものを所有することで、何かなしとげたと思う幻影に陥ることが、しかしなぜそんなに危険なのか。これについてはマルクスの『経済学・哲学草稿』の次のアイロニカルな問いかけが示唆的だ。

貨幣という媒体により、貨幣で手に入る物、私が支払うことのできるものが、私自身の存在そのものの代わりになってくれる。金という財産は、私自身の財産であるだけでなく、私の権能をあらわす。金を持つことで、私のありよう、私のできることは、私自身の存在によって決定されることが全くなくなる。たとえば私は醜い存在であるが、お金を出せば、自分のために最高に美しい女性を買うことができる。したがって、私は醜い存在ではなくなる。というのも、醜さという効果、つまり人を遠ざけ

▶12 2012年3月15日、サンフランシスコ、クリス・カールソン邸でなされた彼へのインタビューによる。

▶13 カール・マルクス『経済学・哲学草稿』岩波書店、2009年、182ページ。

▶14 エーリッヒ・フロム『生きるということ』紀伊国屋書店、1977年。

▶15 ハキム・ベイ『TAZ——一時的自律ゾーン』インバクト出版会、1997年。

る力は、金を持っていることによって無化されるからだ。(…)私は愚鈍でも、金は万物を現実化する精神であるために、金を持っていれば自分のため才能ある人々を買うことだってできる。才能あるものに権力をふるえるものは、彼ら以上に天分に恵まれているものだといえないだろうか?¹³

マルクスが引く例のように、劣等感、所有という代理によってそれを代償しようとする原動力である。自分の存在を恥じて、受け入れられないとき、それをごまかし、糊塗するために、貨幣が使われることになる。しかしこうした無力感を克服するには、あたりまえのことだが、自分で努力して自分の存在を作りかえていくしかなく、そのためにはまず自分を受け入れられなければならない。存在の問題を、貨幣によるものの所有で片付けようというのは倒錯である。しかしこれだけ商品経済が発達すると、そのあたりまえのことをやっている人たちが大変珍しくなる。エーリッヒ・フロムが「有ること」と「持つこと」の二分法により示したように、ものを「持つ」だけで、それにふさわしいものに自分が「なった」とか、何かを「なした」と思う——消費社会のなかでありがちな——錯覚ほど、私たちのありよう、存在を変容させる努力を阻むものはない。¹⁴

この錯覚はまた、社会の中では現状肯定的な力として働く。というのも「持つ」ことでその威光にありつこうと彼らが求めるものは、いつも、既存の制度の中の権力者、勝者を象徴するものだからである。これらの「所有」により、自分の「存在」の問題を置き換えようというこの構えのなかでは、新しい世界、ナウトピアは決してつukれないことがわかる。

9 パラレルワールドとしてのナウトピア

以上、コーオペレーションに対する自衛として、自らその加担者にならないために、存在の問題を所有で片付ける罠におちいらないようにすることが重要だと述べた。

しかしそもそも、コーオペレーションのターゲットにならないように、政治的、経済的権力の目にとまらないところに隠れることができれば、それにこしたことはない。ハキム・ベイが唱えた「一時的自律ゾーン」Temporary Autonomous Zone (略称T.A.Z.)は、そうした戦略の一つである。¹⁵それは、ものの見方や人間関係、自分自身との関係を一変させるような変容の瞬間を絶えず創造しながらも、その自律性、真正さを保持するために、そこから、あらゆる恒常性を持たせ、固定化させる要素を抜いていく営みからなっている。たとえばそれを名づけたり、維持するための組織をつくったりすることなど問題外。特定の時間、空間に行うことさえ拒絶の対象で、前触れもなくいきなりゲリラ的に仕掛けることが奨励される。それにより、こうした瞬間

が反復可能な陳腐化されたものに転じる可能性——および、しばしばこうした俗化の過程の引き金となる、あらゆる権力、コマーシャルサイドによる横領の可能性——も封じることができる。

T.A.Z.は、このようにして、特定の時間、空間の座標上に自分を位置づける固定化をすべてあきらめた結果、ある種の偏在性を獲得する。特定の場所、時間に固定されないということは、あらゆる場所で、あらゆる瞬間、突然起こりえることだからである。やはり予測不可能な、暴力の勃発であるテロリズムが戦争に代わるようになってから、暴力がいつでもどこでも起こりえるものとして潜在的に偏在するようになり、世界中がパラノイア的な恐怖にひたされ、セキュリティの厳重化や管理社会化が進行したのと全く同じように。T.A.Z.は、こうしたテロリズムのネガと見ることもできる。それは、テロにより暴力が潜在的に偏在する時代、その反対物である愛と恍惚の瞬間も、同様にあらゆる場所、あらゆる瞬間に起こる可能性をひらくことで、人々を恐怖の代わりにわくわくとした多幸症的な気分でひたすことで相殺しようとするものだ。

T.A.Z.に最忠実なアクティビズムの例としてあげられるのは、突如、車でこった返したストリートを占拠して、ストリート・パーティをはじめるイギリス発のパブリックスペース奪回運動、「ストリートを取り戻せ」Reclaim the Streets (略称RTS) だろう。現在のサンフランシスコには、RTSでみられるように、運動そのものの構造にTAZの原理を反映させたものは、少なくとも私が見た限りでは存在しない。しかし、運動の解釈のレベルでは、TAZと同じ発想が見受けられる。たとえば、運動の本質を、その外見や、物理的に抽出可能な要素ではなく、体験する人の知覚の変化に求める見方など。クリティカル・マスの創始者の一人、クリス・カールソンにいわせれば、クリティカル・マスの極意はそこにある。「クリティカル・マスの瞬間、街が全然違った姿を現し、全然違った肌触り、匂いを発する。いったんこれを体験すると、それは、人生を変える体験になる。ものの見方の変化は、コーオプトしようにも、難しい」¹⁶というのも、ものの見方の変化そのものを、外見だけ真似るなど不可能だからである。しかも、いったんこれが変化すると、その影響はその人がその後見るものすべてを規定してしまう。だから、ものの見方を変化させる体験の質を注意深く育て、運動の核心に置くことで、新しい世界をつくり続ける創造性が、商品化その他によって形骸化を被ることなく、根強く保持されることが可能になる。

実際、ナウトピアの創造は、そんな風に、ふつうとは違ったものの見方、考え方の味をしめた人を、一人一人増やしていくという形をとって進んでいるようだ。

クリティカル・マスは月に一度、パーキング・ディは年に一度の固定可能な日時を持つ恒例イベントで、その点TAZとはいえない。しかし、その最中は街の公共空間の姿が一瞬、ドラマチックに変化するのに、その後何もなかったように街が前の姿に戻るところ、つまり隠れてしまうところは共通している。

実際、その繰り返しを何度か経験すると、知覚の変容こそがこうした運動

▶ 16 バークレーの独立系ラジオ局、KPFAの番組、Against the Grainの2013年、1月16日放送の特集、Measuring Critical Mass内でのChris Carlssonの発言より。
<http://www.againstthegrain.org/program/650/tues-11513-critical-mass> (2013年3月24日参照)。

のもたらす効果の核心にあることがはっきりしてくる。〈物〉としての街は、前とまったくかわらないが、それを体験する私たちの知覚の仕方は変化してしまって元に戻しようがないことが、強く感じられるからである。

そのとき、運動はT.A.Z.として、場所と空間を固定できる特定の〈物〉としては姿を隠す代わりに、いたるところに偏在するものになる。というのも、いったん物を見る目を変容させると、それは外せないサングラスのように、その当人の行くところすべてつきまとうからである。

こうした体験はまた、サンフランシスコというこの街が、幾層からもなるレイヤーをなす、重層的な深い街として見えてくるきっかけにもなる。たとえば、パーキング・ディの日に、普段だったら車がずらーっと並んでいる、ごみごみとした街中のパーキングスペースが緑と人であふれる様子を目を見ると、幻覚でも見ているのかなと目をこすり、まるで未来の街の姿をあらわすパラレルワールドが、一瞬、予兆的に可視化されたヴィジョンを前にした心地がする。翌日にはまた車でごったがえすのだが、そこで見たものは、儚いものだった分、印象に焼きつき離れない。二つの世界を比べて、自分はどちらに住みたいのか考えてしまうと、何より現実、私たちの決意次第、その気になれば別の世界がそこに生まれることも思い起こさせてくれる。

クリティカル・マスに代表される自転車アクティビズムも、その醍醐味は、その最中、まったく違った姿を現した知覚の変容が、その後も不可逆的に尾をひいて、人生を変えてしまうところにある。そうすると、それを形にしたり、増幅させて、他の人たちと分かち合いたいという気持ちもわいてくる。

このようなパラレルワールドを可視化したものに、自転車乗りのためのサンフランシスコ地図がある。¹⁷この地図の一番の存在価値は、急な坂と車の多い道を避け、安全かつ快適に自転車で走れる道を明示することだ。自転車専用道路や自転車優先道路はもちろん、それぞれの道がどれだけ自転車で走るのに向いているかが、示されている。道路情報以外においても、そこで示されていることは、通常のサンフランシスコの地図や、観光客用の地図とはまったく異なり、緑地帯や自転車修理ショップ、オーガニックの生活協同組合マーケット、オルタナティブなコミュニティのたまり場になるカフェなど、自転車や環境問題のアクティビストたちに関心があると思われることばかりが、ぎっしりと書きこんである。

そういうわけで、この地図を片手に急な坂を巧みに避け、ジグザグに走る自転車専用・優先道路を縦横無尽に駆け回るにつれ、街のまったく違った側面が見えてくるのに気づかされることになる。中でも、自転車専用道路に沿って走るにつれて、自転車目線で見て初めてその堂々とした迫力のある姿を青い空の下にさらず、モナ・カロンの壁画は圧巻だ。ここを毎日走る自転車乗りたちの未来のヴィジョンを集大成するように、彼女の壁画には土着の花やトカゲが戯れるこの街の夢の姿が現れてくる。

このように、自転車乗りの目線からのみ見えてくる新しい世界の萌芽がサンフランシスコの街に遍在していて、それは一つのレイヤーをなして、パラレルワールドのように、依然として大企業の支店や銀行がたちならぶ旧い世界のただ中に重層的に潜伏しながら、日々、少しずつその領域を広げている。

▶17 SF Bike Map 2011, San Francisco Bicycle Coalition.

これら二つの世界の共存とせめぎあい、その境界がどこにあって、偶然出くわすそれぞれの人がどちらの世界の住人かは、わかる人にはわかる。

たとえば、すれ違う自転車乗りが、まったくの初対面であるにもかかわらず、アイコンタクトし、満面の微笑みをうかべて、「すてきな自転車ね」とか「すごい霧だね」と声を掛け合う習慣があるが、それは同じ世界の住人だと互いに確認し合っているからこそなされるもの。これからもお互いががんばって自力でつくったエネルギーで街をとびまわりながら、自分たちの生息場所を広げようという合図なのだ。すぐ傍らではラッシュアワーの自動車がひしめき、大企業の支店やブランドショップが立ち並び、サラリーマンスーツのビジネスマンが額にしわを寄せながら、脇目も振らずに先を急いで歩いている——この重層性が、両世界をアイロニカルに、ユーモラスに、それぞれを対照的に浮かび上がらせ、それがまたこの街のえもいえぬ魅力をなしている。と同時に、ここにいると、旧い世界のただ中での新しい世界が産声をたて、息づきながら、だんだん育ってきている様子を、文字通りフィジカルに感じることができる。

これも見える人には見えるが、他の人には隠されているという意味で、コーオブトされにくいものだといえる。

事例紹介 その1 パラレルワールドとしてナウトピアへの入り口 モナ・カロンの壁画

サンフランシスコのナウトピアは、パラレルワールドとなって潜伏しながら街にあまねく広がっているが、ところどころ誰の目にも可視化されている焦点のような場所がある。その代表というえるのが、街のさまざまな場所にちりばめられたモナ・カロンの壁画である。

モナ・カロンはスイス生まれ。サンフランシスコの美術大学Academy of Artsでグラフィックデザインを学んでから、そのままここに住み着いてしまった。アメリカ西海岸で壁画muralといえ、エスニックマイノリティのエンパワメント志向のもの、あるいは、グラフィティ志向のもの（実際にはコミッションを受けていても）がほとんどだ。その中で彼女の壁画は、いかにもヨーロッパ出身の装飾的でエレガントで細密画風の丁寧なタッチや、特定のエスニシティやマイノリティ・グループへ向けて描かれていないオープンな性質で、際立っている。強いていえば、ナウトピアンに向けられているとでも言おうか……。テーマは一貫していて、この街を別の視点から眺めること。たとえば、雑草と見なされ、普段、気にもとめずに踏みつけられたり、芝刈り機で刈り取られている土着植物の花を、うーんとクローズアップして、実はとても優美なことを示す壁画を彼女は描く。サンフランシスコが昔は水の街で、いまは車でごみごみした多くの道路が走っていたところにかつてクリークが流れていたことを示しながら、それを復活させた未来の姿を描いたものもある。主要公共交通はゴンドラになり、水辺には生態系が復活して、さまざまな生き物が棲んでいる。

そんな風に全然違う視点や、違う時間から眺められているのに、あくまで



Manifestation Station at the intersection of Church St. and Duboce Ave. in San Francisco

壁画が存在するその場所がテーマになってる。このオーバーラップの面白さが彼女の壁画の醍醐味で、散在する彼女の壁画に注目しながら歩いていると、街が多くのレイヤーからなる多次元体としてあらわれてくる。

彼女もこのことには自覚的らしく、最近、街の現実の風景を、そのまま延長しながら、かくあれかしと彼女が願うヴィジョンにハイパーリアルなタッチで変形する、騙し絵風の絵も描くようになった。たとえば、アスファルトの道路の一部がクリークになり、そこに橋が架けられている。灰色の歩道にカラフルな小石がちりばめられ、植物がいたところに植えられ、チェーン店のスーパーマーケットは農家直販のファーマーズマーケットになっているといった具合。しかしそんなポジティブな未来のヴィジョンが、本当に自然に、寸分の隙もなくリアルとつながっているの、遠くから見ると彼女の描く街の姿の方を現実と取り違えてしまう。近づくにつれてやっと絵だとわかったときには、一瞬美しい夢をみたかのような心地がする。後には、一瞬間間見えたこのヴィジョンへの甘酸っぱい、焼けつくようなあこがれが残る。

夢？ いや、私たちの決意次第で実現する現実なのだと決然たる足どりで過ぎ去る人もいるだろう。ナウトピアンかその予備軍である。

普段雑草と見なされている土着の草花をクローズアップして美しく描くように、彼女の描くパラレルワールドの主体は、どこにでもいる人々の持つ驚くべきパワーである。マーケット・ストリートの市街電車をテーマに壁画を描くようコミッションを受けたときには、それを口実に、ここがこれまでどのように人々の力を表すメディアになってきたかを描こうとして、このストリートを舞台にしてこれまで行われてきたさまざまなデモの歴史をたどる絵を描いた。1932年の港湾労働者のストライキや、労働者の日のパレード、1980年にはじまったゲイ・プライドのパレード、2003年のイラク反戦運動が、絵巻物のように時系列にあわせて、左から右に向かって描かれている。彼女によると、それによって、これまで人々がどれだけのことを成し遂げてきたか、

実績をしめしたかったという。実際、イラク戦争はとめられなかったものの、労働者もゲイも、その地位を向上させてきた。その実績をふまえることで、今の私たちも、飛躍的な未来を実現できるはず。そうした意図をこめて、一番右端のセッションは未来のヴィジョンにあてられている。彼女の未来のヴィジョンの中では、バイオディーゼルのバスは走っているが、交通ははるかに多様化して、本数が増えた市街電車に、自転車、象や馬やらくだに乗っている人もいる。ビルの屋上や窓など、いたるところから緑が顔をのぞかせ、屋上を橋がつないだビルの間を、人々が行き来しながら、屋上ガーデンを散歩してまわっている。全体的に外に出ている人がたくさんいて、絵を描いたり、ダンスをしたり、花の世話をしたりと思い思いのことをしている。

反権力的で草の根的なものを支持する姿勢は、あらゆる作品に一貫していて、街の一角をかなりリアリスティックに描写していても、広告や店の看板や当局のポスターにはカルチャー・ジャミングの方法を使って、アイロニカルにあてこすったり、彼女のコメントを加えている。たとえばブランドショップの広告の代わりに、「自分がブランドだ」 Self Brandという言葉を入れるなど。しかし落書きは、その社会批判的な自発性や勇気に敬意を表して、そのまま写す。そのせいか、彼女の壁画はめずらしく、上に落書きされることはほとんどないという。

テンダロインというサンフランシスコでも最も柄が悪くて犯罪率が高いとされる地域で壁画を描いたときには、彼女はこれらの目立たぬ人々への敬意を、忘れられた歴史への関心と組み合わせ、街のイメージを一変させるころみをした。実際に壁画が置かれた街の一角をそのままテーマに描くところはいつもの通りだが、路上で出会ったその住人たちに、この地域の物語について、しかもとくにその人にとって重要な話を語ってもらい、壁画の中に描きこんでいくという方法をとった。話をしてくれた人には、お礼に、彼らの姿をこの壁画の中に描く。噂を聞きつけて、本当にたくさんの人が、話をしたのは自分の姿を絵の中に描いてもらいにやってきた。つまり、この壁画の中にいる人は、すべて名前と、来歴をもつ実在の人物なのだ。その数は、完成したときには250人にのぼっていたという。街の未来を壁画に盛りこむことについては、近所の子供たちに、自分が将来なりたいものを象徴する種類のオブジェをセラミックでつくってもらおうという方法をとった。それを壁画の中の地面を描いた部分に埋めこんで、そこから植物が根を生やし、それぞれの子供が一番好きな花となって咲く様子を、モナが絵に描いていったのである。テンダロインのこの壁画は本当にここに住む人たちに愛されているようで、



Market St. Railway Mural - Location: 300 Church St, near 15th St. - San Francisco



Window into The Tenderloin- Location Jones Street and Golden Gate Avenue, San Francisco

壁画作成協力者と。左寄り中央で腕を組んでいるのがモナ・カロン

モナ自身に私が壁画を説明してもらっている間にも、通りがかりの人たち（ほとんどアフリカ系アメリカ人）が、彼女を見つけて駆けつけ、ここに自分がいるんだと指差したり、壁画の前でゴスペルを歌いだしたり、踊りを披露してくれた。

おそろしくスローな制作ぶりで知られる彼女は、出来上がる作品そのものよりも、その過程を重視している。壁画の中に、その壁画を製作中の彼女自身の姿を、画中画としてよく埋めこむのも、一つはそのせいだろう。

作品ができた後も、壁画そのもののアーティスティックな評価より、彼女はその作品がその地域住民と、どんな関係を持つようになるかに何より興味がある。

彼女の壁画そのものを見る限り、装飾的なイラストといったところで、アーティスティックには別に見るべきものはない。住民をどんどん参加させていくところも、コミュニティアートの常套手段にすぎない。彼女自身も、それを認めている。「多くの人たちが、アートというだけで、心の傷があったり、コンプレックスを抱いていたりする、そんな現代アートの状況に加担して、難解な作品はこれ以上、作りたくないの。それより、みんなと一緒につくっていき、みんなと一緒に育っていける絵を描き続けたいわ。ポピュリスト過ぎるかもしれないけれど」と、自分の姿勢をコメントしてくれた。¹⁸

とはいえ、サンフランシスコのナウトピア建設の中で果たす役割という観点から見ると、彼女の壁画ははかりしれない力を持っている。住人視線の草の根の歴史と、未来の夢をとりまとめ、ナウトピア建設のための設計図、青写真として、誰しも、毎日のように目にすることができるパブリックスペースに置くのだから。一種のメディアとしては、大変優れているのではないかと思う。実際、モナの壁画は、街の歴史や未来のヴィジョンについて書かれた本の表紙絵になったり、社会運動のポスターに使われたりすることがよくある。ナウトピアン共有ボキャブラリー、合言葉的な地位を果たすまでにいたっている証拠である。

▶18 モナ・カロンの壁画ツアー後のインタビュー、2011年9月18日、Cafe Revolution (3248 22nd St., San Francisco) にて。

10 外在的権力と内発的権力

これまでの話を整理してみよう。ナウトピアをつくるのに必要な条件として、1. リーダーや指導者まかせにしないDIYの精神にもとづき、2. 遅延せず、今、ここでできることから、はじめること。3. フェティッシュやスペクタクルの対象になるような特権化されたものをつくらずに、あくまで日常生活のパーツをつかって、その使用法や意味や知覚を変えることですめること。4. 新しい世界のイメージを帯びたもの（コーオペレーションの所産）を単に「所有」することで、自らそれを「つくった」あるいはそれを体現するものに「なった」という幻想の罠に陥らないこと。5. ナウトピア構築の成果をTAZ的なパラレルワールドとして隠すことについて述べた。

そうしてはじまったナウトピア建設の成果は、新しい世界をつくるために互いにインスパイアしあうアイデアやイメージのプールをなしていこう。それはひとまず文化というかたちで共有されるが、アカデミックな知識の中で権威としてあがめられる文化ではなく、実践と直結した文化である。これを母体にして繰り広げられていく新しい世界をつくる終わることのない、無数の人々の協働については、2章で、女性の社会進出の過程を例にして論じた。一つ一つの勇気ある実践が切り開いた実績やノウハウの宝庫としての実践的文化のこのプールから、人々はインスピレーションを汲みとり創造へ向かい、その成果がまたこのプールに流れこみ、ますますこれを豊かにしていく。

コモンとしてのこの実践的な文化を協働の母体にしなが、新しい世界は次第に目鼻立ちをあらわにしていこう。そこでできた世界が自ら機能することを示し、人々の欲望を集めるにつれ、世界をつくるこの力は、社会を変えるためのれっきとした権力だったことが明らかになるだろう。

とはいえ、それは既存社会システム内で支配的な地位を獲得することで得られる権力とは、全く質をことにするものである。社会を変える権力を、出来合いのものとして私たちの〈外〉にあると見て、その獲得をひたすら目指す、という立場からは、新しい世界をつくり、それを共有、通用するものによって社会を変えていく権力は生まれえない。そうではなくて、権力は、私たち一人一人の〈中〉に源泉を持った生きる力やクリエイティブな実践力として見る必要がある。ここで、前者を「外在的権力」、後者を「内発的権力」と呼ぶことにしたい。

しかしこの内発的権力のいかにまれなことだろう。社会を変えるにはまずは権力をとらなければならないという発想はすべて、外在的権力しか存在しないとの前提からくるものだ。しかしこのやり方でなされた革命は、どんなに民主的な題目をかかげようと、暴力的なものになる。というのも、外在的権力は希少性を前提とするもので、獲得するためには、競争したり、奪い合わなければならないからである。しかも、権力は人々の外から、人々に作用するという前提にたつので、トップダウンの中央集権的な強制と手を携えて

いかざるをえない。このような問題点をあらった上で、「権力をとらずに世界を変える」というオルタナティブな社会変革方法を定式化し、探求したのが、アイルランド出身の社会学者で、メキシコに移住し、サバティスタの理論形成にも関わったジョン・ホロウェイだ。

11 | ホロウェイの「する力」

ホロウェイは、権力を外圧的な「させる力 power-over」と、内発的な「する力 power to do」という二種類に分け、「する力」の称揚のみが、これまであらゆる闘争がおちいつてきたジレンマからの脱出路であると同時に、資本主義を根本から克服する力になるのだと主張した。¹⁹

彼が資本主義にみるのは、私たちの「する力」を「させる力」へことごとく屈服させ吸収することで、萎えさせてしまうシステムである。というのも、利潤をあげねばならない、採算を合わせなければならないといったお金をめぐる強制としての「させる力」の勢いがすさまじく、その下に、私たちのあらゆる夢も理想も妥協、譲歩、屈服をせまられるのが今の世の常だからである。この構造は経済以外の領域にも浸透し、たとえば教育は、将来効率よく働き、利潤をあげ、経済に貢献する有用な人材をつくるための投資としての性質が濃く、子供たちはこの投資の見返りが将来どれだけ見こめるかに従って、序列化され選別のふるいかけられる。パウロ・フレイレはこれを「銀行型教育」と呼んだ。こうしたシステムの中では、「する力」は育ちようがない。

「させる力」からではなく、「する力」から生きること—この転換を一人でも多くの人が、成し遂げるからこそ、資本がすべてを統べる今のような状況下で、先ほど述べたような主体的に担われた実践とその文化的蓄積による社会変革を成し遂げる唯一の道である。

しかしここで注意しなければならないのは、この社会変革は、いかなる権力をとることによっても、また権力に従うことによっても、実現するものではないということだ。そうではなく、自身が、権力になることによって成し遂げられるのだ。自ら権力になるとは、私たち全員がそれぞれ自分の「する力」を行使しながら、自ら自分のまわりの現実を定義し創造するリーダーになること。しかしそれは、他者に何かを命令して「させる」ような外圧的なリーダーになること、つまり、みずから「権力をとる」ことを意味しない。そうすると、いまや自分が外から社会を形成する力にとってかわるだけ、権力の受け手から行使する主体に変わるだけで、一部の「させる力」に多くの人たちが「させられる」権力構造自体は、変わらないことになってしまう。そうではなくて、全員が「する人」すなわちリーダーになるように、相互に対話的にリスペクトし、理解し、必要とあればサポートし、協働することが望まれているのである。

▶19 ジョン・ホロウェイ『権力をとらずに世界を変える』同時代社、2009年、63ページ。

12 | ホロウェイの「する力」と内発的権力の違い

ホロウェイのこのヴィジョンは、権力の基盤をすべて、他者を強制する外在的権力ではなく、一人一人が自分のまわりに世界をつくる内発的権力のうちに見ようとする私自身も共有するものだ。私のいう内発的権力は、彼の言う「する力」の一種といえる。

しかし私はここで単に「する力」といわず、内発的権力という言葉を使う。というのも、この「する力」をもう少し限定して、それを行使する各人の存在に根ざした、その人にしかなし得ないような個性化された創造力のみにしぼって、この論では分析対象にしたいと思うからだ。私のいう内発的権力とは、それを行使する人の個性的な自己実現が、同時に社会形成も行うような力のことである。

なぜか。「する力」のなかでも、とことん個性化したものでなければ、外在的権力への依存を断ち切る厳密さを貫けることができないように思われるからである。

そうしなければ、外在的権力が生権力のかたちであまねく浸透し、私たちの欲望のかたちや発想法をすっかり規定してしまっているこの時代に、自律性を保持して、内発的権力によって人生をつくり、協働にもたらし、新しい社会をつくっていくプログラムを今の社会で実行するのはとても難しい。自律的に生きようとしても、そこから逸脱させる生権力の強い磁場がひしめいて、激しく足下を揺さぶるので、まっすぐ立ってられないほどである。自分を抑圧する社会的強者の呪縛からのがれられず、その承認を求めたり、自分自身それになりかわろうとする衝動。売られた喧嘩や競争へのいざないに際限なくまきこまれ心休まることをしらない名誉心。政治家やリーダーといった代表に、自分の代わりに動いてもらい、自身は新しい世界をつくる義務から回避しようとする。そのくせ、彼らが自分たちの思い通りに動いてくれないといった不平ならば、エネルギーにまくしたてる、そんな受動的、消費者的な人生への誘惑…しかしここで負けてはおしまい、いったんこれらの磁場に身をゆだね、からみとられてしまうと、新しい社会はいつまでたっても作れず、ただ古い社会をさらに強化、再生産する力になりはてしてしまう。

それでもこの社会の中で被抑圧的な状態にある人たちは、批判力を発揮しやすい立場にあるようにみえる。しかしそれも見かけだけで、あらゆる外在的権力から完全にはなれ、純粋に内発的権力によって新しい世界をつくることで、抑圧状態から抜け出る人はまれである。それよりも、旧い世界のシステムはそのままにして、その中の抑圧者の地位に、自分を置き換える立身出世によって、抑圧状態から抜け出る人のほうが圧倒的に多い。ようするに、外在的権力を追うわけである。

具体例をあげよう。ディヴィッド・グレーバーは、『負債』のなかで、権力を剥奪された奴隷が、どうして奴隷制の破棄に向かわなかったのかを、18世紀に奴隷から身を起し成功した商人になったオルダー・エクイアーノとい

►20 David Groeber: Debt, Melville-house, 2011, p. 166.

う非常にすぐれた黒人リーダーの伝記から、とくに彼が重んじた「名誉」概念を問題視するかたちで説明している。²⁰彼は自分が奴隷になることで失われた名誉は、奴隷制のあるこのシステムの中で奴隷であることから解放され、上の地位へとほりつめることによってしか回復されないという強固な思いこみを持っていた。つまり彼にとって失われた名誉を回復するためには、どうしてもこの不平等システムそのものが存続しなければならなかったといえる。

しかしエクイアーノのようにチャンスと才能にめぐまれず、主人の地位に自分を置き換えられなかった、凡百の奴隷状態にある人たちは、どうするだろうか。せめてイメージのなかで自分たちの主人に自分を同一化し、自身、彼らになったかのようにふるまうことで、堪え難い状態を直視せずすむようにする、とブラジルの哲学者パウロ・フレイレは、唱えている。彼のこの「被抑圧者の中の抑圧者の影」理論によると、植民地の人たちがなぜ宗主国の人たちの猿真似をするのかの説明がつく。もちろん日本の西洋化のプロセスを動かした衝動もこれと無関係ではないだろう。大量消費社会の商品の渦は、そのための道具立てに事欠かない。安物素材と、低賃金の搾取労働のおかげで、どんな人も少なくとも外見は貴族的な衣類や調度に囲まれて、社会的強者との幻想のなかで自己同一化することが手軽にできるようになったのだから。このようにして、世界中の人は尊厳も個性も失った画一的な存在になりはて、どの都市も区別がつかない混沌した風景に変わっていったのだった。

傷つけられた自尊心の回復をめざして社会的にのぼりつめる「名誉」を尊ぶ人々にしろ、自分の中の「抑圧者の影」に自分を同一化するにしろ、共通していえるのは、既存社会構造の再生産にしか役立たないことである。これまで考えられなかったような社会層の人たちが権力者の地位にまで上り詰めてきても、役者が変わっただけで、抑圧的な社会構造はびくともしない。

なぜだろう？ 既存のこの社会構造を形成している権力が内面化されて、私たちの欲望や知覚、発想のパターンまで規定している。その磁場に彼らは絡みとられているからである。社会的強者やそれを象徴するものを欲望の対象にするとはいくことで、どんなに才能に恵まれていて、その中でどんなに超人的な努力をつみあげようと、既存の社会構造そのものを変えることは決して出来ない。

では、どうすれば、私たちは、抑圧的なシステムを再生産することなく、こうした抑圧的な社会構造の外にそのオルタナティブな生活圏を新しい世界として築きながら、被抑圧者であることから解放されることが出来るのだろうか？

興味深いのは、グレーバーが先ほどの名誉概念を導入した後、「尊厳」について語り始めることである。彼によると「尊厳」は「名誉」とは、全く別物である。名誉は既存社会システムの中で、競争の中で勝者の地位に自分をおくことではじめて得られるもの。つまり希少で、皆にいき渡らないからこそ意味をもつが、これに対して尊厳のほうは、潜在的にはあらゆる人がもち得る。²¹ただし、名誉を追いかける人や、自分の中の「抑圧者の影」に囚われた人たちのように、自分のいま、ここを恥すべきものとして目を背けたり、否定しようとしている限り、尊厳はすりぬけていく。しかし、そんな風に社会的強者の猿真似や後追いをするのはやめて、まずはありのままの自分の存

►21 David Graeber: Debt, Melville-house, 2011, p. 168

在を受け入れ、それに注意をはらい、ケアし、独自性を養う。すると、地位や名誉は得られなくても、誰にも自ずと漲ってくる存在の力が尊厳である。尊厳ゆたかな人は、額にけわしい皺をたたえた誇り高いネイティブ・インディアン酋長のようなもの。抑圧された状態から抜け出たいからといって、白人のようになろうとする有色人種や、男性という強者の役割になり代わろうとする女性のような振る舞いをするのではないだろう。尊厳こそ、私たちの欲望を鑄型にはめ既存社会システムの再生産へと知らず知らずのうちに加担させる生権力をはねかえす免疫になる。

フランスのJRというゲリラ型ストリート・アーティストは、人々のなかにまどろんでいる尊厳を探り当て、あらわにすることをライフワークにしている。彼はテレビのニュースや新聞で繰り返し報道される悲劇的な事件の舞台、貧困やドラッグが蔓延する場所などに好んで出かけていく。そこに住む人たちの明るく、ユーモアや人間味、生命力や威厳にあふれたポートレート写真をとっては、建物と同じくらい巨大さにプリントして、ストリートなど公共空間の壁や、起伏のあるところから眺められる家の屋根に貼りつける。

それだけのきわめてシンプルなプロジェクトなのだが、急所を得ている。ポートレート写真を撮る過程で彼ら自身の話をきき、実際に悲劇にうちひしがれている人たちをエンパワーするという、誰もが想像する意図のほかに、テレビのニュースを始めとしたメディアでのみ彼らに接する限りつきまとう、「被害者」や「悲惨な人々」、「怒れる人々」といった紋切り型のイメージは、それとは全く別な面を、しかも圧倒的な存在感とともにあらわにするJRによる巨大なポートレートを前にして、たちまち色あせ、うそっぽい空事じみたものに見えてくるからである。JRはいわば「名誉」剥奪された人々の「尊厳」を可視化するのである。

真に新しい社会をつくるためにぜひとも必要な、それぞれの人が自分の中に源泉をもつ内発的権力を発揮する出発点となり基盤になるのが、尊厳である。尊厳の力からのみ、私たちは、権力者の後追い、猿真に陥らない、自分の存在の固有性に深く根ざした、必然性のある世界を、持続可能につくり続けられることができる。つまり尊厳こそ、ナウトピア建設の基礎なのだ。

以上の理由から、「する力」の中でも、この尊厳という、その人の存在に根ざし、完全に個性化された力のみを私は、内発的権力という概念のもとに考察対象にしたいと思うのだ。

13 拡張されたアート概念が、内発的権力の源泉をピンポイントで示す

しかしJRの仕事のように、尊厳というこの存在の力を可視化して、それを持っている本人も自覚できるようにすることは、そのスタート地点にすぎない。これが本当に社会を変える大きなうねりにするには、そこであらわになったこの存在の、内側から湧いてくる力のみをたよりに、新しい世界をつくる

不断の創造がこれに続く必要がある。それはもはや一人のアーティストではなく、尊厳の担い手一人一人の仕事である。そこで動員されるべきなのが、「自分でやる」DIYの精神である。

そこで提案したいのは、確実に自分自身の内なる力の源泉、内発的な権力から力を汲みあげ、そこから自分の全権と全責任において新しい世界をつくるには、いつそのこと、あらゆる人が自分をアーティストと定義するのが、よいのではないかということ。

いきなり飛躍するように聞こえるかもしれないが、これには先例がある。「アートは自由の科学である」と言ったヨーゼフ・ボイスである。そもそもアートを創造するとき私たちは、尊厳にどっしりと根を下ろし、私たちの中の新しい世界をつくる内発的権力の源泉をしっかりとつかんで離さない。それは私たちの本当の欲求、夢、ヴィジョンがわきでるイマジネーションの泉であり、私たちを癒したり、行動へと鼓舞する自発的で自然、常に新鮮であらゆるものを若返らせ、蘇らせる力の源泉だ。真正のアートはこの源泉をピンポイントで正確に掘り当てる。そこはまた、外在的権力が課すあらゆる制約の枷をまぬがれた自由の砦であり、あらゆる創造が前提を持たず、新たに創始される場所でもある。この地点をしっかりとつかんで離さず、そこからのみ、新たな世界を、自分の決断、自己決定によって創造していくことにかけて、アートほど技術、ノウハウ、経験を蓄積しているジャンルはない。

つまり真正のアート作品の創造に動員される力と、私たちがこれまでみてきた尊厳に根ざす内発的権力は、少なくともその発出源においては、まったく同じものである。だからこそ、アートである、と定義するや否や、私たちは内発的権力が汲めどもつきず湧き出る場所に正確に照準をあて、その掘り出し作業にかかるというわけである。

実際、真正のアーティストはいつもある意味アウトサイダーで、社会をひしめくさまざまな外在的権力の抗争や渦から独立をたもった自律圏に生きている。自分の中に世界をつくる権力の源泉があるので、それら既存の外在的な権力の威光を身にまとう必要もないし、これらに魅惑されることもない。ようするに貧乏で名声もないのに満ち足りた幸せそうな人が多い。別の種類の権力、つまり内在的権力を全身で体現しているからである。

その結果彼らは、既存社会のなかで、自明視されがちだけれどおかしいところを、鋭く指摘する批判力も持っている。外在的権力に支配された世界を、十分距離を保って客観的に眺めれる立ち位置にいるからである。こうした社会的側面は、これは、そのアーティストが直接政治を作品の主題にしているか否かに関わらない。作品を見る限りまったくノンポリなのに、際限もなくかなり高度な政治的な議論を繰り広げるアーティストに、私はたくさん会い、驚かされたものだった。しかも、アーティストである以上、たんに不平ばかりをいう批評家とちがって、そこであらわになった問題を正したり対案提示すべく、能動的、変革的に新しい現実をつくっていく自信、パワーにも満ちている。内から世界を新たにつくっていくこの力こそ、彼らが毎日職業の中で鍛えているものだからだ。つまり彼らは内発的権力を駆使することにかけては達人なのである。

アーティストが職業柄、日々、世界をつくる内発的な権力を鍛え、行使していること、これこそ、社会を非暴力的に内から変革する力とまったく同じものであることがわかるとき、私たち人間は全員、社会という彫刻を協働でつくる社会彫刻のアーティストなのだというヨーゼフ・ボイス一見強引にきこえる思想も、腑に落ちた自然なものに見えてくる。

と同時に、ジャンル、制度の壁を越えてこの二つをどんどん融合させることで、社会もアートも自ら刷新し、蘇ることができるのではないかと、壮大なプログラムをたててみたくなってくる。

自分のモラルとクリエイティビティのみに依拠しながら、創造や実践の全責任を負う、いかなる外在的権力にも追従しないし、そのお墨つきも求めない——アートが本来もっているそのような独立した自己決定力のみが、理想社会を彫塑することができるのだから。アートはその独立性と自由、自己決定力によって、新しい社会をつくる一番信頼できる力となるのである。「アートのみが、今、唯一残された革命を起こす力なのです」²²というボイスの言葉は、あながち誇張とも言い切れないところがあるのだ。

▶22 ラップマン、シャータほか『ヨーゼフボイスの社会彫刻』、人智学出版社、1986年、104ページ。

14 「個人的なこと」ほど政治的効力をもつ

もう一つ、内発的権力という言葉で、ホロウェイのいう「する力」の中でも、個性の自己実現のためにあてられたものだけ特化してあつかいたいと思った理由がある。この力は、規範化され、抑圧される以前の、その人の人格の発露すなわち「個人的なもの」になればなるほど「政治的な力」を発揮するように見られるからである。たとえば社会規範への適応がこれまで押し付けてきたあらゆる自己欺瞞、抑圧をほどこきながら、自分の本当の心の希求を探り当てる自己探求的な志向や、アートにきわまるようなその一回的な表現、あるいはマイノリティとして社会からスティグマを押されたアイデンティティを、〈尊厳〉みなぎる彼らの固有性としてポジティブにとらえなおすところなどは、公認の現実の圏外にあるという意味ではじめはきわめて「個人的なこと」として体験される。その証拠に、それを表現し、内面の隠れ家から公的領域に引っ張り出すには大変な勇気があるし、既存社会との間に摩擦も生じる。しかしあえてそれを行い、それを単に自分と同類の人々とのみならず、不特定他者と分かち合うコミュニケーションに成功したときほど、自己実現のよろこびに満たされることはない。それはとりもなおさず、公的領域をより多様かつ寛容で、包括的なものにひらくことにつながる。

個性の自己実現が同時に社会形成力としても効力を発揮するときに味われる、内と外がつながるこのよろこびはまた、そのいとなみに続ける動機をたえず供給し、持続可能性をもたらししてくれる。

内的な自己実現と社会変革の効力とくにその持続性の間に見られるこの相補的關係にいち早く気づいた人に、パウル・H・レイとシェリー・ルース・

▶23 Paul H. Ray, Sherry Ruth Anderson:
Cultural Creatives, Broadway,
2001.

アンダーソンがいる。彼らは、90年代後半から全米に広がりつつある対抗文化を「カルチュラル・クリエイティブ」と名付けた。²³カルチュラル・クリエイティブの特徴は、「スピリチュアル」であると同時に「政治的である」ことで、そこでは、ニューエイジの流れをくむスピリチュアルな生き方の探求と公民権運動やソーシャルジャスティス、環境保護といった社会的公正を政治的に追求する運動が一つに融合する。政治性とスピリチュアリティのこの両極の中でバランスしたところに、彼らは「カルチャー」の領域を見るが、ここにしっかり腰をすえていることこそ、社会運動に成功ファクターでもある。しかしスピリチュアリティが政治性のどちらかの一極に傾き、反対側の極をないがしろにすると、力を失い短命に終わることを、彼らは60年代以降、今まで続く社会運動の歴史をひもときながら示そうとした。

私はこの結論に賛同するものだが、なぜそうなのかを説明するうえで、二人のように二極をたてて二つをバランスするという捉え方はしない。私にとって、カルチュラル・クリエイティブとは、ただ、内在的権力によって新しい世界をつくるという一つのことをする人たちのように見える。そもそも新しい世界をつくるというこの一つの行為そのものが、その両極に関わるものだからである。

というのも、まず、そこにはあたらしいものの見方、新しい存在のあり方、新しい生き方をする主体が前提として必要になるが、それには内面性を追求する姿勢が不可欠だ。つまり先ほど〈尊厳〉の力として見届けたような、スピリチュアリティにまで達する〈個〉の存在の深み——自発性と自由の根拠——にしっかり根ざしてこそ、外在的権力の磁場からみとられ、それに媚びたり適応することに足下をぐらつかされることもなく、こつこつ新しい世界をつくり続けることができる。

と同時に、内面探求の結果明らかになった自分の隠れた希求、性向を、先ほど、ナウトピアの特徴として明らかにしたような、日常ベース、待ったなしで、できることから始めるDIYの方法論で不断に実現していくとすればどうなるだろう？（それは、今の世の中、自分の内面的な希求に直面した人たちにありがちなように、余暇、趣味、あるいは制度としてのアートといった引き出しの中のみでこれを内向的に発揮させるにとどめ、せつかくのクリエイティビティを社会を変革することにかけては衛生無害にすることをやめるということでもあるが）。するとそれはおのずと公的領域へとあふれ出すにはいられないだろう。そしてそこでいったん他者との間で共有可能なものとなれば、そこに自分がやろうと思いつきながら果たせなかったことをかいま見て、心動かされる人がでてくるかもしれない。そして、先ほどみた女性の社会進出の幅を広げた運動のように、単発におわらず、おわりなき連鎖反応を呼びながら、一つの文化＝政治現象へとまとめあげられていく。それは既存社会のエッジに切りこんでいかざるを得ず、それにつれ、社会が変わり、政治的効力も発揮される。

つまり、内面性の追求と、それを公的領域で他者と共有可能なかたちにして社会変革を徐々に起こしていくという、内外両面での創造は、その間に、制度によるブロックや歪曲が介在しない限り、同時進行するものだと考える

のである。そこから生まれるクリエイティブでそうして社会が変わった後、これを事後的にみると、レイとアンダーソンが確認したように、新しい生き方の探求と言う内面性と、政治的な実践という外面性の両面を兼ね備えバランスさせることが、社会を変える運動の必要条件として見えてくる。

15 | 内発的権力の行使者とドロップアウトの違い

外在的権力を追う人たちが、名誉や地位を求めてまっしぐらなのに比べると、内発的権力を発揮する人たちは、いかにも風変わりで、妙なことに熱中している変人で、見るからにさえない、汚い格好の人も多い。こんな人たちが、いったいどんな権力を持っているというの？と私自身さえ懐疑的になることさえある。しかし外在的権力の尺度で計られることに無頓着で、その意味ではまったく力を抜いているその様子こそ、彼ら自身、内発的権力がそこから湧いてくる自由の砦に住んでいる証拠ともいえる。内発的権力の側に立つとは、ようするに、対世間的には「ドロップアウト」という言葉でよびなわされている状況に身を置くことのように見える。とはいえこの類似性は、外在的権力の影響から身を引き離し自由になるというスタートラインだけで、その後の日常レベルで不断に続く創造行為は、単にドロップアウトした人たちからは袂を分かつものだ。

いったん自分の創造行為をナウトピアとして具現させ、機能させると決意したとき、私たちは一匹狼でもいられなくなる。内発的権力からナウトピア建設までの道は、他者との協働を回避しては辿れない。前例のないことを思いきってやるリスクを犯すのだから、人一倍の責任感も必要になってくる。外在的権力がつきつける規範に従うことをやめることは、前例さえ追っていれば何とかなる官僚主義的なお役所仕事やルーティーンワークの反対で、失敗のリスクはきわめて高いし、そこから帰結することに対して、全責任を負わねばならないのも確か。制度の支えなくして、新たな現実を通用するものにするには、他の人とつながり、協働し、成果を共有したりフィードバックに敏感になることを、人一倍大切にしないと不可能である。

話をまとめよう。内発的権力とは、ふだんクリエイティビティと呼びなわされている力を日常的な現実の形成のために動員し、公的領域に溢れ出させる力である。これを権力と呼ぶのは、耳慣れないことだけど、気づいてみると白蟻が巨大な巣をつくっていたように、彼らの日々の実践があるとき一つの世界として可視的になり、彼らの居場所、表現圏が、都市の中にその不可欠の一部としてしっかり築き上げられる——と、それは、彼らの功績、権利、尊厳、彼らの個性が都市に刻印されることでもある。だから、この完成点から翻って見ると、ここにいたる彼らの実践と創造を突き動かしていたものが、れっきとした権力だったことが明らかになるのである。

こんな風に、おのれを権力として証明するそこまでの完成をみた好例とし

てあげられるのは、プロローグでも紹介した、サンフランシスコ、カストロ街に住み着いたカミングアウトしたゲイの人たちだろう。彼らが全米各地から移り住み始めた当初は、激しいホモ・フォビアのなか、地価が下がり、警察も消防署のような公共サービスさえ、必要なときも来てくれない始末だった。しかし当人たちは、そんなのど吹く風で、クロセットから出て、パブリックスペースでゲイであることを公言したときの自己肯定の祝祭感を、街いっぱい溢れ出させ、古めかしいヴィクトリアンハウスをパープルや若草色で鮮やかに染め上げ、カストロ街を毎日が祭りのような魅力的な場所を築いていった。いまやこの地区はサンフランシスコ有数の観光地、サンフランシスコといえば、金門橋にビート、ヒッピーの次にゲイというほど、街の名物としての地位を築き上げていく。

内発的権力は未来の権力の萌芽なので、これを展開しながら地道に少しずつ世界をつくり、公的に通用するものにするプロセスの中でしか自分の存在を証明できない。誰もあらかじめお墨付きを与えてくれないし、いきなり権限を与えてくれる人もいない。それどころか、ハラスメントや迫害対象になる可能性の方がずっと高い。そんな逆境の中、道なき道を開きながら、自分がちゃんとした世界を形成する力であることを、すべて自力で証明するしかない。だから、そのはじまりは、権力どころか、しばしば、もっとも権力からほど遠く見える。それは実際、負け犬や変人のファナティックだったり意固地だったり、滑稽な酔狂に見える。

しかし彼らが作る世界がだんだん分節化され目鼻立ちをあらわにし、その理念的な内実、街全体の中での存在価値をはっきり主張し始めるにつれ、うまくいけば、共感者を呼び、多くの人を引きつける魅力を発しはじめる。それにつられて、これまで旧い世界にいた住人も、どんどんこちらの世界へ移ってくるかもしれない。それは一時的な訪問だったり、恒常的な移住だったりするが、はっと気づいてみると、こちらの世界の方が、旧い世界よりも大きくふくれあがっている、ということさえあり得る。このとき、世界をつくるこの力は、無血どころかあらゆるトップダウン的な強制を抜きにして革命を起こしたことになる。

16

内発的権力と無尽蔵さの感覚。一定の色合いに染められた空間をつくっていく。よろこびの政治学。非暴力的な革命プロセス　メタモルフォーゼとしての革命。

内発的権力は、その行使者が新しい世界を自分の周りにつくればつくほど無限に増大していく。つまり希少性や有限性の感覚を伴わないのも特徴である。だから他者と競争するモチベーションも生まれない。そこが、外在的権力の獲得にあくせくする人との大きな違いである。アメリカの西海岸は内発的権力的な発想法をする人が多いように見える。たとえばパークレーで教鞭をとっていた社会学者のホワード・S・ベッカー（Howard Saul Becker）は、

あるインタビューで、彼の「アートワールド」論が、一見類似した、ピエール・ブルデューの「文化資本論」とどう違うかと言われた時に、ブルデューは「資源の有限性の前提に立っている」ところが自分のアートワールド論と違うといい、フランス、アメリカ両国の社会学者の事情と比較している。フランスでは社会学は、当時まだ市民権を得た学問とはいいがたく、少ないポストをめぐる競争し、覇権のために争わなければならなかった。しかしアメリカでは、大学を中心にさまざまな機関が社会学者を必要としているせいもあり、実にたくさんの社会学者がいて、それぞれの社会学者が、別なことを言い出すものだから、社会学者の数と同じくらいの学派がある。どんなにクレイジーなアイデアでも、しつこく言い続ければ、賛同する物好きの人も、一人二人は現れるだろう。二人以上集まれば、学会がつくれるし、そうなればあなただっていっばしの新学派の創始者。誰もあなたを評価してくれなかったら、あなたが賞をはじめればいいと答えている。ベッカーの発想が、徹頭徹尾あたらしい文化的価値をつくることから発しているのが見て取れる。

フランスの古い社会から出て来たブルデューにとって、文化的な権力は、既存の制度の中での覇権をめぐるさまざまな策略をめぐる争った結果勝ち取られるものであるのに対し、新大陸の住人であるベッカーにとっては、開拓者が町をひらくように、自分で新たにいくらでもつくれるものなのだ。だから有限なものではあり得ないし、権力を掌握できるかどうかは、自分にかかっている以上、それをめぐって争うこと自体がナンセンスということになる。つまり、ベッカーは内発的権力の発想に立っているのである。

17 空間の掌握が重要になってくること

しかし内発的権力も、実際に新しい世界をつくり、それを他者と共有できるようにするには、その世界を表現する空間が必要になってくる。先ほどTAZと比較したり、「パラレルワールド」の名の下に論じたように、それはひとまず、一時的で、既存の旧い世界としての街にオーバーラップしたかたちをとる。しかし少なくとも、運動が行われている間は、特定の雰囲気や、ルールに支配された空間が、参加者全員に体験され、共有されるよう、ナウトピアンたちは細心の注意を払う。というのも、それこそがナウトピアの実体そのものだからだ。

このことを一番はつきり自覚し、「よるこびの政治学」というかたちで、理論的にも定着させたナウトピアの運動にクリティカルマスがある。まずはこの事例の概略を紹介したい。

事例紹介 その2 クリティカル・マス

クリティカル・マスとは、月に一度、最後の金曜日の夕方6時に、サンフランシスコのマーケット・ストリートの始点である、フェリービルディング

前に、多い時は数千人にのぼることもある沢山の自転車乗りが集まって、一度にどっと道路に繰り出すことで、車を一時的に閉め出して、どこでも自転車専用道路にしながら街中をサイクリングする社会運動である。20年前の1992年の9月29日の金曜日に始まった。当時自転車に乗る大人は、車社会のアメリカの中では超マイノリティ。自転車といえば子供が貧しい人たちの乗り物で、馬鹿にされたり冷やかしの対象になるだけならまだしも、横暴なドライバーの間では、命の危険も隣り合わせだった。クリティカル・マスのはじまりは、そんな弱者のサイクリストたちが、団結して一緒に職場から帰ることで、いくらかパワフルになれるかと思いついたのがきっかけだったという。自転車でごったがえす中国の大都市の通勤風景がインスピレーションになったという人もいる。誰もこれがうまくいくか、実際にやってみるとそこで何が起るか予想もつかなかった。しかし、最初のクリティカル・マスにはすでに60人ほど集まり、思った以上の盛り上がりを見せた上、その後どんどん膨らんで、20周年を記念する今年のサンフランシスコのクリティカル・マスには、世界中から5000人ものサイクリストが集まり、街の交通を完全に麻痺させるにいたる。その間、話を聞いたり目撃して、別の場所で同様のことを試みる人も出てきた。その頻度や規模はさまざまだが、全米各都市、カナダ、南米、ヨーロッパを中心に350ほどの都市に広まったという。

クリティカル・マスという言葉はもともと、物理学やマーケティングで、ある現象が爆発的に進むために必要な臨界値になる量のことをさすが、直訳すると「批判的な大衆」とも読める。この運動にはその両方の意味がかけられているようだ。車にあふれたストリートは、とくに老人や子供を見かけるだけでははらすような、交通事故の危険がともなうだけでない。環境破壊や国際紛争の火種となるエネルギーの石油依存の象徴でもある。これに批判的な人たちが群れをなして、車の代わりに自転車があふれたらストリートはどう見えるか、石油の代わりに自分の足でエネルギーをつくるのはどうなるかを、直接行動で示すのである。参加者数が臨界値を超えると、それは本当に街を変えるかもしれない。

とはいえ、その創始者の一人、クリス・カールソンによると、クリティカル・マスが何を意味するかについては、参加者の数だけ回答がある。サンフランシスコだけでも、何らかの合意的見解があるわけではない。自転車に乗ることで石油利権のための戦争を防止しようとするゴリゴリの社会運動家から、単にボーイフレンド、ガールフレンドを探すために参加している人まで、本当にさまざまである。しかしそれはクリティカル・マスの欠点ではなく、強みなのだ、というのがクリスの見解だ。幾様にも解釈・展開できるからこそ、多様なあらゆる人たちがそこに自分の関心や欲望を投影できる。²⁴

何より、これだけ解釈多様にもかかわらず、単にみんなで自転車に乗るという、誰の目にも一目で理解できる、シンプルなアクションからなることがすばらしい。これ以上切り詰められない単純なアクションにあらゆる含蓄がこめられている。まるでよくできた古典的なアート作品のような運動なのである。社会運動にも古典というものがあるとすれば、その筆頭にあげられるようなできばえだと思う。

▶24 バークレーに拠点を置く独立ラジオ局KPFAの番組、Against the Grainで2013年1月15日放送されたMeasuring Critical Massでの、クリス・カールソンのコメントによる。

理屈はともあれ、実際に私自身、何度か参加してみて、なぜこれがこんなに成功して世界中に広まったか、合点がいった。とにかく楽しい。車のストレスから解放されて、どうどう道の真ん中を自転車に乗っていく解放感がすばらしいし、いつでも誰でも参加できて、リーダーもいず、次にどこに行くかも、その場の合意でそのつど決めるゆるさもいい。着ぐるみを着てさまざまな仮装をしたり、「石油でなく脂肪を燃やせ!」といったユーモラスなプラカードを自転車にくくりつけた参加者をみていると、月恒例のお祭りさながらだ。はじめはドライバーとしてクリティカル・マスに遭遇。車をしばらく止めなきゃならなくて苛立たされたけれど、車の窓から見えたそのあまりに楽しそうな様子に心動かされて、翌月には、車を降りて自転車の群れの方に加わったという人に、私は実際、何人も会った。²⁵

クリティカル・マスの社会運動史への一番の貢献は、こうした理屈抜きによるよこびの追求が、運動の持続と拡大のために、大変効果的であることを発見したことだろう。創始メンバーの一人、スティーブン・ボッツインの言葉をかりれば、「幸福の社会的共有は、論理的な説得では決してできないことをなしとげる」。²⁶

「よこびの政治学」Politics of Pleasureとよばれるこの戦略は、社会主義圏崩壊後、威信を失い混迷し、またイデオロギーの硬直や派閥争いに疲弊しかった左翼運動に一石を投じることになった。あるいはグローバル・ジャスティス運動の、大企業の不正を責め、既得利益者たちの良心の呵責をあおりながら、どこか遠くの人たち、あるいは自分たち自身の惨状をうったえる、そんな社会運動のじめじめとした調子を吹き飛ばした。

あらゆる人が資本主義の利潤原理の拘束衣を着せられ、弱肉強食の競争社会を闘い抜くか、あるいは闘い破れ打ちのめされて、被害者意識のとりこになっている。そんな社会を批判する当の人々が、批判される対象に逆に似てきてしまい、ミイラ取りがミイラになる ― これほど暗く、混迷した世の中では、大勢の人たちが、翳りを知らぬよこびに酔いしれながら、パブリックスペースにあふれるだけで、それは転覆的な力を持つことになる。

創始者の一人、クリス・カールソンの言葉をかりれば、重要なのは、これまで誰も決して味わったことのないような前代未聞の喜ばしい場所をつくること。そうすれば、放っておいても参加者は増え続け、運動は持続し、勢力は増していく。デモは、政治的な目標の伝達手段でもなければ、その達成手段でもない。目標そのものの実現なのだ。つまり、闘争の後にユートピアが来るのではなく、「闘争そのものがユートピアになり得る」²⁷。実際、その様子は、社会運動というより、お祭りに近い。自転車を漕ぐエネルギーで動くサウンドシステムのついた自転車や、シャボン玉製造機付きの自転車が、陽気な音楽と光り輝くシャボン玉の水玉模様をあたり一面に広げ、ドラゴンやシカやメリーゴーランド、サンフランシスコにちなんだゴールデンゲートブリッジの形をした自転車など、さまざまな大きさ、高さのDIYの改造自転車や、思い思いに仮装したサイクリストが中にたくさん混じる。普段は横暴なドライバーの下で縮こまってきた身体のみでなく、想像力も存分にのびのびと解放させる場なのである。

▶25 私はクリティカル・マスに2011年3月25日、9月30日、2012年9月26日、28日に参加。その際に、ランダムにさまざまな参加者にインタビューした。この章の記述の多くはそれにもとづいてる。

▶26 Steven Bodzin: Politics can be fun, Critical Mass, Full Enjoyment Books, 2012, p. 101.

▶27 Steven Bodzin: Politics can be fun, Critical Mass, Full Enjoyment Books, 2012, p. 102.

大量の自転車で道路を乗っ取るなど、ずいぶん暴力的な運動に聞こえるが、実際に参加してみると、要は新しい世界をつくることにあることがわかる。

クリティカル・マス組織し、持続するやり方にも、前代未聞の新しい世界をつくる気概がみなぎってる。たとえばルールは毎月最後の金曜日の6時にマーケット・ストリートの始点に自転車を持って集まることのみ、それ以外、何の決まりもなければ、運営組織もない。その都度どんなコースをサイクリングするか、あらかじめ何も決まっていないうし、もちろんリーダーもいなければ、責任者もない。まったく脱中心的でヒエラルヒーのないこの構造は、たとえば警察が逮捕したくても、誰か特定の人物を連れて行けない——かといって通常1000人は優に超える参加者全員を連れて行くことは不可能——という実用性がある。

また、あらかじめどこへ行くかプランもたてない。しかし驚くべきなのは、それでも、グループが群れとしてまとまって、集合的知性のような組織的な動きを見せること。どこをどう走るかは、その都度、みんなの何となくの合意、その場の流れで決める。道路を無理矢理乗っ取るのだからもちろん危険はつきまとうし、とっさの判断を強いられる不測の事態に遭遇するのはしょっちゅうなのに、いつも状況をよみ、互いの意向を瞬時に直感的に把握する相互的な調節により、何となく解決している。つまり、常に移動しながら、直接参加型民主主義を文字通りの運動として体現する実験の場なのである。彼らはこの方法を「組織化された偶然」organized coincidenceと呼んでおり、たとえば信号や交通ルールがほとんどないか、あってもまったく無視しているのに、なぜか滞りなく交通が流れる南アジアの道路などと比較している。²⁸

特定のリーダーがいらない代わりに、全員がリーダーになって主体的に判断して行動するという暗黙の了解もある。誰かが何か問題点、改良すべきところに気づいたら、それを明記した小さなビラを、その人自身が手作りし、自分の職場でも学校でもどこかコピー機のあるところで、何百枚も複写、次回のクリティカル・マスの開始前にマーケット・ストリートの始点にたむろしている自転車乗りたちにランダムに配る。いつのまにか定着したこの方法を、彼らは「ゼロクラシー」と呼んでいる。ゼロックスさえあれば、誰でも行えるビュロクラシーという意味だ。私がクリティカル・マスに参加したときにも、ビラを配る人たちが何人かいた。クリティカル・マスの草創期には、サイクリストの態度など、運動そのものをテーマにしたビラが多く飛び交ったというが、今は各人が関わってる別の類似した催しをPRするためのビラが多い。女性やマイノリティの問題、環境問題関連のビラが多く、クリティカル・マスがこうしたオルタナティブな社会運動とメンバーがオーバーラップしている様子がみてとれる。

「よろこびの政治学」、「組織化された偶然」、「ゼロクラシー」、「肯定的放棄」——クリティカル・マスが、20年続く実践のうちに生み出したこれらの概念は、いずれも、リーダーのいない参加型直接民主主義を、自転車で移動しながら動態的に実現することや、運動が生み出す場所自体が持つ生命力、勢いを大切にして、勢力拡大することに関わるものだ。これらの概念は、クリティカル・マスの普及するにつれ、世界各地の社会運動に影響を与えていることになっ

▶28 2012年9月26日、サンフランシスコ市立図書館で行われた、クリティカル・マス20周年を記念して編纂、出版されたエッセイ集、「Shift Happens!」の出版記念パーティでその本の寄稿者の一人、Hugh D'Andradeの発言より。

た。たとえば昨今のスペインでの叛乱や、ウォール・ストリートにはじまる占拠運動にも、当地のクリティカル・マスメンバーが、中で活躍するうちに、その流儀をもちこんでいるという。²⁹しかしその詳細を明らかにするには、別の研究をまたねばならない。

18 | よろこびの政治学と運動における手段とプロセスの一致

クリティカル・マスが20年の実践の中で生み出した理論の中でも重要なものに「よろこびの政治学」というものがある。これは、メンバーたちが、「幸福の社会的共有は、論理的な説得では決してできないことを成し遂げる」こと、に気づいた時に始まった。クリティカル・マスに限らずあらゆるナウトピアの運動が共通して体現しているもので、いかにもサンフランシスコらしい、能天気で緩んだ雰囲気醸し出すものだが、単なる楽しみだけが味噌ではない。ナウトピアという新しい世界をつくる運動を、単に旧い世界を上塗りするにすぎない運動からはっきりと切り離し際立たせる、メスになるような鋭い概念でもある。ここでその意義や可能性の射程を検討してみることにしよう。

よろこびの政治学はまず第一に、社会運動における手段と目的の乖離を癒す力をもつものだ。それを最も集約して表す言葉はおそらく、クリティカル・マスの「デモはユートピアへの道ではなく、ユートピアそのものであるときにもっともよく機能する」だろう。

こうした発想は、実際、こと社会変革の領域において、いかに稀なことだったか。それは、たとえば平和実現のためのはずの運動が、アグレッシブに行われたり、人類愛の理想を実現するはずの革命が、党派争いや肅正や強制収容所を生み出してきたことを思えば、明らかだろう。そうしたことが自明なものと思なされるあまり、当事者自身、そこにある矛盾に気づいていないことも多々ある。あるいは、気づいていても、「目的は手段を正当化する」と暴力を強行することも多い。

こうした手段と目的の乖離は、まずは外在的な権力を掌握。その後、その権力の座から、トップダウン的な「させる力」で理想を実現するという発想で社会を変えようとする限り、どうしてもつきまとう。ジョン・ホロウェイの言葉をかりると、「運動とその重要性に対して、どんなに口先だけの賛美がなされたとしても、権力獲得を目標にすると闘争が道具化されてしまうことは避けられません。そのとき闘争は政治権力を獲得するという目的を持つ事になり、闘争自身はその目的を達成するための手段となります。闘争の中にあるこの目的達成に役立たない要素はしたがって、二次的な重要性しか認められなかったり、あるいはまったく抑圧されることになります。これにより、闘争の中にヒエラルヒーがもたらされますが、道具化とこのヒエラルヒー化は、たがいに相まって、闘争の貧困化をもたらします。これにより、あらゆる

▶29 バークレーに拠点を置く独立ラジオ局KPFAの番組、Against the Grainで2013年1月15日放送されたMeasuring Critical Massでの、研究者、Adriana Camernaのコメントによる。

▶30 ジョン・ホロウェイ『権力をとらずに世界を変える』同時代社、2009年、43ページ。

る闘争のかたち、資本主義を拒絶する意志のさまざまな現れ、別の社会という夢のための本当に多様な戦い方が、フィルターにかけられ、取り除かれることになるのです。(…)情緒的な関係、官能性や遊び、笑い、愛しあうことといったことは、個人的でとるにたりないこととして、優先順位の最底辺におかれることになります」。³⁰

運動自体を外在的権力をとるための道具にしてしまうと、権力掌握への効率性ばかりを優先させた一面的なもの、「目的のためには手段を選ばず」といった一方的で強引なものになる。そして、理念が本当に実現されたときにもなう、その多様な展開、ヴァリエーションを包容し、参加者の能力、才能を引き出しながら勢力を拡大する豊かさからどんどん遠ざかっていく。

これに対してナウトピアの運動にとって権力は内発的権力にはほかならない。つまり彼らは、権力を、私たちの中にある、新しい世界をつくるクリエイティブで実践的な力としてみる。と同時に、私たちによってつくられた世界の魅力、実績としてその結実をみるものとしてこれをとらえる。ようするに権力掌握は、新しい世界をつくるプロセスと不可分に一体化しているので、ホロウェイが嘆くような手段と目的の乖離からはまぬがれている。と同時に、運動を単に目的達成の手段としてしか見ないことから帰結する、効率主義的な一面化からもまぬがれている。むしろ、まったくこの逆で、運動自体、「情緒的な関係、官能性や遊び、笑い、愛しあうといったこと」からこそなっていると考えるし、またこれらを大切にしようとする。ナウトピアの運動がめざす新しい世界は、そうしたカオスのなかでこそ受胎されることに、皆、うすうす気づいているからである。

社会運動の過程にみられる目的と手段の乖離を野放しにするか、それともナウトピアの運動として、そのプロセスの一步一步に、目的をすでにそこに実現してしまうアーティスティックな熱をそそぎこみ、これを祝祭に変えるか。クリティカル・マスやパーキング・ディなどは後者の道をとることで大きな社会的影響力を持つ国際的な運動へと拡大していった。

産業社会から、情報社会への時代変化の背景に、ナウトピア的な運動への社会運動の変容への追い風を見てとるのはやさしい。物理的な力、心身に加えられる暴力的脅威による強制より、自発的で、自然な参加をいざなう魅力的な世界の呈示が人を動かす時代が到来しているのである。

19 | よろこびの政治学とモラル

しかしそこにはまた、より重要なファクターとして、モラルの問題もからんでくるように思う。というのも、運動が手段にすぎないものとなったとき、それが実現しようとしている理想もまた形骸化してしまうからである。つまり、理想ががすっかり抽象的な中身ののないものへと形骸化してしまい、それをやっている当人にとっても、ちっとも実感的に体験されないものになって

いる証拠である。さもなければ、それは、運動そのもののなかに、何らかのかたちで実現され、現れれずにはいられないからである。となると、この理想の実感の不在や自信のなさを埋め合わせるように、それを強制する暴力ばかりが肥大していくのが常である。

それと並行してすすむのは、社会変革の過程が、単に現行社会に対して攻撃的、破壊的な鬱憤をはらしたい人や、権力欲を持っているにすぎない人たちの巣窟としてのとられてしまうことだろう。実際、手段と理想がドラスティックに乖離する社会変革の舞台裏をのぞくと、理想を本当に実現しようなどと、真剣に考えている人は誰もいなくて、単にその理想を、人々の支持を得て自分が権力をとるための体のよい口実、外在的権力の獲得闘争のための武器としてしか見ていないことも多い。

このようなことからみてとれるように、「平和への道そのものが平和」なものとなり、目的に達するまでのプロセスや手段そのものが、目的の実現とされるかどうかは、そこに関わる人たちが真剣にその理想を生きているかどうかを示す、一種の嘘発見機の役割を果たすのである。モラルが真に生きられているとき、それを権力獲得のための旗印として使ったり、人を支配する道具として使うことはできなくなるからである。

しかしこのように手段と目的がすっかり乖離して、暴力と強制の害となった病んだ革命の過程も、そこに目的が実現された新しい世界を、そのひとかけらにすぎなくても直接行動と実物呈示で実現させるよろこびの政治学を注ぎこむことでいやすことができる。

手段と目的が乖離して、目的のためには手段を顧みなくなった社会変革の過程が持つモラル上の問題は、脱産業化社会の到来を待たなくても原理的に自覚され得るものだ。

私の知る限り、よろこびの政治学がこうした革命の過程におよぼす治癒力について最初に本格的に論じたのは、18世紀末ドイツの詩人、フリードリヒ・シラーである。彼がこのことについて考え始めたきっかけは、フランス革命の経験だった。彼も他のヨーロッパの青年たちと同様、フランス革命の「自由、平等、博愛」の理念に熱狂する。が、これらの理念の高邁さと、それを実現しようとしたプロセスで生まれた背筋も寒くなるような恐怖政治との落差はあまりにも衝撃的で、その理由を問うことが、この詩人のライフワークの一つになった。

彼の下した結論は、フランス革命の問題はその理念が、人々に実感可能な美的状態のかたちで伝えられ、共有されてこなかったことである。

美的状態という名の下にここで彼が考えていたものは、よろこびの政治学に見られるような手段と目的の一致、理想が単なる抽象的なお題目としてではなく、いまここで実現されたものとして、五感で体験可能な、私たちをすっぽりつつみこむ状態として生きられた状態をさしている。

理想が抽象的なイデオロギーと堕し、誰も自分のものとして実感できなくなり、ただ、一部の人たちが外在的な権力を獲得するための旗印としてしか役に立たなくなったとき、博愛の理想の実現のために大勢の人たちがギロチンの露に消えるような手段と目的の乖離が野放しにされてしまった。

このような状況の人々に必要なのは、そうならないように、倫理的な説得

▶31 フリードリヒ・シラー『人間の美的教育について』法政大学出版会、2003年。

をこころみたり、政治的な論争を積み重ねることではないだろう。それは目的を抽象化した「理想」として呈示するばかりで、プロセスと目的の実現の乖離をさらに広げることになりかねない。

そのような〈説得〉はやめて、人々が「美的」状態のなかでそれを〈自らの体験〉として生きるようにしむけることが肝要だとシラーは説く。それにより、人の意識が、革命の理想に追いつき、自らこの理想を生き、自力で展開できるようになる。そうすれば、社会はおのずと変わらざるを得ない。これが、シラーがフランス革命の時代に編み出した美的教育のプログラムだ。このとき平和への道そのものが平和に、友愛への道そのものが友愛にあふれたものになり、革命のプロセス全体に、革命の実現が偏在したものになる。

ここから、美的教育のプログラムによって国を内側から変革するという構想も生まれてくる。³¹

シラーはベートーベンの第九交響曲の最終楽章「歓喜に寄す」の詩の作者として知られるが、これこそアートがひらく美的状態の恍惚こそ新しい世界を、共同体を生み出すというこの詩に含まれたヴィジョンこそ、よろこびの政治学の古典といえるかもしれない。

もちろんここでシラーが考えていた政治的理念の実現の場は、社会運動の枠組みの中ではなく、アート作品という枠組みの中にある。しかも古典的な舞台芸術、音楽、詩といった、いわゆる殿堂にある作品で、ストリートの雑踏のなかにあるものではない。ナウトピアの運動に見られる革命の理念のストリートでの実現と比較するのは無理があるという声もあがるかもしれない。

この違いの背後には、2世紀あまりの時代の変化がある。18世紀末とうってかわって、今は、マルチメディアを介した情報の洪水に常にさらされた時代。アート体験は、その洪水のなかのほんの片隅、一選択肢を占めるに過ぎない。しかもアートの専門化と商品化がすすみ、娯楽や教養のコンテクストの中で、日常の気晴らしか、装飾、権威の旗印になってる。このような今の時代のアートを取りまく文脈において、シラーのように、社会変革へと溢れ出るような理念による全人格の変容の体験をアートにのぞむのは、不可能といわぬまでも大変難しくなっている。もしシラーが今の時代に生きていたら、むしろ、日常生活の場やストリートで、直接アクションを仕掛ける方法を選んだと思えるほどである。

したがって、ここではむしろ、ナウトピアの運動との相違点ではなく、共通点の方に着目しながら、シラーのいうアートの政治的機能についての分析を介して、よろこびの政治学が潜在的にはらむ可能性をもう少し深く追求してみたいと思うのだ。

20 | よろこびの政治学とモラルのパラドックス

シラーのようにアートの側からの政治への接近が、政治の側からのアート

への接近であるナウトピアと、「よろこびの政治学」において出会うのは当然ともいえる。というのも、アートは、メッセージを五感で体感できる、私たちをすっぽりつつみこむ現実として示すものだからである。作品という媒体そのものが理念の実現の場、目的そのものになる、と言いかえてもいい。だから、他のいかなる目的のための道具にもならない、その自己目的性で、アートは、他のあらゆる活動から際立っている。この性質を、政治的メッセージに動員するとき、よろこびの政治学の純粹型ができる。アートによりとらえられ、表現される瞬間、革命の過程には、手段と目的の分離を癒す自己目的性がたっぷり注入されることになる。

それにより、人の意識が、革命の理想に迫いつき、まずは人が変わることで、おのずと社会が変わる自然な社会変革のプロセスがはじまる可能性がある。これが、シラーがフランス革命の時代に編み出した美的教育のプログラムである。このとき平和への道そのものが平和に、友愛への道そのものが友愛にあふれたものになり、理念実現のモラルが革命のプロセス全体に偏在したものになる。

しかしシラーの美的状態における、このプロセスと目的の一致を追求する姿勢はとても厳密で、一種のパラドックスをはらむまでにいたっている。シラーはこの美的状態を、そこから生きたモラルが生まれる場所とするために、あらゆるモラルの強制から自由なものとして確保しようとする。

少しわかりにくいのが、この辺の事情について、シラー自身がこれをいかにも劇作家らしくドラマチックなたとえ話で説明している箇所があるので見てみよう。『カリ阿斯書簡』のなかの旅人を助ける通行人の例である。路上で病み苦しむ人のところへ5人の人が通りがかかるという話で、5人とも、その人を助けようとする点では変わらない。ただ、動機がそれぞれ異なっていて、1番目の人は苦しんでいるのを見る不快感に耐えられず、2番目の人は世間体や打算から、3番目の人は道徳的義務感から、4番目の人は、相手が実は自分の敵だと気づいたにもかかわらず、克己心を奮い起こして助ける。しかし5番目の人は、思わず知らず、全く当然、自然なこととして、無条件に相手を助ける。シラーの基準によると、5番目の人のみが、「美的状態」にあったという。というのも、そこには「本能となるまでに自然になった理念」があるから。彼の助ける行為には、強制や、強制につきものの本音と建前の分裂や、葛藤が一切ない。ただただ自然、自由にのびのびふるまいながら、「汝～なすべし」といった社会的規範や、敵・味方、共感・反感、過去の恨みつらみも超えて、いのちあるものを普遍的につらぬく動物的な一体感に突き動かされている。これは、抽象的な存在にすぎぬことをやめて、実現された博愛の理念である。これがその人の生を完全に浸し、その人となりそのものとして血肉化されていたので、本人がまったく意識しなくても、自由に、とらわれなくやることなすことのすべてに、愛が自然にあふれている、そんな状態にあったからである。

この状態とくらべると、他の人たちはまだまだ、ケチ臭かったり道学者ぶっていたり、悲壮なヒロイズムに酔いしれていたったりといった色あせた旧い世界のロジックの中に囚われている。この旧い世界の外的・内的なさまざまな制度への適応や承認、あるいはそこに合致していることからくる自己満足のた

めに人助けする。それはまだ血肉化されていない外的な規範に従っているにすぎないし、先述した手段と理想を乖離させた社会活動家のように、目的自身をまだ体現するにいたっていない。その結果、人助けを、他者の承認を求めるといった無害な形にとどまるにせよ、一種の権力獲得への手段にしている。

5番目の人が実現された理念の中に生きていて、理念と完全に一体化している様子は、「自分が見たい世界に自分自身がなりなさい」と言ったガンジーの言葉を思い出させる。けだし内発的権力とは、このように自分がすでに「なった」状態、存在全体で体現している状態を、自然に、自由にあふれ出させ、それを行動に、創造になり、新しい世界をつくりだしていく力のことにほかならない。

先ほど、内発的権力と、アートの創造力が同じものであることを指摘した。しかしここでは、どうすればこの内発的権力＝アートの創造力を湧かすことができるのかについて、考えるまでにはいたらなかった。それが、ここで、理念と自分の存在を、緊密に合一させることとして明らかになったように思う。そのとき理念は、あらゆる言語化、理屈づけも不要になり、私の存在全体が体現するものとして、私が自由におこなうあらゆる行動のなかに、自ずと溢れ出る。

言語化できるモラルの不在が、逆に、生きられた、真正のモラルがそこにあるという証になる。シラーの思想を引き継ぎながら、このパラドックスについてこだわり続けた人にミヒャエル・エンデがいる。

ドイツの作家、ミヒャエル・エンデは、戦後ドイツの、あらゆるアーティストがポリティカル・コレクトネスを要請される状況の下にあって、政治意識に欠けるとの批判をされていた。が、それに対する彼の応答が、アートの持つこの実現の力を押さえているように見える。すなわち彼は、「ベトナム反戦のあまたのプラカードよりも、ゴッホの『ひまわり』の絵の方が平和への意識変革としては強力だったんじゃないか」と言ったのだ。³²なぜならプラカードは平和を唱えることしかできないが、ゴッホの『ひまわり』は平和を実現するからである。つまり、「ベトナム戦争反対のあまたのプラカード」という言葉で彼は、手段と目的が分裂した社会運動一般のことを言っているととれる。すなわちそれはよろこびの政治学のように目的そのものをそこで実現することはない。プラカードにどんなにすばらしいお題目が書かれていても、それは説得するためであり、平和の体験を即、その場で共有するためではない。だからそこには、どうしても強制や一面性、メッセージの伝達・受容プロセスの画一化がつきまとうし、またこの画一化から当然帰結されることとして、抽象的な形でしか、これを伝えることしかできない、ということになる。その結果、お題目を声高に唱えながら、それを唱える本人さえ、実感が全然伴わないこともあり得る。ひどい場合には、平和のためのアクションをアグレッシヴにやるといった、メッセージとスタイルの分裂も生まれがちで、目標とは正反対のものに転じるおそれもあるだろう。

これに対してゴッホの『ひまわり』の絵には平和についての示唆など直接にはまったくない。しかし「一枚の絵をきっかけにして、みんなの意識が変

▶32 ミヒャエル・エンデ、ヨーゼフ・ボイス『芸術と政治をめぐる会話』岩波書店、1992年、187ページ。

化し始めることがあるんだ。ヴァン・ゴッホは新しいものの見方をもたしらしてくれた。新しい美の概念を与えてくれた。そしてその結果、新しい中身とかたちをそなえた意識をもたしらしてくれた」。新しい意識は、新しいものなので、まだ名づけようがない。ましてや「戦争反対!」のような、使い古され紋切り型になった言葉であらわせない。しかし名づけられないその体験は、それでも生命の横溢とともに見る人にしっかり伝わり、これに伝染、感応した人たちは、別の世界、別のリアリティの中に生きはじめる。それはその人の生活全体を再編成するだろう。そしてそれは「間接的に、新しいかたちの政治、新しいかたちの共生につながり、何が人間的で何が非人間的かということについての新しい区別につながる」。気づいてみると、戦争は教科書と博物館の中にしか見当たらない、というようなことも起こるかもしれない。すでに奴隷制度がそうであるように。

しかしこの話のポイントは、この伝染、感応は、言語化されるどんな特定のメッセージによる強制も含んでいないこと。ゴッホの『ひまわり』には、「戦争反対」や「平和実現」といった言葉は一言も書かれていない。もしそこにそうしたものが書いてあって、それが伝わるだけならば、「新しい内容と形をそなえた意識」は決して生まれないだろう。

ゴッホの『ひまわり』において伝わるものは、ただただ、戦争のようなエゴの張り合い、その背後にある恐怖感、欠乏感を追い払ってしまうような生命の充溢、新しい世界をつくる内発的権力の源泉を沸き立たせる力で、それは直接言葉に置き換えようがない。しかしだからこそ、そこに人の数だけさまざまな解釈や展開をくりひろげることができる自由な空間が生まれる。つまりその「新しい内容と形をそなえた意識」は、人々に伝わっていく中で、さらに新しい内容と形をめざしていく。そうした実践と創造の積み重ねから、ついに戦争について発想すらしないような平和的な心の状態に浸された新しい文化が姿を現してくるかもしれない。そこに息づくのはしかし、単にお題目だけの抽象的に理解された平和ではなく、生きられ、実現された平和である。

つまりエンデが、ゴッホの『ひまわり』のような一見ノンボリのアートがすでに政治的機能を持っているといい、「文化と政治のあいだをつなぐ一つの領域があるんだ」というとき、彼がそこに見ているのは、よろこびの政治学なのである。

たとえそれがゴッホの『ひまわり』を鑑賞するといった一見古典的、伝統的なかたちをとっていても、もしそこに真性の美的状態、暖かきの伝播があるならば、受け手は、同時にその体験を自力で展開する作り手にもなる。これは、アートによる新たな意識を創造する力によって内側から社会を変えるときには、全員が作り手、「リーダー」であり「する」力を発揮する人でなければならないという、先ほど設定した本論の外枠とも一致する。指導者なしに、個人として創造する自信を与え、自立をうながすことが、ここで美的体験の受け手を作り手、つまり「する」人に仕立てる力として、展開をみる。

つまり、新しい意識の創造によって、社会を内側から変える作品に必要なのは、政治的なメッセージというより、幾様にも解釈される無規定さ、それにシンプルで力強い表現なのである。暖かな美的状態をこのような無規定で

オープン、各人の生活に流れこみ、ほかの生活要素と区別できぬほど一体化し溶けこむ力ととらえるとき、それが同時に、社会に浸透し、少しずつ変革をなしとげる様子もみえてくる。というのも、美的状態の無規定さにより新たにされた意識は、無規定なものの特有の全体性のおかげで、その人の存在全体を組み替え、ライフスタイルや行動様式をも根底から変化させずにはいられないからである。ここで獲得した新たな意識をかたちにすべく、閉塞的な社会状況を突破する勇気あるアクションが生まれ、その様子が、それ自体また新たな美的状態として他者をインスパイアし、同様の行動にかりたてる連鎖反応をおこすかもしれない。それにつれ同種の「新たな意識」に目覚めた人たちが一人一人と増え、影響し合い、協働し合う中で、エンデも言うように、「新しいかたちの共生とは何か」や、「何が人間的で非人間的か」などについて、新たな合意事項もおのずと形成され、常識の線が少しずつずれていき、たとえば、いつのまにか「戦争」が博物館と歴史の教科書の中にしか存在しなくなるということさえ可能かもしれない。すでに奴隷制度がそうであるように。

先に、ディガーズのペーター・コヨーテの言葉を引きながら、代表民主主義の政治や特定のリーダーによって引つ張られた社会変革がぱっとしなくなった反面で、表現や実践で共有の文化をつくり、育てながら、草の根から広がっていく集合的な社会の変化は、60年代以降、めまぐるしかったことを指摘した。ここで、それがなぜだったかがもう一歩踏みこんだかたちで明らかになる。表現や実践を積み重ねるとは、メッセージを絶えず、具体的な体験可能なものとして、実現していくことだ。メッセージを実現するとき、私たちは、単なる抽象的な情報の伝達以上のことをする。それは、実践力を伝染させる。たとえば、勇気ある実践の感動的な物語を聞いて、鼓舞し、高揚させる感覚に襲われる。すると気づいたときには、自分も同様の実践を始めている、といった具合に。かくして良妻賢母の教育をうけたはずの数多の女性も、互いの姿や物語に接することでインスパイアし合いながら、自己実現への衝動に従った、前例のない生き方の冒険に乗り出したのだった。

単なる抽象的なメッセージには、社会変化にまでいたるこれほどの連鎖反応を引き起こす力はない。そのためには、これに触れ、感応した人の生き方全体を再編成するような、新しい意識、心の状態が感染していく必要があるからだ。

ここで私が、一人一人の実践をささえる情熱とインスピレーションの源、実践的文化のプールと呼んだものこそ、よろこびの政治学でいえば、運動そのものの中に実現されたよろこびにあたる。それはエンデの言葉をつかえば、真正のアートがつくる「新しい意識の内容とかたち」に必然的にともなうものである。

21 祝祭・仮装・メタモルフォーゼ

話を戻そう。内発的権力は、運動中に一定の雰囲気染め上げられた空間

をつくと述べた。それはとりあえずは一時的で仮設的なものにとどまっても、ナウトピアの実体そのものとして、参加者のものの見方を不可逆的に変え、街の中にパラレルワールドのように建設中のナウトピアを、見る人にはみえる形でオーバーラップさせながらつくっていく。

その空間はクリティカルマスでは、「よるこびの政治学」が依拠するよるこびの空間として意識され、そこでは社会運動に暴力と強制をもちこむ手段と目的の乖離が克服されるのみならず、新たな政治的モラルが、参加者自身の存在、行動と不可分のものとして生きられ、その都度新たに生み出されていく。シラーが美的状態と呼んだこの状態が、内発的権力の創造の核心にあるということができるだろう。

ユートピアへの手段であり、道である社会運動が、ユートピアそのものを体現する「よるこびの政治学」の社会運動へと変容する過程には、運動の祝祭化がある。昨今の新しい社会運動で共通して世界的にみられる傾向だが、サンフランシスコのナウトピアン運動はひととき華やかである。

先ほど、ナウトピアンたちが、存在のエンパワメントを所有によって安易に置き換えるのを拒絶することで、コーオペレーションの入りこむ隙を与えないように自衛していると述べた。クリティカルマスで、自転車の他には何もいない！というピラが飛び交ったことなどがその典型例だが、これはしかし、運動を貧乏臭く地味にやることを、意味しない。彼らは自分の自転車をDIYでどんどん改造し、サイクリングをカーニバルに仕立てることに熱心である。自転車にカウベルをつなげて、時々たたいたり、ペダル自家発電で音を出すサウンドスピーカーを内在させた音を出す手作り自転車に乗っていたりと、この自転車の群れには音楽がいつも伴っている。あるいは、ペダルを漕ぐにつれて、そのエネルギーでシャボン玉が自動的に作られて、あたり一面を覆いつくすような機械を据え付けた自転車に乗っている女性もいた。彼女が先頭で走ると、サイクリストたちはシャボン玉の中を走るようになるのだが、それは本当に、別世界にいるような気分をもちたててくれた。毎年恒例のハローウィーン時のクリティカル・マスや、2012年の20周年記念クリティカル・マスのようなお祝いの場にはとくに、仮装やDIY改造バイクがごったがえすことになる。ドラゴンやメリーゴーランドや鹿、はてまたゴールデンゲートブリッジの形のバイクをつくって、それにまたがって現れる人がいるし、自身もさまざまな動物の着ぐるみや資本家や政治家のいでたちをまとった人もいる。先述の、ヌードのサイクリストも一種の仮装ととらえることもできるだろう。仮装はうまくいくこともあれば、ちょっと勘弁して…と言いたくなるような悪趣味のものもあるが、少なくとも、自力で価値を創造するところみ、という点で評価できる。ブランド品のクールな商品を身につけても、できあいの価値に寄生するしかできないわけで、それより失敗した仮装のほうが、その人のクリエイティビティ、すなわち自力で新しい世界をつくる力を発揮させているといえる。とはいえ、仮装に必要な衣装や小道具まですでに商品化され、しかも仮装というものの持つ性質からスペクタクルをきわめた商品となっている今、このあたりの線引きは簡単にできるものではないが。

そんな風に、どこまで商品を使っているか手作りかはともあれ、少なくとも、動機という点でみれば、ナウトピアンがカーニバレスクな雰囲気を好んでつくるのは、自己誇示するためというより、雰囲気を盛り上げ、この場に自己流の解釈をつけたし、皆で楽しむとともに問いかけるため。つまり、コミュニケーションな動機が優勢である。

しかし何よりまして重要なのは、これらが、内発的権力が、新しい世界をつくる力として最初にあらわれるかたちである、先ほどの美的状態に発していることだろう。祝祭性を盛り上げる仮装や、さまざまな演出や音楽によって、参加者たちは、自分の生きる理念を全身で体現し、空間表現にもたらそうとしているのである。

仮装は、自分の本来の姿を現そうとする希求と結びつくこともある。美的状態とならんで、内発的権力のもう一つの特徴である、自己探求、自己実現的な動機も、そこにからんでくる。この傾向はとくに、セクシュアルマイノリティの人たちのドラッグdrag（男性が女性、女性が男性の装いをする）に顕著に見られる。ゲイの多くは、自分がゲイであることを思い切って公表するカミングアウトを新しい人間に生まれ変わる一種のイニシエーションとして体験するが、それはとくにカストロのゲイにとっては、自分の仮装を完成させるというかたちをとる。すなわち、自分の女装時の名前（ドラッグネーム）をつけ、自分の仮装にふさわしいカツラを決めながら、彼らはこれまで隠れていた、ゲイといありのままの自分を「尊厳」あるものとして肯定し、祝福しはじめるのである。サンフランシスコ市立大学の教授であり、ゲイとしての自らのアイデンティティを歌い上げる詩人でもあるアーロン・シャリンは次のように述べている。

▶33 アーロン・シャリンは1947年生まれである。

少なくとも私の世代、³³あらゆるゲイの男性は自分のドラッグネームを探していたが、それは秘められたアイデンティティの扉を開けるための（ヒステリックな）鍵のようなものだった。その名前は、あなたの公の顔をアレンジし直すカツラのようなもの、つまりは言葉のカツラだったのだ！ それは言葉による個性の喪失 impersonalization だったが、同時に、もちろんそれ以上に、個性の獲得 personalization だった。かくれた真の自己が、急き立てるように、スペクトルのあらゆる層で現れ出ようとしていた。私は自分自身を名づけることで、異彩を放つ自己selfになる（「私は自分自身を祝福することで、自分自身になる」——ホイットマン）。語彙に現れたゲイの歴史を見ると、こうした出現の描写に徹底して多くのエネルギーが割かれていることがわかる。クロセットから出る come out of the closet 真の名前であなたをもう一度名づけ直す rename yourself with your real name 正しいカツラを見つける find the right wig あなたの本性を手に入れて、目の覚めるような色彩で現れる own your true nature and emerge in living color など。『われらが花の淑女』の中でジャネットが言うように、「私たち自身を装うドラッグで現れるのは、何も特別なことではないのだ」。³⁴

▶34 Aaron Shurin: Full Spectrum, In: Rebecca Solnit (edit.): Infinite City -- A San Francisco Atlas, University of California Press, 2010, p. 48.

22 | メタモルフォーゼとしての革命

このような一人一人の自己実現的なメタモルフォーゼの散発が、そのよこびと祝福を空間的に共有するなかで、ナウトピアが徐々に姿をあらわしていく。それは一種の革命の過程をなすが、それは、まずは権力（外在的権力）をとって、世界を変える類の革命ではない。内発的権力から生きていくことを決意した人が、真の自分を見だし、受け入れ、それによって生まれ変わり、新しい世界をつくっていく。突出したヒーローやドラマチックな事件として顕在化しにくい、その代わり、内発的権力から生きる人がいるところならば、いつでもどこでもこの革命は進行中だということができる。

しかしその革命というのは、具体的にどんなものになるのだろうか？

いわゆる「革命」らしくはとても見えないだろう、というのは予想がつく。というのも、内発的権力のもう一つの特徴は、そこから世界が生まれ、力強くその存在を主張し始めるまで、自分が権力であることを証明できないことで、そのはじまりは、しばしば、もともと権力からほど遠いもの、ほとんどその逆のものに見えるからだ。というのも新しい価値を発見したりつくっていく人は、通常、既存の価値システムの中で成功する気がもったもない人、つまりは権力欲などからほど遠い、ただ、我が道を行く体の、風変わりな人々だからである。

参考になりそうなイメージが、ジョン・ホロウェイの『革命——資本主義に亀裂を入れる』の冒頭近くにある。この本は、一見、反資本主義理論の書だが、ホロウェイ自身、この本を実は世界中に散らばる無数の人々についての物語だと定義する。以下の箇所は、これがどんな人たちの物語なのかを説明しているところで、以下は途中中略しているが、実際には2ページ以上に及ぶリストになる。

この本は、みずからの怒りとよりよい社会への夢を、自作をつうじて表現しているロンドンの作曲家の物語である。これは、自然破壊に対して戦うためにガーデンをつくっている Cholera の庭師の物語である。夕方に自分の分有する菜園に赴き、やっと自分にとって有意義で楽しい活動に精を入れるバーミンガムの自動車工、自治のための自律空間を作り出し、攻撃をしかけてくる準軍備組織を相手に日々防衛しているチアバスのオヴェンティックの先住民の農民たち、大学の枠組みの外側に、批判的思考を広めるためのセミナーを創ったアテネの大学教員（中略）、今日は仕事に行かないで、あれこれ読みたい本を持って公園に行くことに決めた東京の女の子、人間と自然の関係を根本的に変えるために、コンポスト・トイレづくりに熱中してるフランスの若い男性、子供と十分な時間を過ごすために、仕事をやめてしまった電話技術者。なす事すべてにおいて、愛と相互扶助にもとづく世界をつくる情熱を表現するエジンバラの女性の物語である。

これらはホロウェイの知人だったり、話に聞いただけの人だったり、あるいは彼が想像でつくりあげた人物だそう。実在するか否かはともあれ、いずれにしろ、こんな風に、世界のさまざまな場所で、さまざまな人たちが、資本主義の歯車としてこれに加担することをやめて、自分と周りの人たちのよこび、生の充溢のために自律的な行動をはじめている、というのは事実だと思う。似たような人たちに私もとくにサンフランシスコでのフィールドワーク中、たくさん会った。それはたとえば、近所の空き地に植物を植えて緑地帯をコツコツ増やしているゲリラガーデナー、投機のために土地の値上がりをもって放置されている都心の空き屋を改造して、コミュニティを再建するための拠点になるスペースをつくるスクワッターだったりする。あるいは、大勢の人たちと一緒にいっせいにサイクリングすることで、自転車の占拠領域を道路に広げようとするサイクリストの群れだったり、パーキングスペースを借りながら、そこに車を止めずにパーク、公園をつくって、緑とコミュニティの場所として解放する人たちだったり、はてまた都市の繁華街の雑踏のただ中で、白装束に身をかためて、ただ立っては、自己省察的な思考をうながそうとするパフォーマンスアーティストだったりする。しかし彼らの存在のどこが、「革命的」というのだろうか？

それに答える前に、ホロウェイの、また私たちの論の文脈でなぜ資本主義が問題化されるかについて、まとめてみよう。

一番の理由は、私たちが内在的権力で自分の人生や周囲の世界をつくっていく生き方の多くを、「そんなことしていて食っていけるか」との合い言葉のもとと思いとどまらせ、未熟な青臭い生き方として一笑にふしてしまうこと。利潤の追求のみがあらゆることの決定的な動因となる世界で、お金にならない行為はいつもそんな風に常に脇へおしやられてしまう。勇気ある人がたまにそれに抵抗して、それだけで「食っていこう」などとしようものなら、それこそ生存危機にさらされてしまう。

そんな風にして、資本主義は氷河期の厚い氷のように地上を覆いつくし、内在的権力による創造の余地を与えない。先程述べたような生命力の過剰としての、メタモルフォーゼとしての革命が起こるどころか、そもそもあらゆる生命の兆しが阻まれているようにさえ見える。

それでも、ホロウェイの描いたこのリストにあるような、ありふれた人たちのささやかな自律的な行為が、日々、こつこつ、地下レジスタンス行為のように続けられている。もちろん、彼らのほとんどは、こうした活動で「食って」いるわけではない。普段はそれこそ「お金のため」に、喜びも生き甲斐も感じられない賃金労働に従事していることは十分考えられる。それでもこうした地下レジスタンス的な活動が、彼らに尊厳を与え、内発的権力のはけ口になり、少しずつその勢力範囲を拡大する可能性はある。これが長じて、独立採算的な自律したビジネスに結実することだって、あるかもしれない。

資本主義の厚い氷に少しずつ亀裂を走らせるのは、これらの行為にほかならない。その頻度と強度が増すにつれ、ある日突然、亀裂がおしがつながって、氷全体が瓦解する日が来るかもしれない…というのがホロウェイの抱く「資

本主義に亀裂を入れる」ことによって起こる革命のヴィジョンである。だから、一つ一つはささやかで孤立しているようにみえても、こつこつ実践をつづける価値がある。

非常に鮮烈で、明快なイメージといえるだろう。私も基本的に同意する。

ただ、ホロウェイと視点が少し違う。先ほどの自律した行動を日常のただ中で行う人々のリストを読んで私が思い浮かべたのは、彼らの行為を通して広がっていく資本主義の厚い氷に張った亀裂の方ではなく、それらの行為が、日々つくりあげていく新しい世界の方である。この新しい世界が氷の下から姿を現すことで、氷が碎けるのだが、氷が碎けること自体は、私にとって、目的そのものというよりも、副次的なことのように見える。

とりわけ魅了されたのは、これらの行為が本当に多様で、世界中に散らばっていて、互いに互いのことを知らないにもかかわらず、同じ心でつながっていること。実際この一節は、難しい哲学書の冒頭部分にありながら、詩的な美しさを讀んでいるといってもいいほどで、心をうつものがある。

資本主義がこれだけくまなく支配し、ラットレースに乗って生存競争に憂き身をささげながら搾取され、他の時間はひたすら消費に明け暮れる人生のチョイスしかないように見える今日、そこから一時なりともおりて、彼らのように自律した時間、空間を自分の周りにつくりはじめることは、勇気がいることだ。彼ら一人一人が強靱な個の意識に支えられた反逆者であるのはもちろんで、一束にしてくることははばかれる。それでも大きな視点から見ると、個を超えた、しずかな、しかし力強い、地球上をあまねく広がるうねりの一部をなして、彼らは互いにつながっているようにも見える。プラハの春の民主化運動がソ連軍に弾圧された時に、劇作家で社会運動家のヴァーツラフ・ハヴェル（その後チェコの大統領になる）は、「花を踏みにじることはいくらでもできるが、春が来るのは止められない」と言ったが、ここでハヴェルが「春」とよんだような、人々の内在的権力の目覚めによる、生命力の圧倒的な萌えひろがりが見てとれるように思うのだ。それが一つの集合体をなして、おしどめがたい雪崩のように不可逆的に、地球にあまねく広がっていくまで、もう一押しといったところかもしれない。

ホロウェイ自身、これらの人々を「拒絶および別のものの創造」を分かち合っており、「親近性の線」でつながっていると述べている。が、私はそれをもう一歩すすめて、その線でつながれた人たちが、自分の内在的権力に目覚め、新しい自律した世界をつくっていく、その世界が少しずつ成長しふくらんでいくさま、それが総体としてみると、まるで一つの身体をなすように見えるさまに注目したいのだ。

散在する点のようにみえる人々を一つにつなぐファクター。それは、ナウトピアンに話を限定するならば、よろこびの存在である。

クリティカル・マスで定式化された「よろこびの政治学」の射程は広い。これまで、理屈抜きのもろこびの増大の追求こそが、社会運動を持続させ、拡大する鍵を担うというのだから「理屈」だらけのイデオロギーの闘争の場に陥りがちの社会運動一般の見方を転覆させる勢力を秘めた概念であると論

▶35 2012年5月2日、サンフランシスコ、クリス・カールソン邸でなされた彼へのインタビューによる。

▶36 ジョン・ホロウェイ『権力をとらずに世界を変える』同時代社、2009年、63ページ。

じてきた。しかしその他にも、よろこびを羅針盤にして、自分を対象化するさまざまな外圧的な「させる力」を相対化する批判的な契機や、人と人をつなぎ協働にもたらす共同体づくりといった射程も、それははらんでいる。

実際、クリス・カールソンにインタビューを重ねるにつれ明らかになったのは³⁵、クリティカル・マスを楽しくやることのうちに、単なる人気取りに終わらない、社会批判の力を見ていることである。

曰く、現在社会の構成要素のなかでも、私たちを拘束し、抑圧するその元凶といえるものは、ことごとくよろこびの不在と結びついている。たとえば、自分が本当にやりたい夢、実現したい理想を曲げて、ただお金のためだけに不本意な仕事に始終する人生は楽しくない。つまりホロウェイが資本主義の問題として指摘した、利潤原理の下に人々を対象化し、強制する「させる力」に屈している限り、そこによろこびはない。³⁶

あるいは、自分は自分のしたいことをのびのび行い、内発的な「する力」を発揮していても、そのために他の人たちを何らかの形で対象化したり強制して、他の人にとってはそれが「させる力」として、外圧的な権力として機能する中央集権的な構造がある場合も、グループ全体としてみたとき、そこによろこびはない。

皆が自発的に振る舞っていて、にもかかわらずそこに調和と協働があるとき、それぞれが他者の「する力」を引き出し、生かし、鼓舞奨励しあうとき、その場には翳りのないよろこびが満ちる。

クリティカル・マスも「ゼロクラシー」や「組織化された偶然」といったヒエラルヒー除去、水平化への不断の努力あってこそ、真に祝祭的でよろこばしい場であり続けることができた。

「させる力」をが少しでもそこにあるならば、私たちは絶対に楽しめない以上、みんなが活動を心底楽しんでいるとき、そこには「させる力」、すなわち外在的権力により人を道具として対象化する暴力や強制がないという保証になる。つまりよろこびの有無は、物理的・精神的両面の暴力がそこに少しでも介在していないかどうかの検知器の役割を果たす。よろこびに満たされた運動は、すべての人が自分の「する力」を発揮できる水平的で直接参加型民主主義的な状況がそこにあること、新しい世界をつくる内発的権力へと育っていく自発的な力が満ちていることをもほのめかす。

よろこびを羅針盤にした自律的な生の回復は、社会運動に参加している瞬間に限られた話ではない。ものの見方や世界観を不可逆的に一変させる体験の常として、参加者はそれぞれ、日常に戻ったあと、その影響のもとに、自分の生活を再形成しはじめる。たとえばクリティカル・マスの参加者の多くは情報産業、サービス業に携わる都市生活者で、普段はお金のためにそれ自体に意義もたのしみも感じられない仕事をしているのが大半である。しかし、クリティカル・マスの道路を協働で乗っ取ってしまうというアウトロー的な実践のもとに解放感、その「させる力」に普段打ちのめされてきたそのような人々に自律的に生きるよろこびの味をしめさせるとともに、やればできるのだという自信を与え、みずから「する力」の主体となる道を歩みだすための変換器の役割を果たす。そこで私たちは自分たちに貼られたレッテルやカテゴリー

分け、搾取や抑圧の〈対象〉にしようとする諸力を一時なりともはねのけて、自分で自分の人生を定義し、つくっていく、行為の〈主体〉となることを学ぶ。

よろこびの、この主体性の砦の上に立ち続けることにより、私たちは疲れをしらず、新しい世界をつくるという創造的な作業に捲まず撓まず従事することもできるようになる。つまり、ナウトピアの運動は、参加者それぞれが、自発的な力を回復し、自分の日々の生活から、自分を対象化し、疎外する要素をはねのけていく、セラピーの場、教育の場としても機能しているのである。

真のよろこびは、このようにして、内発的権力のありかを示す。よろこびから主体的に新しい世界を作っていく人たちの数が増えるにつれ、お金のためだけの理由から、「させる力」の下での奴隷的な人生に身を売り渡す人たちが、一人二人と姿を消し始める。彼らによって支えられてきた古い社会が転覆するときがいつの日か来るかもしれない。

私は実際何人かそういう人たちにも出会ってきた。たとえば、やはりクリティカル・マスの創始メンバーの一人、マイケル・クレットは、高給取りだけれどとにかく忙しく、自分のイニシアティブでやれることなどほとんどないITエンジニアの奴隷仕事をやめて、自転車の組み立て方、修理の仕方を教える、DIY自転車ショップ、Bike Hutの共同経営者となり、同じサンフランシスコの街にパラレルワールドとして広がっている旧い世界から新しい世界、ナウトピアの方に恒常的に移住した。³⁷ナウトピアの地図は、このようにして、一つずつ書き加えられ、少しずつ充実してきている。

多くの社会運動は、既存のシステムを批判するところで終わる。が、ナウトピアの運動ではこのように、運動中に味をしめた自信と解放感にうながされて、思い切って脱サラ。自分が本当に情熱を傾けれることに、人生の舵とりをしはじめるマイケルのような人がたえない。これも、よろこびを大切にしているからではないだろうか。よろこびさえ育てていけば、オルタナティブを創造するための主体的な「する力」、内発的権力も湧いてくる。ナウトピアの運動が、旧い世界から一時的に脱出するだけの逃避に終わらず、脱出先の新しい世界を創造し、前論文で述べたように、少しずつであれナウトピアという新しい世界を実際にパラレルワールドとしてつくっていけるほど持続的に成長してきている。その背景には、実践をかき立てるこのよろこびを大切にしていることがあげられるように思う。

だからこそ、クリス・カールソンは、占拠運動の際にも、失業問題を唱える人たちのただ中で、「完全雇用でなく完全な楽しみを！」“Not Full Employment but Full Enjoyment!”というプラカードを持って街頭にたったり、「完全雇用対策委員会」“Comittee for Full Employment”のパロディである「完全お楽しみ対策委員会」“Comittee for Full Enjoyment”というグループを結成し、1999年のシカゴのWTOの闘いのときに、ドラムをひたすらたたき続けたのだった。³⁸

資本の外在的権力の「させる力」の下に隷属化させる雇用対策にかまけるよりは、よろこびから新しい世界をつくっていこうというのである。うまくいけば、そこから新しい仕事も生まれる可能性がある。実際そのようにして、今この瞬間にもナウトピアは少しずつ建設されている。

よろこびの政治学がもたらすこうした自律性が、集会の合意決定の場にあ

▶37 Michel Klettへのインタビューによる、2012年3月14日、Bike Hutにて。

▶38 2012年5月2日、サンフランシスコ、クリス・カールソン邸でなされた彼へのインタビューによる。

▶ 39 サラ・ヴァン・ゲルダー＋Yes! Magazine編集部『99%の叛乱—ウォール街占拠運動のとらえ方』、バジリコ株式会社、2012年、36-37ページ参照。

らわれるとどうなるだろう？『ウォールストリートを占拠せよ』では、全体集会が繰り返しひらかれたが、試行錯誤するそのプロセスの中で、エジプトやスペインやギリシャの抵抗運動の経験者に助けられながら、彼らが学んでいったのは、一人の演説者が消極的な群衆にマイクで呼びかける体の従来の集会は勢力拡大のために役立たないことだった。また一つの問題に焦点を絞り、結論を導こうとする話し合いも、運動をブレイクスルーに導く力は持ち得ないことだった。そんな過程をみながらやきもきしたギリシャ人アーティストのジョージア・サグリは集会をいわば「ハイジャック」して、彼女がギリシャで経験済みのアズットとパワフルな集会をオーガナイズする。その主旨はレッテルや所属など一切問わず、あらゆる人が、急を要するあらゆる問題について、発言する機会を持つことだった。とにかく皆に言いたいことを言わせる。集会のテーマも発言者も、コントロールしないことが肝心だ。そうして生まれた全体集会はもちろん、雑多な人たちが、さまざまな問題についてとにかくしゃべり続ける、一見、カオス的なものになる。³⁹結論も、少なくともその場では出る気配はない。しかし自分の大切な問題を、多くの人の前で話す高揚感と、それを皆に熱心に、また同調して聞いてもらえたという〈よろこび〉の体験、とくにマイク代わりに皆が自分の言葉を反復してくれる「ピープルズ・マイク」があたえる連帯感は圧倒的で、エンパワー効果はてきめんだ。かくしていったんこうした参加の味をしめた人は尻に火がついたように、自らイニシアティブをとって動き出すようになるという。

肝心なのは動員人数でもなければ、有名人を話者として連れてくることでもない。一人でも多くの参加者が話者となり、主体となり、リーダーとして動き出すよう動機づけることなのである。

ホロウェイのいう資本主義の分厚い氷に亀裂を入れるのは、無数の人たちのこのような自発的で、自律的な行動なのである。これが育ったとき、氷は自ずと割れていく。したがって旧い世界の殻が、自ずと割れるこの様子をもうすこしはっきりさせるために、ここで私がホロウェイの氷を割るイメージに代わって呈示したいのは、蛹が割れて、中から成長した蝶の身体が出てくるイメージである。資本主義は古い蛹の身体として私たちを拘束している。しかし私たちは、この蛹の殻を、ことさら外から叩く必要はない。中の身体が十分成長して、殻から自分を分離、自律したとき、殻は放っておいても自然に割れていくからである。

同じように、革命を内発的な成長力によるメタモルフォーゼの過程としてみた人にヨーゼフ・ボイスがいる。私たちが革命を起こすのではなく、「私たち自身が革命なのだ」という彼の言葉はすでに引いたが、別のところで彼は、「革命というとこれまで流血に彩られてきました。しかし本当の革命とは、バラの木に花が咲くことなのです」ともいつている。これまでの革命が血なまぐさかったのは、外在的権力攻防戦にすぎなかったから。ジョン・ホロウェイの言葉をかりれば、過去の革命のほとんどは、まず権力をとって、しかる後に世界を変えようとした。しかし生き物がメタモルフォーゼをとげ、花を咲かせるように、内なる生命力の過剰による内圧から、旧い世界の殻をやぶって、新たな世界を自ら体現し、つくっていくことができる。となれば、私た

ちがやるべきなのは、古い世界の殻を壊すことよりも、中の身体を育てることに専念することだということが、これではつきりする。

それによって、うっかり中の新しいからだはまだ十分育っていないのに蛹の殻を壊すことで、蝶を殺してしまうリスクを避けることができる。暴力をとまなう革命はその点、しばしば、時期尚早になされすぎた。圧政を倒すことはできても、新しい世界をつくる力がまだ民衆の間でそだっていない場合が多かった。新しい世界について、そのヴィジョンをともにできるのは、ほんの一握りの人だけ、大多数の人たちは蛹のなかでまだまどろむ古い意識の中にいて、古い世界に依存しているこのような場合、無理矢理古い社会の殻に亀裂を入れても、新しい世界は流産の憂き目にあう。そして結局のところ、古い世界が違った名前と、外見だけの新しさのもとに繰り返されるのが関の山となる。時期尚早に社会体制をかえる前に、その中身をなす人々の意識を変えること。後に見るように、フリードリヒ・シラーがフランス革命後の恐怖政治を見て失望し、アートによる人間の陶冶「美的教育」のプログラムを考えたのは、これとまったく同じ理由からだった。

実際、蝶がしっかり育つまで、私たちは実際、古い世界の蛹の殻の下で守られる必要があるのではないだろうか？ ホロウェイがリストアップした人々も、その多くは、生計を立てるために、資本主義の古い世界の中でせつせと働いていると考えられる。またパーキングスペースをパークに作りかえる運動のように、新しい世界をつくるにも、その材料は古い世界から調達することも多々あって、それがナウトピアの運動の特徴の一つをなしていることは、先程述べた通りである。そんな風にナウトピアンは、日々、資本主義の蛹の殻に守られながら、せつせと新しい身体をつくって、そこから飛び立つ独立の日に備えているのである。

実際、古い世界の殻の中に守られながらも、少しずつそこから分離、独立していくことは可能である。たとえば、新たな身体をつくる人たち同士、協働を高め、たとえば自律した経済圏などをつくっていければ、その過程も加速化されるはずだ。

古い殻への癒着、依存状態から分離、独立へのこの気の長い移行を表す点でも、蛹から蝶へのこのメタモルフォーゼの比喻は、氷を割る比喻よりも、脱資本主義のこころみを説明するのに適している。

23 よろこびの政治学の非暴力的帰結

話が少し抽象的になってきたので、具体例を挙げてみよう。ふたたび、クリティカル・マス我的话である。2012年に20周年を迎えたクリティカル・マスの実践からは、「組織化された偶然」だとか、「ゼロクラシー」など、独自の戦略的なアイデアが生まれたが、その中でも、この文脈で示唆的、かつ特徴的なものに「肯定的放棄」assertive desertionという考え方がある。

肯定的放棄とは何か。クリティカル・マスの最中、サイクリストが普段、車に対して溜めこんできたストレスや怒りが爆発することがある。自転車と車の勢力関係が逆転したこの瞬間こそ、報復の好機というわけである。具体的には、自転車に取り囲まれて身動きできなくなったドライバーに言葉などでハラスメントをしたり、攻撃しようとする行動に出るのだが、これが目立ってきたときのこと、カッシュという自転車乗りが「個人的には僕だって、誰かに攻撃されれば報復する。でも僕がここに来ているみんなと一緒にいるのは、お祝いするためだ!」と叫んだのがきっかけで、この報復問題についての議論がもりあがった。次のクリティカル・マスでは、創始者の一人、クリス・カールソンが次のような内容のビラを配っている。「無生物が階級闘争するなんて聞いたことがないね。クリティカル・マスで一番大切なのは、思うに、とにかく楽しくて、祝祭的にもりあがった場所をつくること、その楽しみに伝染性があって、これまで自転車にほとんど乗って来なかった人も、あらがいごとく参加したくなるような、そんな場をつくることにあると思ってる」。勝利は、祝祭性、楽しさにつられて人が集まり、集まった人も続ける気になり、大きな勢力になることで得られるわけで、車に象徴される既存勢力と戦うことで得られるわけではない。暴力沙汰は、祝祭的な雰囲気や台無しにするだけでなく、人を遠ざけてしまう。対決的な緊張が生まれたら、そこから退くこと。怖いからというより、もっと魅力的で祝祭的な場をつくるために時間を無駄にしたくないから。真に祝祭的な場ができたとき、今は敵のサイドにいる人たちも、こちら側と一緒に楽しむ日がくる。これが自分たちの目指す勝利なのだから、そのために闘いはすすんで放棄しようというのが、ようするにこの「肯定的放棄」である。

肯定的放棄は、新しい世界をその場でつくり、事例呈示することをめざす社会運動が、非暴力主義を必然的に要請することを示す、重要な概念だと思う。先ほど、暴力に訴えることそのものが、旧い世界の残滓であるとすれば、暴力沙汰に巻きこまれることで、新しい世界は蛹から出て飛び立つどころか、蛹の殻をますます固めてそこから出られなくなる結果をまねいてしまうと述べた。が、なぜそれが旧い世界の残滓なのか、ここで明らかになるように思う。つまり、新しい世界の身体は、よろこびの伝播力を栄養分にして大きく育っていくのだが、暴力はまさに、このよろこびを萎縮させてしまうからである。となれば、やるべきは、敵のことなどうっちゃっておいて、とにかく楽しい場をつくることに専念することになる。

しかしこのようにして、社会運動の成否を、敵さえ引きつけられともに歌い、踊りたくなるような祝祭性、伝染性にうたえるとき、もうこれは、アートの世界に入っている。

情報化社会がすすみ、イメージやが光速で世界中に共有される今日、たとえばフラワーチルドレンの銃口に注された花のように、心を打つイメージを作った方が勝ちなのだ。社会運動はいまや、敵を押し、自分たちの主張を通す類の権力ではなく、人の心を動かすことで、どれだけ多様で多くの人の自発的参加をうながすかという、包摂性をめざすクリエイティビティの戦いになった。これが、新しい世界をつくる社会運動にアートモデルを導入したい

もう一つの理由である。

戦いを放棄することで、私たちは旧世界のロジック、スタイル、感受性で、旧世界と対峙することをやめ、旧世界から徹底的に自分を分離する。

がそれは同時に、自らのつくった世界の質を、旧世界に全身でさらすことで、その美しさ、よろこび、説得力を問い、こちらに來ないかと誘いかける、別の種類のコミュニケーションの始まりなのである。

話をもとに戻そう。蛹がおのずと割れて蝶がとびだす革命の比喩は、成長力の内圧で、旧世界の殻が自ずと割れる様子を示すものであった。が、ここで中の身体を成長させるものの実体がみえてくる。人の心を打つイメージを発信し、敵も参加したくなるような包摂的な祝祭の空間をつくること。

もちろんそれは不可能に近いことかもしれないが、とにかくこの世界をつくる作業に徹して、旧世界を攻撃するような姿勢は一切とらないことが肝要だ。というのも、そもそも、古い社会の殻を壊すために、暴力に訴えるということそのものが、旧世界のパワーゲームの論理の範疇にある。ということは、暴力によって新しい世界をつくることは、形容矛盾に他ならない。この選択肢を選んだ時点で、自分自身が、メタモルフォーゼを妨げる蛹の殻を、セメントで固める役まわりを果たすことになってしまう。

ここで必要なのは、「戦う」といった旧世界の文法によって、旧世界と関係することから手を引く、ということなのだ。彼らのロジック、スタイル、感受性の一切から、自分たちを分断する必要がある。これは、蛹の古い殻から身を完全にもぎ放てないと、メタモルフォーゼは完遂されないのに似ている。

とはいえ、新しい世界をつくるアクターたちは、それは旧世界と完全に接触を断つというわけではない。ナウトピアンたちは、旧世界のただ中に、居続ける。物理的暴力によるしろ、論争といったメンタルな形にしろ、これと戦うことをやめ（というのもこれ自体旧世界のロジックに依るものだから）、ただただ自分の世界作りに専念して、出来上がった世界のできばえのみで勝負しようとする。それは、敵としてではなく、表現者として旧世界の人々と争うこと、一種のアーティストになることなのだ。

だから、ホロウェイが開いてくれた亀裂のイメージに、私の立場はほんの少し微調整を入れるものだといえるだろう。彼の本のタイトルは「資本主義に亀裂を入れる」だが、私の場合は、「資本主義に亀裂が入る」。新しい社会の身体が力強く成長したとき、資本主義を直接攻撃し、そこに亀裂をいれようとしなくても、おのずとそこには亀裂が走るからである。しかしメインはもちろん、その動因となった、新しい世界の身体の成長のプロセスだ。

24 脱中心性

非暴力性とならんで、よろこびの政治学から帰結するナウトピアンの運動

の特徴として、脱中心性がある。これは、先ほど確認したような、美的状態にみられる「モラルのパラドックス」からも帰結されるものだ。つまりそれ自体、いかなる平和を強制するメッセージも含んでいないからこそ、『ひまわり』のもたらすが平和のために役立つとエンデがいうのはなぜか。一人一人の鑑賞者が百人百様のかたちで、そこからメッセージを主体的に汲みとることができるからである。それは『ひまわり』の理念と、鑑賞者一人一人が、分ちがたく一つになれるということでもある。この世に二人として同じ人がいない以上、『ひまわり』の理念の展開の仕方も、それぞれが異なるものになる。

こうした一つの理念を脱中心的に実現する構造も、多くのナウトピアの運動が共通して体現するもののように思う。ここでその好例として、「パーキング・ディ」の事例を紹介したい。

事例紹介 パーキング・ディ 理念を個性化する脱中心的、自己実現の運動始まった経緯

パーキング・ディ (Park) ing Dayは、サンフランシスコのアーティスト・コレクティブ、Rebarが³、2005年にはじめた運動だ。「なぜ、こんなにたくさんパーキングスペースはあるのに、パークは少ないんだろう？」と考えるようになったのがその始まり。この問いを可視化するために、彼らはパーキングメーターにお金を入れて近所のパーキングスペースを借りたが、車は駐車しないで、代わりにそこに芝生をしき、鉢植えの木とベンチを置いてパークをつくってくつろぐというパフォーマンスをやった。そのビデオを自分たちのウェブサイトアップしたところ、大変な反響があった。⁴⁰そこで、ちょっとした運動に発展する可能性を見抜いたRebarは、このパフォーマンスのアイデアをクリエイティブ・コモンズとして扱い、「営利目的でやらない限り、自由にコピーできる」ようにはかった。と同時にこの勢いを生かそうと、みんなで一斉に、同時にこのパフォーマンスができるように、日を定めた（毎年9月の第3金曜日）。また、お互い、自分が作ったパークを訪問できるように、グーグルマップにあらかじめ、自分がこのパフォーマンスをする予定の地点とその趣旨をアップできるようにした。また、パーキング・ディの後には、そのときの模様を撮った写真やビデオをアップして、互いに見ることができるウェブサイトもつくり、遠くて直接訪問できないパフォーマンスもヴァーチャルな世界で訪問できるようにした。

その普及、拡散ぶりは驚くべきもので、1992年には、6つの大陸の35の国、162の都市を舞台に、975カ所でパーキング・ディが行われるようになった。

ナウトピアの運動の典型例

パーキング・ディのこの浸透ぶりの背後には、一目瞭然のわかりやすさがある。駄洒落を多分に含むとはいえ、パーキングスペースをパークに変えることで、車に占拠されたスペースを、自然と人々のためのスペースとして取り戻すことができる。また、パーキングスペースは、車が往来する道の両脇

▶40 2011年9月12日、サンフランシスコのRebarスタジオでなされたマシュー・パスモアへのインタビューによる。彼はRebarのメンバーの一人で、パーキング・ディの創始者でもある。この章の記述はこのインタビュー、および、パーキング・ディのウェブサイト <http://parkingday.org> (2013年、3月23日に参照)、および同年9月16日、2013年9月21日のパーキング・ディ当日の自身の参与観察とインタビューによっている。

にあるので、二つの世界は直接向き合うことになり、パーキング・ディの日の勢力関係の逆転もはっきりするし、それらの間のコントラストも際立たせられる。かくして通行人は、隣り合わせに呈示されるこの二つの世界を比較せざるを得なくなる。かたや環境汚染や交通事故のリスクをとめない、便利ではあるけれど、やたらとお金がかかり、また、現代社会のアトム化、人々の孤立や私有化の象徴でもある車の世界。もう一つは、人々と緑のための場所。多少不便でスローでも、人づきあいや自然との接触を楽しむ生き方。パーキング・ディの日にこれら二つの世界を同時につきつけられる通行人は、自分はどっちの世界に住むことを選択したいのか、考えざるをえなくなってしまう。パーキング・ディは、ナウトピアを直接、実例呈示する運動の強みが存分に発揮される運動だといえる。

よろこびの政治学の好例でもある。普段は灰色で単調なストリートが、想像もつかないありえない活動の開催地となることが醸し出す驚きやユーモア、楽しさに自然に引きよせられるかたちで、参加がはじまる。さまざまな出しものを楽しんだり、立ち話したりするうちに、そこで貴重な学びを得たり仲間を見つけ、自分のやってきたこと、これからやりたいこととそれを関連づけ、協働をはじめることができる。

パーキング・ディの成功のもう一つの理由は、参加者にすべて自分でやってもらうそのDIY的な性質にあるように思う。パーキングスペースをパークに変える、しかしそれを私益のために行ってはいけない、という以外に何のルールもない上、flickerシステムを使い、ネット上で互いの作品の写真やビデオを見せ合うことにしたせいで、競合的な雰囲気も生まれ、次々と独創的なパーキング・ディのパフォーマンスやインスタレーションがなされるようになっていった。コンサートや自転車修理所、フリーフードやローカルのカルフォルニアレモンを絞ってはタダで配るレモネード・スタンド、一日無料で健康診断を行うコミュニティ・ヘルス・クリニック、ヨガ教室、瞑想センター、結婚式まで、一台の車を止めるための小さなスペースは、創始者Rebarのメンバーも予想もつかなかったと仰天するような、さまざまな活動の舞台になった。参加者はそれぞれが、自分の持っている技術や、特技、関心にのっとり、パーキングスペースをパークに変形するということが内包する意味を、独自のやり方で自由に解釈、展開していったのである。

ウェブ上のパーキング・ディのアーカイブの中でも特に私が気に入っている映像は、路上オペラ上映の模様である。車二台分のパーキングスペースのアスファルト上、すぐ傍らを車が通り過ぎる都会の喧噪のただ中でやっている以外は、本格的なオペラ上映で、古典的なフル・コスチュームに身を包み、結い上げた髪にドレスを着た女性が、アリアを歌っている。慌ただしい都市の車や人の往来と、ゆったりとした優雅なオペラの並存が、コントラストを際立たせ、双方をともに異化、相対化しながら、街の風景全体を、一つのアート作品として変容させている。

パブリック・スペースはもとより、私たち市民の共同の生を形成する重要な場所である。にもかかわらず、民主主義の世の中になっても、その形成力はいまだアーティストや都市計画家を筆頭とする専門家、管轄の行政機関、

開発業者などの権威や資本の力に独占されている。税金という自分たちのお金が投入されていること以外、私たちはそこにほとんど何も規定力を発揮できない。それどころか、その使用法、そこでの行動の自由を、さまざまなルールで管理されがちだ。

グラフィティはこうした状況に対する異議申し立てを、突発的な違法行為として、ぶちまける。しかしそのような暴力的なやり方とは別の、もうすこし、ソフィステケートされた、コミュニケーティブな私たち、反社会的どころか超社会的な協働と贈与を強調する私たちでパブリックスペースを奪回する方法もあることを、パーキング・ディは示してくれる。

パーキングディは違法行為とは裏腹に、パーキングスペースという、アスファルト上のおせじでも快適とはいえない、しかもほんのちっぽけな場所を、自分の自由な表現空間として借りるために自腹を切ってお金を払う。そうすることで、結局パブリックスペースの私有化、営利化に加担しているだけではないかとの批判も受けてきた。

しかしこのくそ真面目な法律遵守を、逆に当てこすりや皮肉のニュアンスでとらえることも可能だろう。車の駐車のためのスペースをお金を出して借りでもしないと、私たちは、自宅の私的領域の外に出て、不特定多数の未知の人たちと出会える唯一の場所であるパブリックスペースで、皆と共有の生をつくるために、自発的な貢献をすることが許されないのである。パーキング・メーターにコインを入れて、そこで車をとめず、自分が人と共有したい、公益的かつ自己実現的なさまざまな活動を行うパーキング・ディの身振りは、悲喜劇的なニュアンスをこめて、このきわめて異常な状況に、皆の注意を喚起することができるのだ。

公的なものと私的なものを混ぜ合わせ、仕切りなおす

パーキング・メーターにコインをいれるというきわめて卑近な、かつ現代社会を風刺する象徴的な身振りでスタートするパーキング・ディは、しかし始まるやいなや、楽しいお祭りになる。パーキング・スペースに、その日のインスタレーションや活動に必要なさまざまなものが運びこまれるにつれ、灰色のコンクリートやアスファルトで固められ、実用主義一点張りか、でなければコマーシャリズムの支配下にある非人間的なパブリックスペースに、人間らしい多様な表現が、人々の手で、草の根から取り戻されていく。パーキング・スペースは、サンフランシスコのように密集した街にはどこにでもありふれた存在だ。誰でも近所のパーキングスペースで行えるので、家の中から物を運び出すのも簡単で、そこにカーペットを敷いたり、ソファを持ち出したりと、家の中と外が反転する日でもある。サンフランシスコが一日、東南アジアの国のストリートにそっくりになる日、人々がストリートに住みはじめる日なのだ。

つまりこの日、普段はアスファルトとコンクリートで固められ、企業の利益追求と、公権力の管理のもと、灰色の匿名性、よそよそしいスペクタクルでおおわれたパブリックスペースに、つかの間であれ、人々の日常生活が溢れ出て、等身大の人間らしい、多様でカオス的な生活臭が加わる。パーキン

グスペースという、アスファルト上の、匿名性をきわめた公的領域すら、パーソナライズされ、いかにもその人らしい親密で個性的なトーンに染め上げられた、住みこなされた空間になることがかくして実地で証明されることになる。

この運動のインパクトは甚大である。これまで市街地のストリートと言え、単なる通過点。とくにサラリーマンやOLが脇目もふらず先へ急ぐところか、でなければ、ショーウィンドウを脇に眺めながらのウィンドウ・ショッピングの中継地点というのが、お決まりの使用法である。しかしこのパーキング・ディをきっかけに、ストリートで実はさまざまなことを行う選択肢が開拓され、自力でさらなる探求をする想像力も刺激される。いわば、これまでコンクリートとアスファルトに固められてきた鉄の領域が、変形可能な可塑性を帯びて見えてくる。これにより新しい世界をつくるナウトピアン作業に拍車がかかるのはもちろんだ。パブリックスペースが、具体的にそこに住む人々の共同の生の舞台として奪回され、再定義されることになる。

つまりパーキング・ディは、パブリックスペースを人々のためのものに奪回するだけでなく、人々によるものとしても奪回するという、今やまったく稀になってしまったことを成しとげる「パブリック・アートとは、単にパブリックな場所に置かれたアートのことをいうのではない。どんな場所であれ、そこをパブリックな状態にするアートを、パブリック・アートというのだ」というのは、ニューヨーク在住のアーティスト、長澤伸穂の言葉だが、パーキング・ディは、そのような意味でも、パブリック・アートだといえるだろう。

パーキング・ディは、このように、公的領域に私的な要素をくぐらせて人間らしい顔や生活感を取り戻させるきっかけになるだけではない。同時に、この逆のことも起こる。とかく自分のため、近親者の自己保存のためにのみさげられがちな私的領域に、公的なものを浸透させて、その閉塞性を壊し、外へとひらいていくきっかけを与えてくれる。パーキング・ディの常連ホストは、毎年9月中旬のこの催しのために、今年はどんな趣旨のスペースをつくるか、考えながら生活するという。私の生活の中の、どの要素が、未知の不特定の他者とシェアするにふさわしいだろう？と同時に、それが単なる自己満足や、そのときだけの一過性の楽しみでおわらず、私たちが住みたい世界の実例呈示、デモンストレーションするものにするにはどうすればいいか…？難しい課題だが、もしそれに成功すれば、大変なエンパワメントになるだろう。家族や友人の輪の中といった、私的領域でのみこれまで評価されて来たことが、あらゆる人にも通用することを確かめれるわけだから。しかもそれが、単に一過性の欲望を充足するだけでなく、ナウトピアという新しい社会を築く実例呈示となり、人それぞれにアイデアやインスピレーション、ノウハウを得て帰ることができる公的な価値を証すことができるわけだから。

つまり、次のパーキング・ディで何を提供すべきかをめぐる自問自答をしながらの生活は、その人の人生は、生活のなかで、実際に私的なものと公的なものがオーバーラップする領域を広げていくことにもつながる。

コミュニティの結束を固めるためのいい機会であることは、言うまでもないだろう。クリス・カールソンは、一度パーキング・ディを近所のパーキン

▶41 2011年9月16日のパーキング・ディの日の夜にあったAfter Party席上でのクリスの発言。

グスペースでやるだけで、自分の近所に、知らない人がまだまだ沢山住んでいて、その中には面白い人もいるということに気づかされると言っていた。⁴¹ パーキング・ディのインスタレーションやパフォーマンスが、それを行う人の生活や関心、その人となりや圧縮して表すものであることが、日常場面での挨拶よりも、価値観や信条、生き方に深く踏みこむ会話をすすめる、相互理解を深めるための触媒になる。スペースをつくった当人の物語がこのスペースに映し出されるのはもちろんのこと、その上に、通りがかりの人たちが、そこで彼らが思い出し、連想したそれぞれの物語を加えていき、集合的な皆の物語がそこに次第に形成される磁場ができる。それはとりもなおさず、コミュニティのきずな、アイデンティティを担うものへと発展する可能性がある。

パーキング・ディはこんなふうに、公と私を混ぜ合わせ、新たに仕切り直すことで、両者ともに活気づける。「個人的なことは政治的なこと」であることが、自然に実践され、証明されていく場だといえるだろう。

ギフト・エコノミーと歓待の実践

このように公私の両極がつながり、「私のため」と「人のため」をめまぐるしく交錯、浸透させながら自己実現し、生きがいや創造することをつちかわれるよろこびはまた、私たちの心を寛大にし、「個人的利益を追求してはならない」というパーキング・ディのルールを、簡単にクリアさせてくれるだろう。パーキング・ディを考案したRebarが、クリエイティブ・コモンズとしてこのアイデアを扱う際に設定した唯一のルールであるこの営利活動の禁止は、この日をギフト・エコノミーの祭りにも仕立てることになった。

私自身、パーキング・ディは、まだ、訪問者としてしか体験したことがなく、自分でスペースをつくるまでには至っていない。しかし訪問者としてさまざまなパーキング・ディのスペースに参加するだけで、予期せぬ人、異質な他者に対してこそ降り注がれる政治的な愛、歓待ということの持つ心を芯から暖め、高揚させる体験のとりこになってしまった。まったく初対面の人にハグされて、ビールをすすめられ、乾杯したり、会話を楽しむ。そしてその人がなぜこんなスペースをつくっているのか、その人生の物語をきく。たとえば、今、自分たちは結婚記念日の3周年パーティをしているところ。3年前のパーキング・ディの日にパーキングスペースで結婚したゲイのカップルだ。参加者がみんな犬を連れていたり、抱いているのは、動物愛護の活動家でもあるから、などなど。サンフランシスコはもともと、こうした警戒心のない、オープンな生き方が普段から自然にできる雰囲気ただよう街だが、ストリートに次から次へと、こうしたスペースが並んでいると、天国がここに出現したかのような心地がしてくる。

パーキング・ディに見られるこのようなギフトエコノミーや歓待の実践は、特定の政治的意図を持つ運動やキャンペーン特有のものとして、片付けることもできるかもしれない。

しかし、パーキングディは徹底したDIYのもよおしで、いつでも誰でも勝手に旗揚げして、自分のパーキングディのスペースの主催者になることがで

きる。そのための資格を問う人も、内容をコントロールする人もいない。何しろ、「営利目的にやってはならない」という以外、ルールは何もないのだから。プラットフォームは、車一台をとめるパーキングスペースが基本なので、これを始める基盤も平等に与えられる。これは一前論文の言葉を使えば一参加者一人一人が内発的権力を発揮する主体になるための立脚点が平等に与えられるということでもある。それにより、ヒエラルヒーのない、水平的な横並び状態、脱中心的な構造が可能になり、全員が、内発的権力を発揮しながら参加する、運動の主体であり、リーダーであり、また、オーガナイザーとすることができる。つまり、大企業や政治キャンペーンのような特定の意図、特定の中心をめぐる組織された大がかりな運動とは、性質を全く異にしているのである。その結果、組織立ったキャンペーンに見られるようなプロフェッショナルなできばえはとても見こめないし、実際、パーキング・ディのインスタレーションや活動は、へたくそで中途半端な素人仕事が目立つ、それが並ぶさまは、洗練されたショッピングモールというより、バザールの混沌、下手をすると難民キャンプのようである。しかしだからこそ、先ほどのホロウェイの言葉を使えば、「情緒的な関係、官能性や遊び、笑い、愛しあうといったこと」がそこにたっぷり入りこむ余地も生まれてくる。

もちろん駐車代金を払えなければならないし、全く資金なしにはじめることができないのも事実だ（とはいえ、私がサンフランシスコで参加したパーキング・ディには、パーキングメーターに募金箱を結わえ付け、参加者に寄付を呼びかけながら行うものもあった）。しかしそれは政治や新商品のキャンペーンで必要になるような大規模な金額ではないので、アクセスが大きな企業や組織体に独占されるほどのものではない。

つまり、パーキング・ディにみられる贈与や歓待には、特定のイデオロギーや利害のための下心が入りこむ余地が——皆無とはいえないまでも——ほとんどない。各人、自分にとって大切なものを、他の人たちといま、ここでシェアしたいといった動機から、DIYの手作り感あふれる催しをして、通りすがりの人を家庭的に歓待しながら、人を選ばぬ無条件の贈与をしているのである。

あるいは、原因と結果を逆にして、こう言うことができるかもしれない。パーキング・ディに歓待や贈与の精神があふれているのは、そこではあらゆる人が、何も強制されておらず、主体的にふるまっているからだ。休暇先では誰でも気前のよい、いい人になるのと同じである。しかしそんな人も、ひとたび強制だらけの職場に戻るや冷たい競争的なマインドに戻るように、パーキングディもかりに、特定の政治的、コマーシャル的な意図のための単なる〈手段〉に墮すやいなや、能天気なその明るさ、歓待や贈与の暖かさを失ってしまうだろう。

見返りを要求しないギフトの贈り合いは、完全なボトムアップの草の根的な形で公的領域を築こうとするときに、繰り返しあらわれるナウトピアの生態の一つである。この種のギフトエコノミーこそ、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートが〈共〉the Commonと呼んだ、多様なものの協働、相互扶助のウェブを織りなす法則なのであり、このウェブからこそ、ナウトピアの身

体が紡がれていること、したがって、ナウトピアの運動が生理的に要求するものであることを、その後の章で徐々に示していければと思う。

答えでなく問いの共有による脱中心性と収斂性のバランス

その前に、ここではもう少し、パーキング・ディを、社会運動としてとらえたときにどんなことが言えるか、考えてみたい。

自転車アクティビズム、コミュニティガーデニング、オーガニック・フード、食の安全、リサイクル、バイオ燃料、自然エネルギーの普及、自然保護、動物の権利、セクシュアル・マイノリティの権利の擁護などナウトピアの運動のあらゆる主要テーマが、ずらっと並ぶ、その見本市のようになっている。フリー・メディカル・クリニックからヨガ教室まで、このようにきわめて多様なパーキング・ディの活動は、社会運動としてみたとき、一見、メッセージの明瞭さに欠け、何をやりたいのかわからない混沌としたものにみえる。

しかしそれでも、運動体としてまとまりを持っているのは、一つには、「パーキングスペース」を「パーク」に変容させるというフォーマットを、共通して持つことによるのだろう。もちろんそこで「パーク」が意味することは、参加者一人一人が掘り下げ、パーソナライズされたものになっていて、それがこの運動に多様性と、創造力の介入の余地をふんだんに与えている。芝生の上にベンチを置くだけの「パーク」という言葉の一般的な定義から、どれだけ逸脱できるかを競い合っている感さえある。

つまり「パーク」という言葉で参加者が共有しているのは、「パーキングスペース」に象徴される車社会の後に来るべき世界のあるべき姿、すでに与えられた〈答え〉ではなく、「車社会のあとにどんな世界が来るべきか？」という〈問い〉なのだ。その問いに対しては、参加者の数だけさまざまな答えがある。きたるべき新しい世界そのものが、多様な要素からならないと、世界として成立できない以上、それは奨励されることでもある。参加者にやり方も内容もまったく委ねてしまうもうその完全に脱中心的、DIY的な構造が、パーキング・ディ当日のバザールの混沌に、拍車をかける。それでも、はっきりとした収斂性をたたえているのは、パーキングスペースを借りて、車をとめるのとは別の用途にこれを使うというこの共有の身振りから、「車社会のあとにどんな世界が来るべきか？」というこの〈問い〉をしっかりと共有できていることによるのである。このように、ゴールを固まった〈解答〉として持たず、〈問い〉として持つことで、一人一人が主体的に、自由に、また創造的に運動に参加することが可能になり、その結果、運動全体が豊穡な多様性をたたえるようになり、それにもかかわらず、びっくりするほどのまとまり、団結的な参加が可能になり、動機や意図の収斂性と、解答の多様性の共存が可能になったのだ。そのようなナウトピアの運動には、まとめるための一義的なメッセージはいらない。

そもそも、〈解答〉としての明瞭かつ一義的な意図が社会運動には必要だという考え方の背後には、またもや、社会運動を新しい世界をつくるための〈手段〉にすぎないという発想が前提とされている。そうではなく、社会運動は〈新しい世界そのもの〉なのだと、発想を変えたのが、ナウトピアの運動なので

ある。新しい世界は、多様な様々なものの協働からできるもので、特定の意図、メッセージからなど、できはしない。たとえできたとしても、脆弱なものになるだろう。

社会運動を新しい世界をつくるための〈手段〉にすぎぬものとしてみるこのような考え方の背後にあるのは、ホロウェイが指摘したような、まずは「権力をとって世界を変える」発想だ。そこで権力は、トップダウンで法や政治を変える、私たちの外にあるものとして、想定されている。しかしナウトピアンにとって権力は、そのような外在的な獲得の対象なのではなく、新しい世界を自己決定的、自己組織的につくる力という、一人一人の中に内発的な起源を持つもので、刻々とつくられていく世界として、そのつど可視化される。つまり、「権力をとって」、その後、「世界を変える」のではなく、「世界をつくることそのものが権力」なのである。無数の人が日々つくる世界のなかに、「ナウトピア」と呼ばれるような一つのまとまり、パターンを持った世界が姿を現してくる。それが、彼らにあつては権力をとることなのであって、そのためには一枚岩の意見一致など必要ではない。むしろ重要なのは、参加者一人一人が、新しい、独自の世界をつくる力、クリエイティビティをはぐくむことと、それを存分に発揮させ、成果を不特定の他者と共有できる場所をつくることである。こうしたポイントが押さえられ、参加者が自己実現が、新しい世界の公的領域の建設と一つになるとき、前代未聞のよろこびがそこにみなぎり、歓待と愛の世界が生まれ、放っておいても運動は一つのまとまりをなしていく。そこでは、一人一人が存分に自律的に、個性的に振る舞うことは、強く連帯することと矛盾するどころか、互いが互いを前提としあう不即不離の関係にある。このような構造をもつナウトピアの運動にあつては、メッセージの分散からくる不明瞭感は、なんらおそれるに足らないのである。そのカーニバル的な混沌は、排除すべきどころか必要なもののだ。

日本で見られる社会運動の多くは、残念ながら、これとは全く逆をいくものが多い。つまり同じ台詞をみんなで声を合わせてチャンティングしながら歩くだけのデモのような、画一的な表現が支配的である。というのも、そこでは「問い」ではなく、原発を止めるといった類の特定のゴールがあり、運動自体をそのための道具として位置づけているからである。

そこから、参加者が「楽しくない」、「続かない」といった問題も生じてくる。そうした不満を解決するために、最近のデモは、音楽や踊りや仮装をとりいれたりしてきていて、それなりに評価できる。が、それではデモのオーガナイザーが参加者のためにエンターテインメント（デモに来てもらうための餌）を提供している感は拭えない。そうではなくて、全ての参加者が、オーガナイザーになれるような構造自体をつくる必要があるのだ。

運動全体が、外在的権力をとって世界を変えるための手段、道具にすぎないとき、そこに本当の意味で内発的権力が生きる余地はあり得ない。参加者が、デモに多様な興味、個性をそこに持ちこんで、創造的な貢献をすることもできないし、そもそも、そのような創造的なタイプの人々、つまり内発的権力という、新しい世界をつくる本当の力の持ち主（アーティストなど）ほど、デモによりつかなくなってしまう。そうしてますます、デモはつまらない場

所になっていき、同じ文句のチャンティングが画一的に繰り返されるばかりの場所になりさがってしまう。

しかし何より、運動それ自体を新しい社会の創造、事例呈示にするよこびの政治学へと高める必要がある。そうすると、手段と目的の分離は克服され、目的のために今は手段は選ばないとか、我慢我慢といった目的論的、直線的な時間観は崩れていく。そして、それ自体が目的であり、世界の見方を新たにするような祝祭的な体験となって、生まれ変わるのだ。

このような社会運動の現状と比べると、つくづく、パーキング・ディはうまくできている、と思う。

パークレット Parklett

実際、パーキング・ディの社会運動としての効果はめまぐるしく、パーキング・ディがはじまってほどなく、恒常的なパーキング・デイというべき、「パークレット」が、サンフランシスコの各地にあらわれはじめた。パークレットは、パーキング・ディのようなパブリック・スペースが近隣につくりたいと思った店舗が、行政やパーキングスペースの所有者と交渉した上で、隣接した道路上のパーキング・スペースに皆がくつろげる場所をつくることをいう。パーキング・ディの創始者でもあるRebarが、パーキングスペースをインスタントに心地よいパークに作り替える観葉植物ポットとベンチからなる木製デッキのような組み立て式パークのキットを「パークレット」としてデザインしたものが、そのプロトタイプをなしている。しかし、今、サンフランシスコのお洒落なストリートのいたるところに点在しているパークレットのほとんどは、もっと趣向をこらしたデザインになっていて、元祖パークレットをそのまま使ったものは少ない。パークレットの出資は、そこに店舗や居を構える当人と市行政が折半し、数ヶ月の契約ではじめるが、皆がくつろぐ場所として既成事実化した場所をふたたびパーキング・スペースに戻すのは気が引けるようで、何年も更新を続けている場所もある。パークレットを構えるのは、飲食店やマーケットが多く、自分の店で買ったものを客が腰掛けて食べるスペースを道路上のパーキングスペースに拡張するかたちをとる。その際、パークレットのデザインも、店舗のデザインと照応させて、ますます店との一体化をはかっている。自分たちの環境意識の高さをアピールするPR的な意図も見受けられるようだ。ミッション地区のヴァレンシア・ストリート上のフェアトレード・コーヒーを扱うカフェや、ハイト・ストリート上のオーガニック・マーケット前のパークレットは明らかにその類だろう。

本来、パブリック・スペースで、誰でもアクセス可能なはずのパークレットが、店舗の飲食空間の拡張や、その環境に優しい身振りのPRのために使われることに対する批判の声もある。生粋のナウトピアンでパブリック・スペースの研究家であり、アクティビストでもあるアンディ・ブルーは、パークレットが本来、通りがかりの皆のためのスペースだということをアピールするために、隣接店舗で買ったコーヒーも食べ物も持たずに堂々とそこに座ってくつろいだり、ギターを弾いて、観客を集めたりする運動をしていた。また2012年の春には、自動車会社のAUDIがパークレットを構えたことが、サン

フランシスコのナウトピアンの間で論争の種になっていた。

しかしこんな風に行政や民間、業者のさまざまな思惑に巻き込まれ、論争を呼ぶようになった事自体、パーキング・デイの影響力の大きさを物語っているといえるだろう。

選挙キャンペーンも脱中心的にやる

この手の脱中心的な運動は、実は、サンフランシスコの十八番である。草の根社会運動のみならず、代表民主主義の選挙キャンペーンさえ、この方式でなされたことがある。2000年のサンフランシスコ市長選における、マット・ゴンザレスの選挙キャンペーンがそうだ。⁴² 緑の党からの候補として、民主党候補のガービン・ノイサムと争うことになった彼は、有名なイタリアンレストランを経営している特権階級のノイサムと違って、メキシコ移民の息子で、資金もほとんどなければ、キャンペーンを始めた時期も遅く、選挙日の1ヶ月前だった。類い稀な美男でしかも独身、女の子に絶大な人気を誇っていたこと以外、圧倒的に不利な状況にあった。そこでとられた戦略が、パーティを募集すること。1ヶ月内に、市内ならどこでも、また誰でもいいから、何かパーティを開いてほしい。そこへマットが出向いて、10分間ほど、スピーチをする。できれば、マットの政治ヴィジョンにあった趣旨内容のパーティがいいが、これと矛盾しなければ、別にどんなものでも構わない——そのような募集をかけたところ、選挙事務所の電話が鳴り止まなくなり、結局、30日のうちに130ものパーティが開かれることになったという。その内訳は、ロックコンサートからお料理パーティ（皆で料理をして、できたものはフリーフードとして無料配布）、ストリートいっぱいを自転車で占拠しながら走るクリティカル・マスの合同サイクリング、彼の選挙公約では恒常的な歩行者天国にすると約束されていたマーケット・ストリート上での犬の散歩のクリティカル・マス版（それぞれ愛犬をつれてきて、皆でいっせいに散歩することで、道路いっぱいを犬の散歩者で占拠してしまう）など、それこそ、ナウトピア的な未来ヴィジョンを実現する、さまざまなパーティが開催されることになった。おかげでマットはキャンペーン中、一晩に4〜5カ所のパーティをはしごしてスピーチすることになり、その後、街のいたるところで、「その節は、うちでパーティをしていただきました」などと声をかけられるが、彼の方では記憶にない。つまり、その間、どこでどんなスピーチをしたか記憶できないほど忙しかったのだ。

結果は、本選挙ではノイサムに勝利したが、不在者投票の箱をひらいたら、僅差で破れたというもの。破れたとはいえ、低予算、短期間、また緑の党というマイナーな党の候補だったことを思うとき、驚異的な成果をあげたといえる。

その成功の一番のファクターとして考えられるのは、やはりこの脱中心的で、参加者それぞれが内発的権力を発揮する主体になれるキャンペーンの方式にある。「どんなパーティでもいい、ただ、マットの政治ヴィジョンの延長上にあるものを」といったゆるやかな課題だけを共有し、あとは、自分たちの創意工夫にすべて一任されるのを、サンフランシスコの人たちはとてもよ

▶ 42 以下の記述は、2011年3月22日にサンフランシスコの公選弁護人事務所のマットのオフィスでなされたインタビューによる。彼はその後、2008年の大統領選では、ラルフ・ネーダーと組んで緑の党から副大統領候補として出馬。現在、サンフランシスコの公選弁護人事務所の所長をしている。Chris Carlsson (edit.): Political Edge, City Lights Foundation Books, 2005も参照。

ろこび、はりきってしまったのである。

25 | アートの政治的機能とナウトピアの運動の微妙に違う点

しかしアートが新たな世界を実現し、人の意識を変えるやり方は、ナウトピアのやり方と、微妙に違うところもある。エンデのいう政治機能を持つ重要なポイントは、政治的メッセージを直接発することを一切あきらめることだった。「アートや文学がその政治的機能をまっとうしようとするなら、なおさら、直接政治的なことではなくて、ほかのことについて語らなければならない、とぼくは考える」と彼は言う。

これに対して、ナウトピアの運動の方は、政治的なことについて直接語ることをいとわない。クリティカル・マスは、みんなで自転車に乗るというぎりぎりの最小限の所作に圧縮されているとはいえ、それでもそこには、車が圧倒的優位を占めるストリートの使用において、自転車の地位を上げるという明瞭かつ直接的な政治的メッセージが見てとれる。パーキング・ディもパーキングスペースをパークにするという所作自体にも、それが車が統べる公共空間で、緑とコミュニティの場所を奪回しようとする直接的な政治的メッセージがこめられている。

しかしエンデがこういう言葉を語った背後にある意図にまで目を向けるとどうだろう？

アートや詩が政治的メッセージに縮減されてしまっただけではない理由として彼は、「中心にあるもっと一般的なもの」の存在を指摘する。「それは人間的なものだ。この人間的なものは、絶えず新しく表現され続けないと、中身が空っぽになってしまう概念だ。人間は自分の形を自分で自分に与え続けなければならない。動物と違って人間のかたちは普遍ではない。ある国の人々の意識は天からのさずかりものなんかでは決してない。それは、人間がそれを生み出すことで、歴史的に展開してきた文化の産物なんだ」。⁴³

アーティストは、あたらしい人間の意識を生み出す。それにより、彼らは人間の定義を絶えず更新し、進化させるいとなみの最前線になう。そこで彼らが生み出す意識が「新しい」内容と形をそなえている以上、その等価物が既存の意味世界には見当たらない前代未聞のもの。したがって、それをどのように名づけ、定義するかは、まったくそれを受け取る当人にゆだねられている。言い換えれば、受容者がそこから何を受けとるかにに関して、このように解釈せよといった一義的な強制は、少なくともアーティストがそれを作った時点では存在しないことになる。だからこそ、そこから何を受けとろうと、それは作品とそれを見る人双方の協働による新たな意識の創出となるし、受容者は自分がそこで受け取ったものを、自分にしかできない個的な形で消化、血肉化し、それぞれのおかれた状況、百人百様のバイオグラフィーの中で展

▶ 43 Michael Ende/Joseph Beuys: Kunst und Politik, FVA, p.109

開し続けることができる。アート作品が、直接何をなすべきか、直接指示することをあきらめて、幾様にも解釈できる実現された世界を呈示することは、少なくとも理想状態においては、そのように受容者も創造者、「する力」すなわち内発的権力を発揮する人に仕立てる潜在性を秘めているといえる。

これに対して、直接語れる政治的なことはたいてい、新しい世界をつくるどころか、使い慣らされた言葉を紋切り型の言葉に凝固しがちだ。メッセージがあまりに一義的で、作品が、特定のメッセージの道具に過ぎないような場合、受け手一人一人がそれをバイオグラフィーに組みこんで展開するときにもみられる多様性、脱中心的にさまざまな物語を生み出す力も削減されてしまう。それはとりもなおさず、多様な人々の協働によってしか出来ない新しい世界を作るといふ政治的な効果をあげる力も失われてしまうことを意味する。だからこそエンデも、「アートが政治的機能を発揮しようとするなら、なおさら、政治については語ってはならないんだ」というのである。

ナウトピアの運動の方は、アートほど、作る世界の「新しさ」は、そこまで要求されないかもしれない。クリティカル・マスは、みんなで自転車に乗って道路を埋めつくすという、きわめて単純なメッセージに圧縮されていて、これが社会運動？と面食らわせるが、とはいえ、それでも車が普段走っている場所を占拠しながらみんなで自転車に乗るというルールの中に、すでに彼らが実現したい世界が、誰にでもすぐに理解できる紋切り型のメッセージとなつてすでにこめられている。

ただその創始者の一人、クリス・カールソンも強調するように、始めた当初は、自分たちもこれが何を意味するか、よくわかっていなかった。単に、普段道路で車に押しのけられて形見が狭いし危険な目にあつてサイクリストたちが団結して走ることで、この状況からの奪回をはかるというほどの動機しかなかった。環境問題や健康問題、石油利権にからむ戦争の阻止、パブリックスペースの奪回といったテーマ系は、その後参加者が持ちこんだものである。その解釈の多様性、深まり、オープンエンドな予想外の展開に、クリティカル・マスの創始者たち自身も驚いている。

パーキング・ディもそうで、最初のパークは、芝生を引いて鉢植えの木とベンチを置くというトラディショナルなパークだったが、その後展開をみるうちに、フリーメディカルクリニック、自転車の修理教室、ヨガスペースに、結婚式をしたカップルまでいる。これも、創始者Rebarの意図をはるかに超えて、車社会の後にどんな世界がくるかという同じ一つの問いに対して、各人各様の特技、関心を生かして答え、一日、パーキングスペースという小さな領域ではあるが、事例呈示する場となった。そこで共有されているのは、答えではなくて、問いである。そしてこの問いには、参加者の数だけさまざまな答えがあるのだ。

このように、うまく機能しているナウトピアの運動は、始まった当初は紋切り型の政治的メッセージを呈示するにすぎなかったのに、その後、参加者が予測もつかないものに展開し膨らんでいく、ということがよく見られる。

クリティカル・マスやパーキング・ディのこのような経緯を見ると、それはアート作品が受け手の数だけさまざまな解釈、展開をゆるすさまに似てい

る。アート作品には正解なんてあり得ない以上、受け手はアーティストの「させる力」に屈して、作家の意図を汲んだり、教科書通りの解釈を必要なんてまったくない。オープンエンドで予測不可能な展開をみせるこの自由のなかで、受け手はまた作り手へと転じていく。これと同じことが、うまく機能し、広がり続けるナウトピアの運動にも見られることがわかる。

つまりナウトピアの運動において、最初に与えられる、紋切り型であることが多い政治的メッセージは、参加をうながし、そこで何でもいいから始めるための口実、仮設的な土台、スプリングボードにすぎないのである。そのスプリングボードから跳びたつや、参加者たちはそれぞれ勝手にそこに自由な解釈、展開、創造を加えはじめる。そして、設立した当人たちには予測もしなかったようなものが、全体としてみると、コレクティブな知性、クリエイティビティの所産として生まれることになる。

そうした、脱中心的な展開そのものは、エンデが「アートの政治的機能」がうまくいったときの姿としてイメージしていたものとほぼ重なるように思われる。ナウトピアの運動はこのようにして、政治の側からアートに接近しながら、同じ「文化と政治のあいだをつなぐ一つの領域」を切り開くにいたるのである。

ではなぜ、アートの側からのこの「領域」に接近するときのみ、「直接政治について語ること」をエンデはことさらに禁じようとするのだろうか？

「アートや文学がその政治的機能をまっとうしようとするなら、なおさら、直接政治的なことではなくて、ほかのことについて語らなければならない、とぼくは考える」という彼の言葉の背景には、今日のいわゆる「アート」⁴⁴が置かれた権威主義的な状況、ものを定義する力を独占してしまう、モノローグ的な役回りがあるのではないかと思う。現代作家のあらゆる反権威主義的なところにもかかわらず、作家の全能性の通念はいわゆる「アート」の世界では、依然として根深い。作家はやんわり提案し、作品を答えの一例として、呈示しているにすぎないのに、それがたとえば、美術館に置かれるや、受容者にとっては、一義的、絶対的な正解、あるいは命令と受けとられがちだ。

そのような状況では、作家は何をすべきかについて直接語ることで、受容者をますます受け身な存在になってしまう。そんなことになるくらいなら、作家は受容者が自分のイニシアティブで主体的に動くべき肝要事についてはあえて何も言わず、ただ、彼がそこで実現する新しい世界の全体の中に受容者を実際に引きこみ、これを体験させることに徹した方がいい。そうすれば、受容者はそこで自力で新しい意識を目覚めさせ、自分のやり方でこれを自由に展開できるようになるだろう。そうすることで、受容者が作品から何をくみとり、次に何をなすかは、各人の「内発的権力」にまかせることができる。もちろんこの場合、伝わるメッセージは一義的な強制感を欠くけれど、意識の変化、新しい世界を体現し、つくる「する力」は損なわれずに伝播していく——そのような強制感のない、間接的な伝達方法をとるためにこそ、エンデは「アートが政治的機能をまっとうするためには、なおさら政治的なことについて語ってはならない」と言ったのである。

これに対して、パーキング・ディなどのナウトピアの運動においては、参

▶44 「アート」とよぶときには、とくに、制度によって公認され、守られている狭義のアートをさすことにしたい。

加者はすべて常に能動的な実践モードにあるので、そこに自分の創意工夫をさしはさみ、自然にそこに新たな要素を加えたり、既存の形をつくりかえるといったことが、当人も意識しないうちに自然と起こる。アートの場合も、こんな風に受容者が実践モードにあれば、そこから自然と自分の創造を展開することができる。

しかし現状の「アート」では作家の全能性への信仰はまだまだ根深く、受容者はメッセージの受け手にすぎず、そこで受けたものを、展開していく能動的な存在だとは思われていない。たとえば鑑賞において重要なのは、「作家の意図」を正しく受けとることだというアカデミズム的な態度であると、まだまだ一般的に思われていて、受容者がそこで受け取ったものを、どのように自らの人生の創造につなげていったかというアートを触媒にした実践力の展開にあると見る人は少ない。

しかし新しい世界をつくり、実際に社会や政治に働きかける力によってアートの成否をはかるとすれば、重要なのは後者の方だ。作者の意図に関して多少の誤解があろうが、とにかくそのアートの触れることによって、受容者がどれだけ「する力」、内発的権力を発揮する能動的な存在になったか。その度合いがその人のアートを受容する力でもあるし、アートそのものの力でもあるというのが、私の立場である。

26 内発的権力の源泉としてのアート体験 そこからなされるアートを再定義

つまり、「アート」に関する少なくとも現行の巷に流布した通念が、あまりにもアカデミックで静的で、実践や社会形成と縁遠いことが問題なのである。

あるべき社会変化を、どれだけひきおこせるかによって、アートの価値を判断するなどという、私はアートをアクティビズムとして扱っているとの誹りを受けそうだ。

しかし今や、方々で、アートがその存在意義を問われる時代である。その存在意義を定義する力を私たち市民が掌中せず、放っておくと、権力や資本がアートの存在定義をもっぱら下すことになってしまう。かくして、後に詳述するように、多くのアーティストが、無自覚のうちに、あるいは確信犯的に、ジェントリフィケーションの問題を引き起こし、土地の歴史伝統、そこに住む人々のアイデンティティを混乱させるようすような都市の再開発、不動産投機、観光振興のために動員されてしまう危険さえ生じてくる。

このような中で、市民が草の根から自分たちが見たい世界を自分たち自身の力でつくるための触媒としてアートがあるという見方は、すこぶる健全で、民主的ではないかと思うのだ。

また、受容者を単なる受動的な存在にとどめず、自分がアート作品から得たものを主体的に受け継ぎ、自分の持ち場、才能をつかって新たに展開「する人」に仕立てる、実践的な伝播をする力にかけては、いわゆる狭義の「アート」は、

まだまだ乏しいように思う。

では、「アート」によって新たにされた意識が、受容者の内発的権力へと流れこみ、自身表現者あるいは実践者となって、その表現や実践がまた、別の人をインスパイアし、実践と創造の決して途絶える事のない連鎖反応を引き起こし、新しい世界の形成へとつないでいくにはどうすればいいのだろうか？ こうした実践性の点では、逆に、「アート」の方が、社会運動に学ぶことが多々あるのではないだろうか？

とはいえ、社会運動が、アートに学べる点が多い。これまでみてきたように、アートは、内発的権力のありかを正確に示す上、理念を単なる抽象的な概念としてではなく、実現され、生きられた状態として呈示することができる。その点、社会運動がよろこびの政治学に進化するとき、正しい道を歩んでいるかを知るための参照点を与えてくれるとえいるだろう。アートを参照することで、社会運動は、自分を新しい世界をつくるよろこびの政治学まで醇化し鍛え上げることができる。「アートは自由の科学です」というボイスの言葉はここでもあてはまる。

27 | アートの無規定性を社会運動に もちこむ

私がサンフランシスコで出会ったグループの中には、アートと社会運動の境界線を行き、ストリートを舞台に、占拠運動などと行動をとるところは社会運動に見えながら、エンデがアートに求めたように、固定した政治的メッセージの類をまったく前面に出さず、そこから何を汲みとるかを、見る人の想像力や創造的な関与にすべてゆだねている人たちもいた。SANEというパフォーマンスグループがそうである。彼らの概略について紹介してみよう。

事例紹介 SANE

SANEは4～6人からなる、サンフランシスコのストリートでゲリラ・シアターを行うパントマイムのグループである。彼らの定番のパフォーマンスは、毎週木曜日のラッシュアワー時に、サンフランシスコのウォール・ストリートとでもいうべきモンテゴメリ・ストリートを中心とした銀行や証券会社が並ぶ金融街に、真っ白な服を着て、何も言わず、そのときそのときに即興で決めたさまざまなポーズをして、完全に静止して微動だにせず立っていること。クリティカル・マスが動の極にあるとすれば、SANEは静の極にある運動といえよう。単に何も言わず、動かないだけでなく、何も書かれていない真っ白なプラカードやバナーを持って立っていることもある。

知人のダンサー、リサルス・エリオットのフェイスブックページで彼らの写真を見て興味を持った私が、早速参与観察を試みるべく、同じく白い服

を着て現場に加わったのは、2012年5月3日の木曜日の朝8時のこと。金融街の通勤時間帯で、職場へ急ぐ人たちの波にもまれながら、その場の雰囲気、ひらめきで、4人のメンバーが、交代に提案するというかたちをとりながら、どのようなポーズをとるかを、即興で決めていく。手をつないでジグザグのアーチをつくって、その下を人が歩いていけるようにしたり、ビルの壁に頭を打ちつけるようなポーズをとったり。私自身も早速、何かポーズを考えてくれと言われたので、合掌のポーズをその場で考案。4人、交差点のそれぞれの角に合掌しながらしばらく立っていた。

ほとんどの人は一瞥もせずにいそいそと通り過ぎていく。それでも、何人かは少し表情を変える。無表情だった表情に生気がみなぎってきて、生き生きしたまなざしをこちらになげかけたり、ニヤッとしたり、ぽかんと眺めたり。一人だけ、じっと見つめて立ち止まり、「何をしているの?」とたずねる人にいたった人もいた。サラリーマンスーツを着た人ではなく、ジーンズ姿の若者で、バックパックの旅を続けている途中に、たまたま金融街の通勤時間にまきこまれたかのようにみえた。しかしメンバーはそれに対して何も答えず、ただ、「あなたの質問が私たちの答えです」とつぶやくだけ。

ようするに遅ればせのミニマリズム・アートではないか、といわれるかもしれない。しかし4人のうち、アートと直接関わりがあるのは、パフォーマンス・アートで修士号をとったというピエロの大道芸もやるというケイト一人。後は、ダンサーでライター兼エディターのリサルースに、ヨガインストラクター兼占星術師とパークレーの市議会議員の男性と多彩なバックグラウンドの30代後半くらいの白人ばかりの今は4人のメンバーで、SANEがはじまった経緯をきいても、アートの実験としてこれを始めたというより、社会運動一般を批判しよう、そこに一石を投じようとの意図の方が強かったようだ。最初のパフォーマンスは、2011年11月のオークランドを占拠せよの現場だった。⁴⁵ 声高に自分たちの主張を叫ぶ人たちのただ中で、叫ぶ以外のことをやった方がパワフルじゃないかと思いついたのが、きっかけだったという。

グローバルジャスティスムーブメントに代表されるような従来の社会運動——占拠運動も基本的にこの流れをくむ——では、大企業や銀行、証券会社の不正を責める。あるいは中産階級の人たちにまで、自分たちの生活がどれほど貧しい国々の人たちの犠牲でなりたっているかを強調し、1パーセントの有産階級のみならず、ミドルクラスの人たちの良心の呵責をもあおりたてようとする。もちろんそれらの多くは事実だし、知る必要はある。ただ、アメリカ西海岸のようにそうした知識が既になじりというほど共有され、それでも社会矛盾が野放しにされているのだとすれば、これはもう意識の問題である。意識がこうした事柄に向かって閉ざされている人たちに、どんなにきつい言葉を投げても、どんなに大声で叫んでもはじまらない。だから彼らはあえて何を言うこともやめたのだという。だからプラカードを掲げるにしてもそれは白紙だし、質問されても答えない。

しかしうまくいけば、金融街のラッシュアワーの人の流れと鋭いコントラストをなす、彼らが生み出すこの空白、静謐の空間から、意識を新たにするような、別の世界の空気を感じてくれるかもしれない。メッセージを伝える

▶45 私がこれに参加したときは、ちょうど半年目にあたる。が、その後1月足らずで解散してしまった。SANEは拡張性と持続性で考える限り、成功した運動だとはとてもいえない。メンバーは4~5人のままだし、1年ほど続いただけで、途絶えてしまった。

先ほど、クリティカル・マスやパーキング・ディのような新しい世界をいま、ここでつくる実現の政治的社会運動は、一応、誰の目にも明らかな政治的なメッセージを掲げているけれど、それは実践される中、拘束力を失い、参加者それぞれがそこに持ちこむものによって思いもかけぬものに発展、展開していくと述べた。しかしだからといって、そうした誰の目にも明らかな政治的メッセージが最初にあるのは、無駄なことではなく、多くの人がそれに引きつけられ、自由に自分の関心、主張を持ちこむ入り口としての機能を果たす。

SANEが拡張性、持続性を欠いた理由を考えるに、やはり先ほどの、ジャンピングボード、仮設としての政治的メッセージが、なかったからではないだろうか? ようするに、ちと敷居が高すぎたのである。

のをあきらめる代わりに、意識変革を仕掛ける。先ほどのエンデのプログラムと同じである。

つまりSANEのこのような一見、遅ればせのアヴァンギャルド風の無愛想さは、別の世界の体現者であることを、守り抜くためのものだったのだ。そのようにして彼らは、何も言わずにただ立ちつくし、静けさと無が支配する別の世界の影を、金融街のあわただしい日常のただ中に差しこませ、人々が違うまなざしでこの日常を眺めれるようにすることに全力を傾けるのだ。

うまくいけば、職場へ急ぐ人々が、ほんの一瞬でも立ち止まり、自分がどこにいるか、何をしているのかとか、何も実質的な財は生み出さぬ代わりに、資本の流れを操作してラットレースと弱肉強食の競争をあおり立てるばかりのこの仕事に、何か意味があるのだろうか…などと自問自答をしはじめるかもしれない。

というわけで、彼らのパフォーマンスが表す言葉の不在、真っ白な空白、平安、静謐感、見る人の心を映し出す鏡の役割を果たすことを意図したものである。だから、「あなたの質問が私たちの答えです」という言葉は別に煙に巻くつもりもなく、文字通りのことを意味する。

またこれは、考え抜いた上で選んだ戦略でもある。つまり、自分で自分の異常さなり、過ちなりに気づかない限り、人は本当に生き方を変えることはできない。だから効果をあげようと思ったら、なすべきは、あなたは間違っていますよと説得することではなく、自分で自分の姿を眺め、自力でこれを気づきと考察の対象にするためのきっかけを与えることだけだというのである。

SANE「正気」という変わった命名には、いわゆるラットレースと弱肉強食の競争が支配する資本主義の世界こそINSANE、狂っているというあてこすりも感じられる。この狂った世界のただ中で、静謐な自己省察のための空間をひらく自分たちこそ、正気なのだといいたげだ。

しかし、実際、メンバーの体験談を聞いてみると、彼らのパフォーマンスに対する、少なくとも一番目立つ反応は、自己省察に導かれるというより、脅威を感じるということだ。「何にもしていないのに、ただ、通りで立ってる、質問しても答えない…というだけで警察を呼ぶ人がいる」。静止しているのが他の人の通行や清掃の邪魔になるということはないかと訊くと、「歩いているときでさえ、その前の店のオーナーが警察を呼んだことがあったよ。歩き方がとてもスローモーションで他の人たちと違ったのはたしかだけど」。警察が呼ばれても、逮捕する理由が見つからないので、毒づきながらも戻っていくだけなのだ。

そういう体験に何度もあった彼らが痛感したのは、パブリックスペースという表向きはみんなのための場所で、私たちが暗黙の了解で期待されている行為の範囲が本当に狭いこと。その狭い範囲から少しでも外れた振る舞いをすると、たちまち見る人たちは不安になり、自分より強いオーソリティ、警察にたすけを求める。

9.11以降、いつ、どこでいきなり起こるかもしれないテロリズムに対する漠然とした不安が強まり、とくに「愛国法」発令とともにセキュリティ管理の名の下に、パブリックスペースでの表現の自由もかなり切り詰められてき

たことは知っていた。それは、通りや広場でダンスをするだけで逮捕される、あるいは座りこんだり、寝転んだだけで逮捕されるといったヒステリックな域にも達している。しかしこれは国家権力が一方的に進めているプロセスなのではなく、彼らが話す店のオーナーのような人たちの支持をうけてのことなのだ。

しかし、アメリカで最も自由な都市であるはずのサンフランシスコでさえそこまで来ている、と聞くのはショックだった。

SANEが仕掛ける自己省察はしたがって、だから、見る人が自分の生活を省みる…というところまではいたっているようには見えないけれど、自分の中にある他者に対する警戒心、不寛容さ、アグレッションに気づかせる、というところまでは届きそうだ。こうした不安がいかにパラノイア的で、現実離れしていて、馬鹿げているかを暴露するためにも、SANEのパフォーマンスは、静謐と非暴力に徹するのだという。

「でも、無防備 vulnerableであろうとするほど、脅威を感じる人が多いってのにも気づいたわ」。

ケイトにそういわれて私が思いついたのは、彼らを見る金融街の人々は、すでに自分が築き上げた世界に亀裂が走っているということにうすうす気づいているのだけど、必死でそれを認めるのを避けてるのではないかということ。そんなときにSANEのパフォーマンスに出くわすと、その「うすうす気づいている」ことが、一挙に表にでてしまう恐れがある。だから腫れ物に触られたかのような非合理的な反応をして、何もしない彼らを排除しようとするのではないか。実際、自分が一生かけてやってきたこと、苦勞して築き上げてきた世界が意味を失い瓦解してしまうことほど、恐ろしいことはないからだ。

というのも、彼らの生き方は、何も持たず、自分を権威づけたり、正当化することもない、ただただ無防備に、非暴力的になろうとするSANEのパフォーマンスの反対で、貨幣という力を求めて、策術をめぐるせ、鎧兜に身をかためて競争することでなりたっているのだから。SANEが何も持たず、自分たちの存在をむき出しにするのに対して、彼らは所有を最大化して、自分の存在を隠そうとする。というのも誰も信じられないからである。とくに自分が苦勞して築き上げてきた所有物や世界観にダメージを与えるかもしれないわけの分からない他者の存在は恐ろしいわけで、SANEのパフォーマンスを見ただけで警察を呼びたいくなる気持ちも想像がつく。

もしこの思いつきが正しいなら、SANEのパフォーマンスの効果は、結構いい線を行っていることになる。

無防備をきわめ、何をやっているのか、権威づけたり正当化するあらゆる言葉も抜きで、ただ存在をむき出しにすることに徹するSANEパフォーマンスを体験しながら、もう一つ私が思い出したことがある。カストロの街中やクリティカル・マスで何度かみかけたヌーディストたちの存在だ。私はサンフランシスコの街はとても好きだけど、形が美しいわけでもないのに、脂肪でたるんだ姿を公衆の面前にさらす彼らだけは苦手で不可解そのものだったのだが、SANEのパフォーマンスをともにしている間、ピンと来た。無防備といえ、少なくとも物理的に見る限り、真っ裸であることは、SANEのパ

フォーマンスをしのぐ、その極致にあるといえる。実際、これほど他者を恐れ、武器を積み上げ、肩肘はって競争する人たちがかりのアメりカ社会にあって、丸腰で何にも持たず、隠していないことが一目瞭然の素っ裸な身体を公衆の面前でさらすことは、それだけで何か転覆的なことなのだ。しかしSANEと同じく、それだけ人の不安をかき立てる。無防備であるほど脅威とみなされるこの倒錯した社会にあっては、社会的な暴力と見なされるのである。

以上は彼らの話をきいたり、外から彼らの活動を観察して私が行った、理屈っぽい分析にすぎない。しかし私自身、パフォーマンスに参加して一緒にストリートに立ってみて感じたのは、そうした理屈を超えた楽しさと、解放感だった。

実際に、見るよりもやってる当人の方がずっと楽しい。SANE結成後、今日で6ヶ月目にあたる。そこまで続けてる動機を訊くと、「ぼくは気晴らしに来てるんだ」とパークレーの市議員はいい、「私は修行に来ているの」とピエロのケイト。「まわりとぼくたちの反応のやり取りのときに流れるエネルギーをぼくはヨガの修行に取り入れたいね」はヨガインストラクター兼占星術師の言。それぞれ全然違う体験をしているようではあるが、が少なくとも半年、毎週続いたのは、やはりよろこびの政治学的な側面によるものだ。

私自身が参加した際に味わったよろこび、とくに解放感はどこからきたのか？

普通私たちが街に出かけ、他者と会うときには、何か目的があったり、慣習的で、半ば自動的な行動パターン、ルーティーンの中にいる。そうした縛りを一切抜きにして、街中の、しかも沢山の人の前に立っていて、ただただ、自分が存在するという事実だけをさらす。そして、アーチをつくったり合掌したりと、その時々思いついたポーズをして、静かに瞑想しながら立っている。最初はさすがに慣れぬことをやることにつきまとう抵抗感があり、また恥ずかしくもあったが、その壁を乗り越えると、自分のちっぽけなエゴの殻が壊れて、街や人々に溶けこみ一つになる、エロティックなまでの解放感がどっと押し寄せてくる。

実際、こんな風に何も持たず、理由もなく、言葉のない次元で都市に接したことはないことに気づいた。都市がいつもとまったく違った姿を見せて、滑稽で不思議なものが沢山転がった子供の遊び場所のように見えてくる。その辺に落ちているタバコのパッケージものを拾い上げて髪飾りにして頭につけたり、銀行のビルのファサードによじ上って四つん這いのポーズをとったり。まじめな金融街を、こんなに楽しい遊び場所と見なすこと自体がとてもラディカルで転覆的で、犯罪の匂いさえ帯びてみえてくる。そのようにして彼らは猥雑そのものである言葉を越えた状態から、都市の意味を不断に新たに組みかえているのである。

シチュアシオニストの「漂流」の概念を思い出し、彼らとの影響関係は？と訊くと、実は大ありで、初めて間もない頃には、サンフランシスコで一番高いBank of Americaのまわりをゆっくり歩いて回りながら、ギィ・ドゥポールの『スペクタクルの社会』の最初の2章を朗読したのだそう。

28

不安の蔓延との闘いとしての ナウトピアの運動

9.11以降、アメリカで高まってきた排除と不寛容、パブリックスペースの表現の自由の削減への風潮は、サンフランシスコも影響を免れなかったのは、今確認した通りだ。

この傾向が強まると、クリエイティブな表現の実験も、新しい世界をつくるころみも、少なくともパブリックスペースを舞台にはまったくできなくなってしまう。それはとりもなおさず、サンフランシスコを他の街とまったく変わらない画一的な魅力に乏しい街にしてしまうことにつながるだろう。

たとえば、2010年には、街の歩道に座ったり寝ころぶと逮捕されるという Sit-lie Lawが成立。また2013年に入ってから、パブリック・スペースで裸になってはいけないという条例も市議会にとおったばかりである。違反者として初めて逮捕された者には100ドルの罰金、2回目は200ドル、3回目は500ドル罰金から懲役1年までの刑が課されるのだとか。9.11以降とみに高まり、愛国法の執行とともに加速がついた表現の自由を削減する一連の法案は、サンフランシスコもその影響下に置こうとしているのである。

しかし問題は自由な表現が物理的にパブリックスペースで法的に可能かどうかより深刻である。というのも、これまで見てきたように、サンフランシスコのナウトピアの運動をパワフルにしていたのは、よろこびの政治学だ。それは理念を、抽象的な概念や、いつか果たされるあてのない約束としてではなく、いま、ここで既に実現されたものとして、全身で生き、味わい、他者と共有することからなっている。共有といえ、よろこびの政治学は、深い意味で、本質的に公的である。というのも、たとえば心底よろこんでいる人（よろこびを全身で実現している人）には、あらゆるものがバラ色に見え、偶然会った誰にでも優しくするように、実現された理念も、無条件の贈与となり、あらゆる方向、あらゆる人へと溢れ出、放射されていかざるを得ないからである。身内や近親者、好きな人、趣味嗜好をともにする均質集団といった私的な領域の圏内に閉ざされるのに抗い、偶然のあらゆる人々との出会いに開かれた、ストリートのようなパブリックスペースにその理念的内実を溢れさせていく。そうした一見、露出症的な性向は、よろこびの政治学の生理のようなもので、拒まれると、その発現全体が萎縮してしまう。

パブリックスペースでの表現の自由をどんどん切り詰めていく法の執行などの一連の動きの背景をなす、この不安の蔓延を防ぐには、ではどうすればいいか？ よろこびの政治学を、できる範囲でも、実践し続け、参加者、支持者を増やし、これと対抗するポジティブな世界を作り続けていくしかない。その典型ともいえるナウトピアの運動をここで紹介しよう。

事例紹介「歩道は皆のためのもの」

人の心を閉ざし、不寛容にし、表現の自由を切り詰め、多様性やマイノリティ

▶46 Andy Blue、シカゴ生まれ。当時サンフランシスコ市立大学の国際学の修士学生だった。以下の記述は2011年3月19日にサンフランシスコ、ドレスパーク近くのアンディの家で行ったインタビュー、および彼の論文“Contested Public Space”(2010年、未公開)による。

の存在を排除するこの「他者に対するパラノイ的な恐怖が蔓延した空気」をなんとかしたいと、ナウトピア的なアクションを仕掛ける活動家が多い。日にちを決めて、皆で一斉に、歩道で好きなことをやる「歩道は皆のためのもの」Sidewalks for Peopleをオーガナイズしたアンディ・ブルーもそうだ。⁴⁶「歩道は皆のためのもの」は、サンフランシスコの街の歩道で朝の7時から夜の11時までの間に、座ったり寝ころぶことを禁じる法律Sit-lie Lawに対する抗議運動として、2011年にはじまった。これは、ヒッピーの発祥地、ハイト・ストリートに今もたむろするホームレスの若者たちを警戒し、一掃するための法律だ。しかし昔ながらのサンフランシスコ市民にとってハイト・ストリート・キッズと呼ばれ親しまれている彼らは、ここのシンボルのようなもの。ヒッピーの時代の遺産だし、他のどこにも行く場所がない生え抜きのアウトサイダーでも、サンフランシスコならいれる。サンフランシスコの懐の広さの象徴のようなものだ。警戒されているというより親しまれている感が強い。

では、どうしてこのような法律ができたのか。90年代からのシリコンバレーを中心に起こったITブームの余波はサンフランシスコも襲い、とくに不動産投機の対象になった。その結果、地価、家賃が急上昇して、多くの元住人、とくに移民や対抗文化をこれまで担ってきたアーティストたちが街に住めなくなり、出ていくことになってしまった。その結果、人口構成が著しく変わり、高額所得者のとくにIT関係者が増えた。先ほど、SANEの事例のところでも問題視した、他者に対する不寛容や不安の蔓延という従来のサンフランシスコにはなかった要素が優勢になってきたのも、この人口構成の変化と連動しているという。

歩道で座ったり寝ころんだりすることを禁じるこのSit-lie Lawは、こうした不安の蔓延を背景に、ホームレスがいることで、場所の価値が下がることを警戒する不動産業界、観光業界のロビイストの影響により成立することになった。

この法律に対するこの反対運動「歩道は皆のためのもの」を組織したアンディ・ブルーは次のように言っている。「皆の場所であるはずのパブリックスペースで座ったり寝ころんだりするという、まったく自然で基本的な自由を表現することまで危機にさらしてしまうほどの、この不安の蔓延に対抗するために、何かポジティブなことをしなきゃいけないと思ったんだ」。

そのポジティブなこととは何か？ とにかく参加者各人が、自分の「する力」、内発的権力を存分に使って、歩道の使い方を自由に探求、実践すること。そこで生まれた表現を、お互いに支持し、鼓舞し、享受しあうこと。とくに歩道がみんなに開かれたパブリックスペースであるという利点を生かし、人が人を警戒する代わりに、心を開いてともに楽しみ、垣根を越えてコミュニケーションし、相互理解を深めるような場をつくること。

そのためには、あえて、何にもルールを作らない方がいい。

パーキング・ディの熱心な参加者で、マット・ゴンザレスの選挙キャンペーンでも活躍した彼は、この運動にもDIY的な脱中心性を持ちこんだ。日時を決めて、街中の歩道で一斉に何かをやる。しかしその「何か」は、やる人に完全にまかせる。ただ、当日はお互いにお互いの催しに参加しあえるように、

開催場所や趣旨は、グーグルマップとフェイスブックページに前もって告知するという方法をとった。

サンフランシスコでなければ、「いったいこのどこが社会運動なの？」という質問がかえってきそうだが、この自由度が功を奏して、当日は1000人を超える参加者が出る盛り上がりを見せ、歩道で音楽を演奏する人、歌う人、踊る人、カラフルな毛糸で編み物をしては、ガードレールやベンチや街灯など、パブリックスペースの様々な場所に歩道に自分の編んだニットのカバーをかぶせていく女の子たち、⁴⁷はてまた歩道にハンドメイドのバスタブを出して、歩道でお風呂に入る人など、さまざまなパフォーマーが歩道にあらわれ、一日ごった返すお祭り騒ぎになった。

イベント全体が、歩道でできるあらゆることをクリエイティブに探索しながら、サンフランシスコの豊かなストリートカルチャーにオマージュをささげたり、そこに新たな一ページを加える、ストリートカルチャーの実践の場になった。また、Sit-lie Lawが、単にホームレスを一掃するだけでなく、どれだけ豊かな文化を街から排斥しようとしているかをデモンストレーションする場にもなった。

このクリエイティブで自由な内発的権力の爆発、この多様性、この解放性、ユーモラスでコミュニケーティブな雰囲気こそ、他者に対する不安が蔓延する街の空気を緩めるのに必要な「何かポジティブなこと」だったのである。実際、この催しのおかげで、歩道以外で偶然行き交う以外の方法では、まったく出会いようのない多様な人たちが、ともに楽しんだりコミュニケーションできる場所もできて、他者に対するパラノイア的な恐怖は多分にやわらげられることが期待される。犯罪率も低下する可能性がある。多様な人々の交流や雑居的な状態が、犯罪率低下とどれだけ相関するかについては、ジェイン・ジェコブスが既に証明済みだ。⁴⁸

それぞれの参加者が提供した催しは、本当に多様だったにもかかわらず、その団結ぶりもすばらしかった。参加者たちは、サンフランシスコが本来持っていた、どんな逸脱したアウトサイダーも面白がって受け入れる寛容さを大切にしたいと思っているヒッピーの生き残りともいえるべき人たちだ。彼らが心から心配しているのは、この街まで、他の数多のアメリカの都市のように資本の力と利潤原理ばかりが支配した場所になってしまうこと。あるいは、異質な他者のあらゆる痕跡を消して衛生無害なものにしてしまうミドルクラスの価値観が優勢な場所になってしまうこと。これに対抗するには、その対極にある世界を実際に自分たちの手でつくって実物提示して参加を促し、それがどんなに豊かで、喜びに満ちているか、実際に体得して、その味をしめてもらうしかない。つまり、よるこびの政治学によるナウトピアの建設である。アンディはこのイベントを定期的に続けたいと言っている。それにより、実際ストリートカルチャーが生きたものとして蓄積されて、パブリックスペースでの行動を規制する法律の背後にある不安が蔓延した空気も次第に晴れていくことが期待される。

▶47 スウェーデン発のKnittapleaseと呼ばれる運動で、パブリックスペースは灰色で寒々としているという抗議行動でもある。「歩道は皆のためのもの」に、アフィニティ・グループのかたちで参加していた。

▶48 ジェイン・ジェコブス『アメリカ都市の死と生』鹿島出版会、2010年。